

口頭伝承

はじめに

伝説は玄竜地獄・チアダックボなどの地名に関するものや、天狗・河童・狐・ヤマイヌ・ムジナの話の数が多し。

昔話は数が少ないが、すでにほとんど語られなくなった現在、猿轡・だんごだんご・蓬と菖蒲・ほととぎすの話が採集された。どのような昔話が根強く語り継がれるか、興味ある問題を示しているといえよう。

地名には、特に注目すべきものは見当らない。

命名に際しても、三人の亀さん・三人の森さんを区別するための配慮は見られるが、従来の調査地で見られたような渾名に類するものはごく少い。かつての村の人間像ともいべきタイプを捕えることがむずかしかったのか、またその露頭に触れ、更に探り出す機会に恵まれなかったのかとも思われる。

「流行語・地口のようなものにも製作者があったと思われる。寒い、長い冬の利根地方では炉端の軽口に屢々これが用いられたらしい」として、「過ぎたるもの」の例が数種採集された。多那・大島・大洞・東入りなど、どれも白沢の人たちにとっては、身近かのもので、ここから話の緒はほぐれていたものと思う。

(上野 勇)

伝説

地名伝説

玄竜地獄

越後からきた玄竜という漢法医がいた。この人はどんな暗い夜でもチヨウチンを持たないで手さぐりで歩いた。或る晩赤城根の方へ往診にいった帰りに大クソレで落ちて死んでしまった。その場所を玄竜地獄と呼ぶようになった。(岩室)

小判を埋めた話

オクサキというところに水の湧出すところがある。そこに他所からきて鍛冶屋をしていた人があった。主に農具などをつくっていて、大そう金をのこした。たまたま、この鍛冶屋が旅に出ているとき全焼してしまったので、あきらめてどこかへ行ってしまった。そのあと、小判が岩の下に埋めてあるというので、村の将来のためにと埋ておいたというので、村人が掘ってみたが出なかった。青木の人もきて掘ったが何も出なかった。(岩室)

チアダックボ

平出村内、久屋に通ずる道の沢にこの地名がある。むかしタキタナの原で大合戦があり、その時の血がこの沢を流れたのでこうよぶ。またこはキアダックボともいう。(平出)

雨乞山

雨乞山に雲谷寺という寺があった。その寺の釣鐘を弁慶が盗んで、引きずって京都まで持って行った。引きずって行ったために、イボがすり

へっている。「上州高平」と書かれているその釣鐘は今でも京都にある
そうである。「註記・この話川場の話なれど、尾合にて採集、川場出身
の鶴淵みよ氏談（明治二十年生）」

釣鐘が盗まれたと聞いた本尊様（阿弥陀様）が弁慶を追ったが、追いつ
かなかつた。追っている途中で、腹がすいてどうしようもなくなり、
下久屋部落で食をふるまってくれするように頼み、粟飯を食べさせてもら
った。このことから、下久屋部落の人が雲谷寺の壇中となった。「粟飯
壇中」とはここからきている。（下古）

河童の薬

大尽（川場村谷地の関氏）の兄（アニイ）が馬を洗いに行つた処が、
河童が馬の尻尾に掴っていたので、面白いと云つて桶をかぶせて置い
た。河童が是非逃がしてくれろ、そうすれば大切な河童の薬を教えるか
らと云つた。そこで薬の作り方を教わつた。それは、五月のお節句に百
色の草をとつて日陰干しにして、乾かして黒焼きにし、今一つだけ薬種
屋から買つて来て入れると出来上る薬だつた。

後々になつて薬屋から仲間に入れと云つて来たので、薬作りがむずか
しくなり止めにした。山へ行つて旦那が刈つて来るのだが、百種刈つた
が一種だけは家で作らなければならなかつた。茶の間に石が敷いてある
所があり、百種を一つかみずつ、つるして乾けばもして黒焼の薬とし
て、それをつけたり、飲んだりした。（尾合にて）

昔話

猿 聲

昔、一人の爺さんに三人娘があつた。一人百姓で山の畑をうなつてい
たがコワイので（疲れて）休んだ。そこで、つい「誰かこんな畑をうな
つてくれる人はいかなあ。畑うないしてくれば三人の娘の一人位はく
れるんだがなあ。」と独り言を云つた。そしたら山の猿がそれを聞いて

いて、そこへ出て来て、「お爺さん、何云つてる」というので、又うっ
かりと「仕事が大事なんで、誰か畑うないしてくれば娘の一人位やる
が」と云つた。そしたら猿が「どれ俺がうなつてやるべ」と云つて、お
爺さんのえんがをかりて、忽ちうなつてくれた。爺さんは猿に娘もらわ
れる事が心配になつて、晩方家に帰つてもしおれていた。そしたら娘が
三人して「爺さんどうかしたかい。体でもわるいか」といつた。爺さん
は、「体なんかわるくはねえけれど、猿に畑うなつてくれれば娘の一人
くれると云つてしまつた。どうか一人嫁つてくれねえか」と云つた。一
の娘は「とんだこんだ、誰が山の猿の嫁になるべ」という。次の娘も同
じで、きいてくれない。末の娘は「爺さん爺さん、そんなに心配すん
な。おれが猿がとこへいぐよ。」と云つた。それで末の娘がいろいろ用
意して猿の処へお嫁にいく事になつた。その日に猿が迎えに来たので一
緒に山へ行つた。その翌日「お里がえりだが、お爺さんにお土産もつて
行かねばならねえ。」と云つた。猿が「何がいいんだ」というので、「お
爺さんは餅が好きだから」といつたら「そんだけ餅もつてゆくべや」と
云つた。そこで猿が餅ついて、何に入れてゆくかなというから「爺さん
はいろいろ嫌いがあつて重箱は臭えと云う」といつて、立白ごと猿どん
に背負せて出かけた。崖つ淵を二人で通つて行くと、その崖にジシヤの
花が咲いていた。そこへ来ると、「おらが爺さんはあの花がわけなしに
好きだ」といつた。猿が「ぢゃあ、登つてとるべや」と白を下るそうとす
ると、「そこいらに白おくと土臭くなつてお爺さんは食わねえよ」と云
うので、仕方ねえから猿は白背負つたまま、木に上つたと。そしたらジ
シヤの木が折れて猿は白と一緒に流れてしまつた。

「俺は 流れてもいいから
嫁ごは生きて助かれよ」

と猿が云つたと。そこで家へ逃げて来て、「もう猿どんは来ねえよ」
と云つたと。

市が酒買つちやつた。（尾合）

「だんごだんご」

一寸くらか山の中で、頭の足らぬ人があった。やっぱり嫁もらって嫁の家へ行つたが、いろいろ御馳走になつた。その中、団子を御馳走になつて、これは何ちゆうもんだと聞いた。これはだんごちゆうもんだと教わつた。そこで忘れちやなんねえぞと、「団子。団子。団子。団子」と称えつづけながら帰つて来たと。そうすると途中に堰があつたので、「やつとこな」とかけ声してとび越した。そしたら後は「やつとこなやつとこな、やつとこな」と唱えつづけて家へ帰るなり、「やつとこな作つてくれ」と云つた。家の者は「そんな物はねえ」といつて棒でどうづいたと。そしたら団子のようなコブが出来たので、「ホレ分らね事いりから、団子みてえなコブが出来らあ。」と云つた。それを聞くと「あ、その団子作つてくれえ」と云つた。(尾合)

蓬と菖蒲

昔魔物が人間に化けて、人を食おうとして、ある百姓家に入つて来た。魔物は女に化けていて、普段は変つた事もないけれど、物を食う時家の人と一緒に食わず、いつも一人で食つた。これを不思議に思つて、男が二階からそつとのぞいていたら、おそろしい鬼みtainな本性に戻つて物を食つていた。とてもたまげていると、女はこれは覚られたなと思ひ、姿をあらわして、男を籠の中に押し込んで山の方へ向いて背負つて走り出した。えらい早さでかけるのでおそろしいが、どこへ連れてゆかれるか男はなおこわくていたところ、ちよど木の枝が一本道の上へ出ているところがあつたので、ひょいと飛びついて籠からぬけて逃げてかえつた。化物は空になつたのも知らないで山へとんでいった。男は家へ帰ると、急いで蓬と菖蒲を軒端にさしめぐらした。そこへ化物が気がついて戻つて来たが、人が見えず、蓬と菖蒲ばかりなので、もうこの家は空家になつたのかと、どこかへ行つてしまつたという。(尾合)

ホトトギス

ホトトギスは「ホト突つ切つた」と啼く。むかし兄弟二人があつたが兄の方が盲で、弟が働いて兄を養つていたが、兄は盲のひがみて「弟はおれが見えないのをよいことにして、美味いところは自分で食ひ、まずいところだけくれるのだらう」と思ひこんで弟を責めた。弟はこれほどまでしてやつても兄にはわかつてもらえないのかと、「それでは兄さん私のどを割いて見てくれ」と言つた。兄は弟のどを割いてみたところ、大根の尻尾や、魚の頭などばかり出てきた。後悔した兄はその日から鳥になり「弟のど突つ切つた」と言つて啼くようになった。(尾合)

怪異

キツネ

金井のおじさんが沼田から魚を買つて夕方暗くなりかかつた道を帰つて来て、カンノン橋の所まで来たのはおぼえているが、そこから変なところへ入つちやつて、どこへ行こうとしてもわからず、何としてもそこから出られなくなつちやつた。今のヤンヅリのテッペンあたりの森らしい辺に入つていたのだらう。おじさんは「これは狐にやられたな、魚がほしいんだな」と思つたので、持つて来た魚を「食いたければもつてけよ」といつてぶんなげたという。ヤゲン森の辺だという。

そのうちに一番どりが鳴いた。それから間もなく明りがポツとついたので、「あれっ」と思つて見ると、それがツタサンのおぼあが、朝早く用があつて朝飯を早く煮たので明りをつけたのだというから、まったくの一晚中わからずに、どうにも歩けられねえんだということだった。魚はとられずにぶんなげたところにあつた。(上古)

うちのおじい連中が畑へ行つていたら、東へ行く街道を東入の大將がやつて来て、花ざかりのソバ畑の中へ入つてゆき、頭にはちまきをしてフンドシ一つになつて水を泳ぐかっこうをしてソバ畑を一生懸命こねま

わしているの、これは変だというのでみんな近くへ行つて、「何しているんだやあ」というと、ハッとしてようやく自分に戻り「海へ行って水を泳ぐつもりだった」といった。村の人たちは、狐にだまされたんだらうといっていた。(上古)

キツネ

五郎さんの家のあるところの坂のあたりは、もとはとてもキツネがいてウヨウヨしていたという。そこにはキツネの掘つた穴があり、たくさんの子キツネがいて、いつということもなしに他人の家のものを引いて行ってしまうので困つてしまい、キツネの子が生まれると赤飯をたいて、穴のところへ行つてあげてきた。明治初めのころの話である。

(上古)

家の子がレンちゃんの山をしているころ、よく仕事に行くと、まだ十四、五のことで一人での夜道がおつかなくて、ヨキなどを担いでやつと帰つて来ていたが、モンサンの墓のところを通つたら、オッチだか誰だかが死んだ当夜だったのでびくびくしながらそこを通りがかつたら石塔の陰から白い手が出て来たので、「それ化けて出た」というので一目散にとんで来て、正夫さんにつつかかった。「お前何をそんなにあわて来るんだや」というので、「おじさんお化けが出た」といっても信じてくれないので二人で墓へ行つてみたところ、こじきがお墓の裏にいた。埋めた当夜だから供えてある新しいダンゴを墓の後からとって食べていたのだ。(上古)

ムジナのしかえし

炭やきをしていたころのことで、ムジナの巣をみつけたので昼間その巣をいじくつたのだそう。その日は、夜おそくなって炭が出るので山にいたところが、夜おそくになって下の方からオフロが赤ん坊を背負つて来るように聞え、赤ん坊の泣く声が出てくるのだというが、誰も近くには来ていない。いやな気分になってしまったという。そこですぐに

火を消して逃げて来たので、炭をひとかまみんだめにしてしまったという。昼間のことがあるので、ムジナが怒つて鳴いたんだらうが、自分で良心がとがめているからムジナの鳴き声でもそんな気がしたのだらう。(上古)

ヤマイヌ

金井さんのじいさんは、若い時分平出に夜遊びに行つたが、ある日のこと、例のように平出に行つたところ「今晚山犬が出そうだから今度出たらぶつ殺してくれべえ」というのでベータのかいを持って帰つて来たところ、いつもの山にかかるところで「ウワー」というので出たのだという。そこでいきなりベータでぶつくらしたところが、いづくあいに死んだという。ところがいっしょに歩いてきた連れがないので「オ、イ、どうした」といつたら、そばにあったコガキの木にはいあがつていたのだという。「一匹殺したから下りてこいや」といって、「おめえ背負つて行けい」と山犬を背負わせて来たところが、そうしたらまたウワーというので出て来たので、今度は大変だというわけで背負っていたのをぶちやつて、ホーホーのていで逃げて来たという。

明治の前あたりには、山犬はうんといたらしい。(上古)

鉄砲は、借りて来てやつたぐらいで、最近でも村内に二人ぐらいしかいない。

もとは、いのしし・しか・山犬のようなのがたくさん出て来たので、これを防いだのだという。

昔は、山犬はこの辺にも大変いたらしい話を聞いている。

明治になってからも、キツネがお産をした時には、赤飯をふかして、穴のところへ持つて行つておいたという。(上古)

狐にばかされた話

夏の夜のことで、シボシボ雨が降りそうなところで、沼田の帰りで急いで来たところが、前の方がボーンとしてきたと思うと、わずか下のところに火が燃えて、家も見えるのだから本当に近い。わずかに歩いてく

るとパツと消えてしまふ。

最初はタカナイ山のところをチョウチンが下から上って行くものだから、これはコクゾウサマのお祭り、にぎやかだと思つた。けれども近すぎるなあ、これはおかしいなあと思つているうちにこっちの方で高平のあっちの方が火事になつちやうて、それがだんだんこっちへ歩いて来る。県道のあるところを走つて来るのだ。小屋のところもすこい火事に見えるので、これは本物にちがいないと思つているうちに、ポカツと消えた。別に何も持ちものはとられなかったが、火が消えたときはさみしいような、いい気持ではなかった。(上古)

白蛇が出た話

大阪夏の陣の時、各村から人夫が出されたが生枝では行くものがないので、浪人の太郎、三郎にたのみ、無事に帰つて来れば、村の半分の土地を与える約束であつたが、帰つて来るなり二人を殺してしまつた。その当時の名主の家の縁の下に白蛇が出て恐しかったが、それからは流行の厄病が広がり村人の多くが死んでしまつた。(生枝)

岡村武夫さんが小学校五、六年生の春狐に化かされた。消防士が三十人もでてさがしたことがある。そのとき、武夫々々と呼ぶので、つきはなされると家の近くにひとりで生きていた。数坂辺にいた狐だろうという。十二様の近くにも大きな何かがあるという。(岩室)

お客に行く時、こいをお土産に持つて行つたところ、泊っている間、連れて行つた赤ん坊が夜泣きをした。帰つて来ても三晩泣くので不思議に思ふ家の外に出て見たら、いたちが庭で踊っているのつかまえて殺したら、夜泣きがなおつた。

たつさんの母が、いたちが毎晩悪いことをして困らせるので、追まわし、殺しそこなつたところ、あくる晩から、ほかの人には見えないがその人には、にじになって見せた。その当時は、いたちのことを、いたちが坊主といつていた。

岩室の十二様にお願を掛け、満願の日に行つて見たら、十二様が十二

ひとえを着て表われた。

自分の赤ん坊が死んでしまつたので手に、印をつけて、よいところに生れ替るやうに唱えて葬つたところ印をつけた子どもが生れた。

昔は、各家に「ぬし」という、青大将のへびがいて、大切に、かまつたり、殺したりしないでおいた。このへびは、すなおな性質で、八幡様ともいわれていた。

寺の前に天狗がいた。ある任職が女と仲よくなつて二人で通つたところ、天狗が怒り任職をひねりつぶしてしまつた。

今年五十年祭が行なわれた任職新海さんは、ほんとうに狐につかれ、寝床に白狐の毛がいっぱい落ちていたという話がある。

あるおばあさんが狐につかれ、親類衆が集り、寝ているおばあさんに向つて「ごちそうをくれるから、はなれる」と口々にいい、油揚げをくれたりして、追い立て、山に送つて行つた。おどろいたおばあさんは一生けんめい走つたがつかれ果て腰をぬかしてしまふ。その後まもなく死んでしまつた。

さじゅうさんという人には、へびがついて舌を、へびのように常に出したり、入れたりしていた。(生枝)

命 名

地形名

ヒラマ 傾斜地。平出の中に観音ヒラというのもあり、ヒラマはまた

ヒラともいつた。

ヒラ 山の斜面

テーラ 平地のこと

クボ 低地

人名

亀さんという人三人あり、その区別

(岩室)

カジカメさん 鍛冶屋の亀さん

タノカメさん 田中(屋号)の亀さん

イノカメさん 父がイノさんの亀さん

重さん二人あり、その区別

ヨシ重さん 父がヨシさんの子

白髪重さん 白髪だったので

(上古)

森さんという人が村に三人いたので、これをそれぞれ「アツブの森さん」「泣き虫森さん」「きんたま森さん」と呼んで区別した。アツブの森さんはいつも「アツブ、アツブ」といつていたし、泣き虫森さんは愚図愚図とクドクドのでそういつた。きんたま森さんは行儀が悪いので特にそうよんだ。

精さんという人も三人いたので、「カゴ精さん」(商売がカゴ屋だったから)「オタ精さん」「おかみさんがおたみさんといつたから)「石屋の精さん」(職業が石工であったから)とそれぞれ区別してよんだ。ほかにも「カゴ敏さん」「綿屋の敏さん」という人もいた。いずれも村のなかで人を分類するためにとられたものだというのである。(尾合)

タメかけ蔵さん、この人はタメを一荷かついてだま馬方をした。チヨンマゲを最後まで結っていて、坂道でも平気で、八十歳になってもうないことができた。(岩室)

せかせか幸さん この人は岡村幸作さんのことで、せかせかよく働いたので有名である。(岩室)

方言

ツモノガシ 女の人がゆっくり楽しんで遊ぶこと。今日は女衆はつものもがしに沼田へ出たなどという。

セツチュウラク セつちゅうらくのことをしゃべるなどといい、自分に分好都合、分のいいしゃべりかたをしたときに用いる。

ズツケ 等量交換、黒豆と米はズツケになるなど。

シトシッタ 藪一貫二百匁のこと。

コグソツコ 少いこと、蚕糞にたとえたもの。

オカマゲロー ひきがえる。

ヘンゲール 話がかわる。

ヤレテ うすくなる。布などが古くなりうすくなる場合をいう。

チャンガラチャンガラ よく歩けない。

ツヅラテ つづいて。

カジカツカリ かじかたりのこと。

鳥などの啼き声

ホホジロ チョッキラ五粒二朱負けた

カエル ゲコゲコ

四十雀 チンチンカラカラ

(尾合)

軽口・俚謡

土地は流行語、地口のようなものにも製作者があったと思われる。寒い、長い冬の利根地方では伊端の軽口に屢々これが用いられたらしい。

○過ぎたるもの

多那村に過ぎたるものが二つあり、諏訪の桐の木、長頭石

多那村に過ぎたるものが二つあり、要助がかかあと諏訪の桐

大島に過ぎたるものが二つあり、(後半失)

大洞に過ぎたるものが三つあり、(後半失)

参考

東入りに過ぎたるものが二つあり、賢和の筆に、藪原騒動

本所に過ぎたるものが二つあり、津軽大名に炭屋の塩原

○地名よみこみ俚謡
この有名な言葉は利根の軽口に何か関係あるように思われる。

石戸みて、二度とみられぬ大島田栃又かくして、尻は多那村

(尾合にて)

「白沢村誌」狂歌の名人桑原九藏参照

諺

仏は、ほっとけ、神は、日々お祝いしている。(神様は毎日拝め)
仏は、日々働いているから、ほどけ。(生枝)

謎

生品村^{なましな}とかけて、ももひきと解く、そのころは、たつまちによこま
ちがある。(生枝)

童唄

まりつき歌

いちじく、にんじん、さんしょう、しいたけ、ごんぼう、むかご、な
なくさ、やいな、くわい、とうなす。

ナンゴ(お手玉)、まりつき歌

一つやー しんとくまるは、(まます) かわいさに、まま親様にいの
られて

二つやー ふたおや様があるならば、こお、こおゆくともあるまい
な。

三つやー 三つの時から、かあさまに、わかれてゆくのもつらいも
の。

四つやー よその人でも他人でも、なみだを流さぬ者はない。
五つやー いつまでこうしていたとて、こうゆうやまいは治らな

い。(レプラ)

六つやー むりに進めて、ひまもらい西国、四国と歩きましょう。

七つやー 泣き、泣きわがやを出るときにやー、ままおやさまは上き
げん。

八つやー 山にねようか、野にねようか、おおかみさまにのまれよ
か。

ここのやー ここはどこかと、とうたらば、泉の底だと引き返す。
とうやー 年神様のおまつりは、今月、来月、さらいげつ。(生枝)

数え唄

一つとや 人々ひと日も忘るなよ、忘るなよ

はぐくみ育てよ親の恩、親の恩

二つとや 二つとなき身ぞ、山桜、山桜

散りても薫れや君がため、君がため

三つとや みどりは一つの幼稚園、幼稚園

千草に花咲け、秋の野辺、秋の野辺

四つとや 世にたのもしきは兄弟ぞ、兄弟ぞ

互にむつびて、世を渡れ、世を渡れ

五つとや いつわりぬと

(失念)

学びの始めを、よく守れ、よく守れ

六つとや 昔を尋ねて今を知れ、今を知れ

開けや、富ませや、我国を、我国を

七つとや 七つの宝も何かせん、何かせん

ゆきにもいろいろ、このみさお、このみさお

八つとや 養い育てし、ひめ小松 ひめ小松

(失念)

九つとや 心は玉なり、磨きみよ、磨きみよ

開けや、富ませや、我国を、我国を

十とや とよはたみはたの朝光、朝光

いよいよ雲なし、君が御代、君が御代

(下古)

一つとや 人は心が大事よ、大事よ、大事よ磨いて、おさめて、世を渡

れ、世を渡れ

二つとや 再び帰らぬ、光陰を、光陰を、むなしく過して、すむものか

すむものか

三つとや 三つ四つ五つの、幼子が、幼子が、我身を育てる、幼稚園、

幼稚園

四つとや 良き友選びて、まじわれよ、まじわれよ、良き友、良き師は

身の守り、身の守り

五つとや いつまで言えども尽せぬは、尽せぬは、我身を育てし親の恩

親の恩

六つとや 昔をあきらめ今を見て、今を見て、今より開けし、世を思え

世を思え

七つとや 何より大事は、人の道、人の道、人々はげめば、国も富む、

国も富む

八つとや やちこととほぐ、君が世を、君が世を、むなしく過して、

よきものか、よきものか

九つとや

(失念) ところは日の本日の光、日の光、あまねく、国恩、忘るなよ

忘るなよ

(下古)

桃 太郎

芝のおりどの しずがやに

翁、おうなが住いけり

翁は山へ柴刈りに

おうなは川へ洗たくに

日毎夜毎のなりわいも

いと勇ましき 浅間山

いと忙がしき 五十鈴川

流れ流れる水のものに

流れ来たれる桃の実

おしきにすえて めずるうち

桃はおのずと打割れて

おのこご一人 生まれけり

老の夫婦は喜んで

桃の中より生れしに

桃太郎と名をつけて

犬・猿・きじを従えて、鬼ヶ島へとうち渡り(下古)

お手玉 手まわり、ナンゴ

十モン カメイカ

二十 カメイカ

三十 カメイカ

百までつづける。(下古)

毬つき唄 (毬はぜんまいの綿をくるんでしつけ糸でくくり、変わり

糸でさす。)

○トントン叩くは誰さんだ

シンマチ米屋のじへいさん

じへいは今頃何に来た

ジョンジョがきたで 買いに来た

今頃ジョンジョがあるものか

おっつけ カラスが鳴く時分

チョイト 一貫貸しまししょう

○オマンドこ行つた

油買い 茶買い

油屋の前で

すべってころんで

油一升こぼした

おかあさんに叱られて

おとうさんにほめられた。(下古)

○カラカサ百本、棒八百本

トウトウトガのトウゲンジ

子供が傘を指にのせてうたう。(下古)

子守唄

赤城山から鬼がけつ出して、ナタでぶっ切るような、屁をたれた。

ヨイヨイ横浜、まる焼けた、東京じゃ、オジヨロが車引き、沼田じゃ

芸者がしらみとり。

ネンネンネコのけつ、カニがはいこんだ、おっかさんがたまげてお茶をこぼした。(下古)

労働唄

おかめにまつたけ、エンヤラヤ

皆さんのむぎ、エンヤラヤ(下古)

白沢村の民家

一、はじめに

桑原 稔

昭和四十三年も最後の月に入った十二月の始、矢島先生の急逝を知り驚いた。先生にはもっと生きていて仕事をして欲しかった。私は過去に何度か先生と一緒に調査に出掛けたこともあり、古民家について、お互の研究部門が似通っていたため話をしだすと止まることを知らなかった程で時には夜遅くまで話がはずんだこともあった。しかし、もうそういう機会も永遠にないと思うと非常に残念であり淋しい限りである。

さて、この度の白沢村の調査は、奥様の話によりますと非常に期待しておられて調査期日の十日も前から足の訓練にと、運動靴をはいては足ならしをしていた程でした。この様な熱の入った先生の仕事の後を依頼されはしたものの未熟な私には荷が重く、おまけに調査から原稿書上げまで正月をはさんで一カ月半の余裕しかない。正直いって十分な結果が出せるかどうか心配でした。しかしながら、白沢村教育長さんはじめ村教委事務局の皆さんのご協力のお蔭で、どうやら私の責任を果すことが出来ましたことを厚くお礼申し上げます。また年末の多忙な時期に心良く調査させて頂いた各家に心より深謝致します。最後に矢島胖先生のご冥福を祈念致します。

二、調査遺構について

村内の七地区を平均的な割合で調査民家を抽出して、合計二十一棟を調査する筈であったが、日程その他の都合で十九棟になってしまった。この点お詫び致します。これら十九棟を復原して、平面及び細部形式を分類し、様式編成すると第一表に示す如くなる。第一表でも明らかな如く村内の民家は平面形式から基本的には次の三つの形式に大別できる。

- (1) 四間取型
 - (2) 五間取型
 - (3) 多間取型（六間取型、七間取型、八間取型に別れる）
- 次に以上の三つの型式を順を追って記述する。

三、四間取型の民家

村内を見廻って、一般に規模の小さい民家がこれに属する。中には桑原享家の様に大規模なものも見られるが、これは例外でめずらしい。調査した民家は、第一表に示すS₁、S₂の四棟であって総べて右住いであった。平面は長方形をほぼ半分に分けて右側を室とし、左側を土間として、土間の部分を『台所』と呼ぶ、右側部分は、さらに二分してこれを前後で仕切り四室とする。

三・一 四間取型民家の古形式

四間取型の古形式を示す家が中村卯内・佐藤要氏の両家である。この形式では四室というものの「デー」の表側の室は土間となり、ここを「表口」と呼ぶ。従って、床上空間は第一図に示す様に「ヘヤ」・「茶の間」・「デー」の三室となる。中村卯内家では主要構造が柱一間ごとに建ち、「茶の間」と「デー」境に袖壁を残し、「デー」の見付柱にチヨーナ仕上げの手法を残す等民家に於ける原始的技法をあちこちに散見する。なお自家の「茶の間」のトコは「押板」と呼ぶもので、トコ板が壁面から室内に突出している。これは現在一般的に見られるトコの始祖であり、原始的形態を示す好例である。

三・二 各室の使用法について

「ヘヤ」は家族の寝室である。広さは奥行一間であるが新しい遺構になる程奥行を増す。巾は「茶の間」の巾と同一にするため横に細長い室となる。四周は出入口を除いて総べて土壁をめぐらすのが古形式である。「茶の間」は家族の居間であり、団らんの場であるため古くはこの室にイロリを設けた。夏になるとこの室は主に養蚕飼育に使用される。すなわちこの室は、居住空間であると同時に作業空間でもあるわけである。「茶の間」は、この様に二重性の空間であるため十九世紀の中頃に至るまで畳を使用する様には計画されなかったらしい。(註1)「デー」は客間であり、冠婚葬祭時の主室となる空間であるため、この室の前面には「表口」と呼ばれる正式の玄関が付属する。これに対して家族の出入口は「トボーグチ」と呼ばれ、台所から出入するのが普通である。

三・三 四間取型民家の新形式

四間取型民家の新形式を示すのが新木博・桑原亨・小林辰蔵氏の家である。先ず新形式になって大きく変化するのは「表口」が消滅することである。従って古形式に於て「表口」に相当する室に床板が張られ、さらに畳が入って室の奥行が増大して「トマノデー」が出現する。「ヘヤ」はその奥行が徐々に増大して行って開放的になり居住性の増大が計られる。故に家の規模は増大し、軒高・棟高も増して、いろいろの煙出と養蚕の關係から「茶の間」の真上に「ヤグラ」が付設されるようになる。又、台所側の妻屋根は、丁度寄棟造の軒先を切落した恰好の「カプト屋根」になる。「カプト屋根」は小屋裏採光の一方法だが、この地方でも「カプト屋根」出現と同時に台所に根太天井が張られ小屋裏利用が考えられている。なお、桑原享家では「上チョーツバ」に引出式の木製便器を残しており、今日では非常にめずらしい存在なので付記する次第である。

四、五間取型の民家

この形式に属する民家は第一表のS₆、S₁₁までの六棟である。S₁₁の金子秀男家を除いて他は総べて右住いであった。聴くところによると、この地方では右住い^いが一般的で左住まいは少ないという話であった。平面形式は前記四間取型と似通っているが基本的には梁行長さを増して「トマノデー」を増設するのが、当地方の五間取型民家である。

四・一 五間取型民家の古形式

五間取型古形式の特徴を良く示している遺構が角田忠弥(S₆)・木暮六蔵氏(S₇)の両家である。角田忠弥家に於ては「ヘヤ」・「茶の間」の閉鎖性が前記中村卯内家よりもさらにはげしく、土間空間内部に上屋根が建つことや、台所と床上境の柱がチヨーナ仕上げであること等を併せて、この地方の民家の原始的手法を知ることが出来る。

さて、五間取型古形式の特徴は四間取型古形式のそれを包含するのであるが、「トモノデー」の奥行が独立した室としては最小の単位である一間であるところに特色がある。

「トモノデー」の性格は、その発生時に於ては「オキノデー」に付随する「控えの間」的存在であるところに意味があった。即ち、四間取型古形式に於て「表口」と障子一枚で接していた主室「オキノデー」は落着きと重厚さに欠けていた。この点を補って「オキノデー」の性格を一層「客室」(註2)らしく仕立てると同時に「控えの間」として出現したのが「トモノデー」の発生原因であろう。それ故当初は奥行が一間もあれば十分その存在意義を發揮したことであろう。

四・二 五間取型民家の新形式

五間取型新形式の特徴も、四間取型新形式のそれを包含するのはいうまでもない。しかし、特に顕著なのは「トモノデー」の奥行が徐々に増大し、外側の土壁が消滅して総べて建具で仕切られる様になることである。こうして「トモノデー」は間口二間奥行二間の正方形となつて完全に独立した居住空間となる。さらに今日では「表口」に床板が張られ、時には畳を入れて居住している家かなりあった。又、近岡義恵家の様に「表口」が土間で旧態をそのまま今日に伝えている家もあるが、現在ではこの部分を出入口として使用していないのが普通である。

五、多間取型の民家

多間取型に属する民家は第一表のS¹²、S¹³に示す七棟であつて、岡村雄二家を除いて他は皆右住まいであつた。室数については六間取が四棟、七間取が二棟、八間取が一棟の割であつた。中村敏男家の他は総べてが台所側に「カブト屋根」を設けるが、小林功家は両妻側の屋根が

「カブト屋根」であつた。外観は大きくて棟が高く、見るからに豪壯で住時の勢いをしのばせる。内部に入れば「オキノデー」には総べての家に「書院」が設けられ「トモノデー」と共に天井が張られている。これらの家は昔、名主や大名主を勤めた家がほとんどであり農村では上級の民家に入る。この形式の民家は平面形式を考察すると、いずれも五間取型を基本とし、これから發展したものであることが判明する。(第1図参照)

この様に当地方の上級民家は五間取型を祖形とし、十八世紀中頃には六間取型の出現となる。これがさらに七間取型となり十九世紀の中頃には中村輔家の様に大規模な八間取型となつて上級民家の形式は完成する。従つて多間取型民家は、およそ十八世紀中頃以降の比較的新しい名主階級の一般的形式であると言えよう。

これより以前の上級民家の形式は五間取型となることが角田福方家の形式から推して判明出来るし、(註3)さらに遡れば四間取型となつて上下級民家の差がなくなることは、農民の階級分化過程から推しても明らかとなるであろう。

六、柱について

古い家では上屋柱(註4)が必ず一間間隔に立つため、二間の間仕切の場合には中間に柱が立ち目ざわりである。台所には外壁から離れて内側にこの上屋柱が一間間隔立ち並ぶ。(角田忠弥家参照)これは構造技術の未熟なことを示す証拠であつて、この時期に於ては上屋柱の省略は技術的に許されなかつた。時代がだんだん新しくなると、これにつれて構造技術も向上し、徐々に上屋柱の省略が計られる。やがて、台所内側に立つ上屋柱が省略されて広々とした作業空間(註5)となり、部屋境の間仕切に於ては中間に立つた柱が除かれて、間仕切と間仕切の交叉点に立つのみとなる。台所と床上境には六、四本の柱が立並び古い遺構では

総べて「チョーナ」仕上げである。新しくなるとだんだん「カンナ」が掛けられる様になり併用（台所側はチョーナ仕上げ、茶の間側はカンナ仕上げ）を経て総カンナ仕上げとなる。なお、この通りの柱径については他地域に比べて一般に細めであり古い遺構では四寸前後でシキイ・カモイ巾と同寸である。新しいものになっても大した変化はないが幾分径を増す様である。しかし、特に太い柱は現われず、従って大黒柱は最後まで存在しない。この様な特徴は吾妻地方の民家についても言えるところである。（註6）

七、台所について

建坪に対する台所面積の割合は、第一表の「台所巾の桁行長さに対する割合」で明らかな如く、新旧の別なくほぼ半分を有する。新しい遺構になると台所側に当初より計画された「エン」が設けられるため実質的には台所土間（床下作業空間）（註7）の減少となる。又、台所には南に面して「茶の間」側に「勝手」（又は「流し」という）が設けられ冬の食事準備に日光を受けながら暖かく仕事が出来の様考慮されているのは氣候の及ぼす影響とも考えられるが現代的なセンスを感じさせる。「トボーグチ」と接しては「勝手」と反対側が「風呂場」になり、その奥が「馬ヤ」になる。「風呂場」の下には大きな下水溜を設け壁表に汲み取り口を設ける。時にはここが小便場になっているため「トボーグチ」に近付くと異様な臭気が漂い田舎らしさに充分接することが出来た。

八、おわりに

平面形式を中心に、その変化もわかるように出来るだけ年次的に記したつもりである。（第一表及び第一図参照）小野良太郎家は高平では古

い家であると聞いたが、主屋ではなく往時の書院であるため他と同様に言及することが出来なかった。又、時間の都合で増田茂樹家、山口磯雄家を調査出来ずにしまったことを深くお詫び申し上げます。最後に、あちこちに行届かぬ個所があるのではないかと心配しておりますが、いまだ発展途上にある（？）未熟な者ゆえ大目に見て頂ければ幸いです。おります。

「註」

- 1……このことは、現在は「茶」の間に畳を敷いているが、端部で巾広の畳寄せ（上端を畳上端とそろえる）という木材を使用して畳と敷居の間にできた隙間をふさいでいることにより当初から畳を使用する様に計画された室でないことが判る。
- 2……冠婚葬祭時の主室となるため「オキノデー」を主室または客室と仮に呼ぶ。
- 3……角田福方家は当地の大名主であると伝えるが、その民家は「五間取型」である。また、近岡義恵家も代々名主を勤めた家柄であるが、その民家形式は「五間取型」である。従って十八世紀中頃以前の上級民家は「五間取型」の型式となるのではないかと推察する。
- 4……小屋組を通して屋根の重さを支える柱のこと。
- 5……農家の台所に於ては、脱穀・粃摺り・わら仕事と農作業のほとんどがここで行なわれる。故に台所の本来の性格は作業空間であると考える。しかし、時代が新らしくなると徐々に作業空間の性格はうすれ、炊事と日常の接客の性格が増すため「茶の間」に接して「エン」が張られ「いろり」が切りれる様に移り変わる。
- 6……桑原稔「群馬県西部と北部の民家遺構について」日本建築学会関東支部第三九回学術研究発表会梗概集 昭和四三年
- 7……古い遺構では「茶の間」を床上作業空間と定義付けるのに対し、「台所」を床下作業空間と定義付ける。

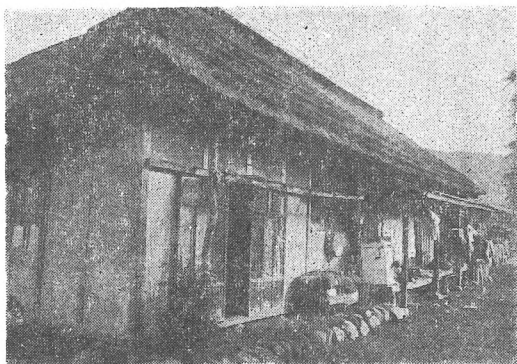
白沢村民家遺構の形式分類表

198 - 203頁は

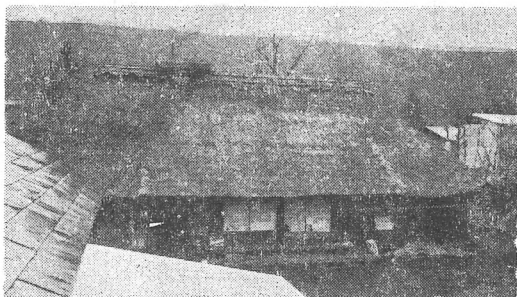
個人情報が含まれるため非公開



小林 辰歳家 (S₃) 台所側の妻屋根を「カブト屋根」の形式にして妻側より小屋裏採光を計る正面の屋根の切上げは最近の改造による



中村卯内家 (S₁)



角田 忠弥家 (S₆) 軒が低く古形式が漂う



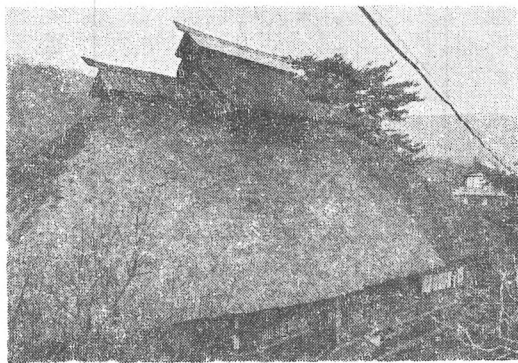
佐藤 要家 (S₂) 東側屋根にわずかな「カブト屋根」の形式を見る



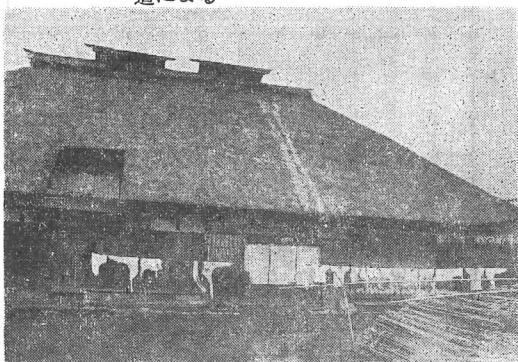
木暮 六蔵家 (S₇)



新木 博家 (S₃) 屋根の段違いは後の改造による



角田 福方家 (S₈) 棟の「ヤグラ」も草葺とするため重厚さを感じさせる。(この地方の特徴である)



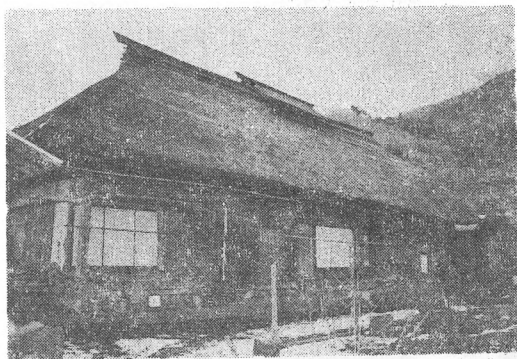
桑原 享家 (S₄) 正面屋根の一部切落しは後の改造による



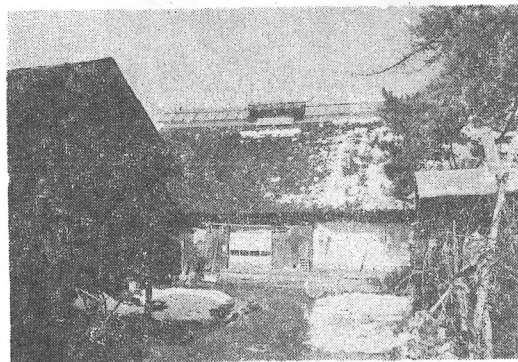
中村 敏男家 (S13)



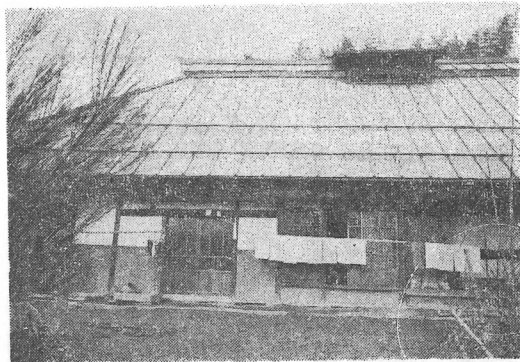
横坂 始家 (S9) 正面屋根の切落しは明治になってからの改造



岡村 雄二家 (S14) 中頃に「表口」が見える



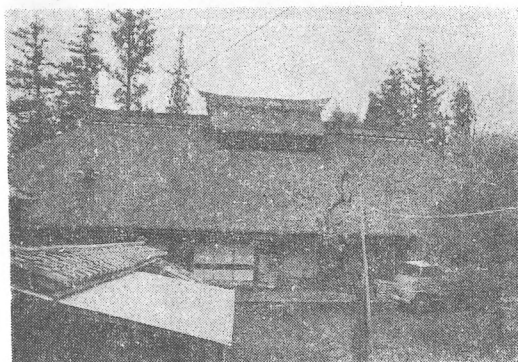
近岡義 恵家 (S10)



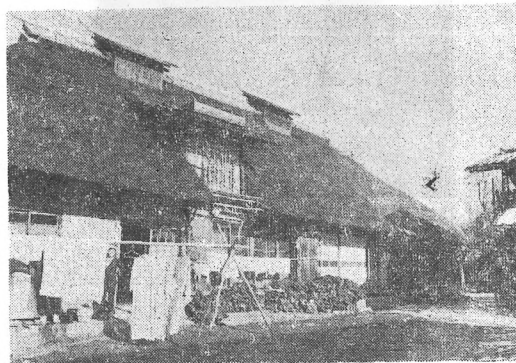
桑原 勇家 (S15) 草ぶき屋根にカラートタンをかぶせる



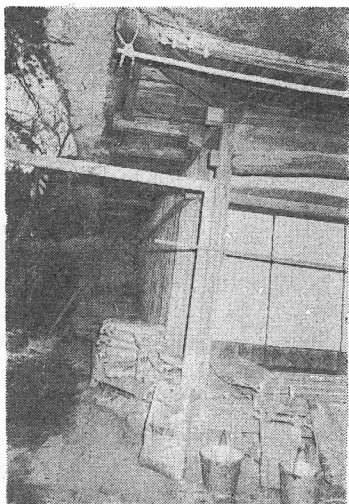
金子 秀男家 (S11)



小林 功家 (S16)



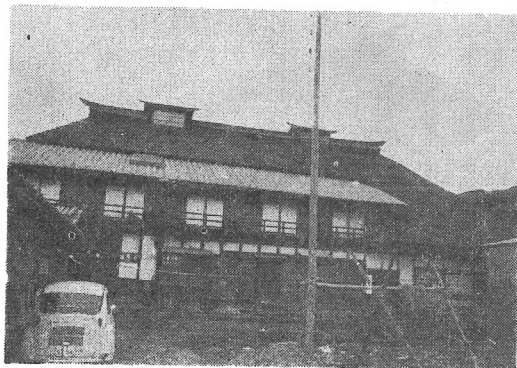
小林 幹男家 (S12) 正面屋根の切上げは後の改造である



岡村 雄二家軒裏の「セガイ」



岡村源五郎家 (S17)



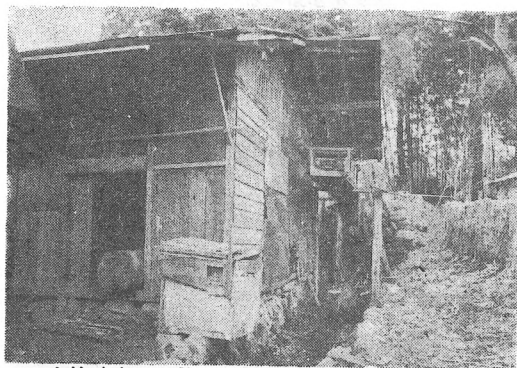
中村 輔家 (S18)



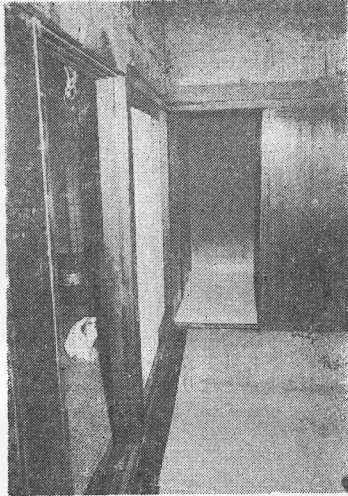
小林功家の東妻側の「カブト屋根」



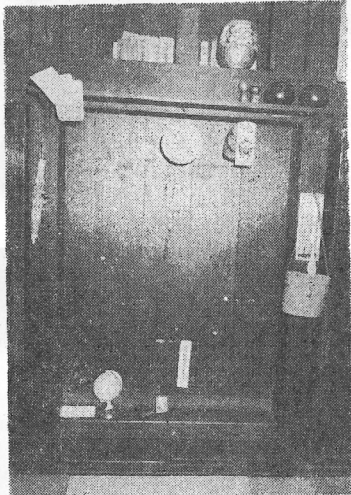
小野良太郎家 (S19) 書院



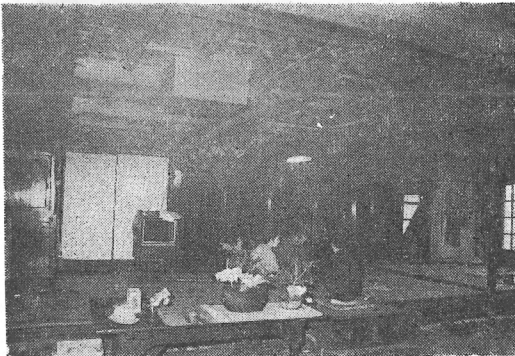
小林功家の屋敷内を流れる沼田城御用水



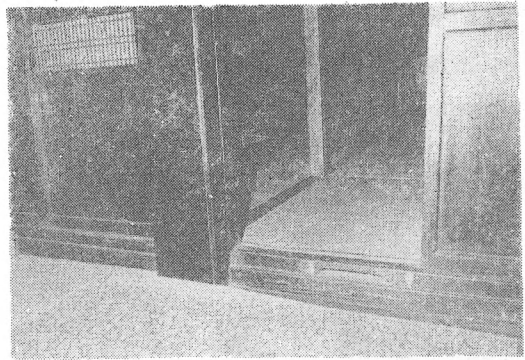
佐藤要家 茶の間の「畳寄せ」(畳と敷居の間の板を畳寄せという)



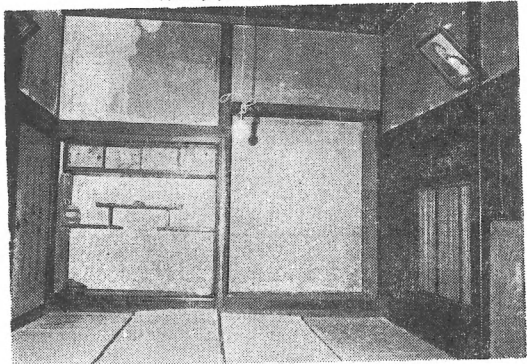
佐藤要家 奥行の浅いトコ、このトコ下に見える小さな戸板に墨書あり、「文化七年十二月」大工源次郎とある



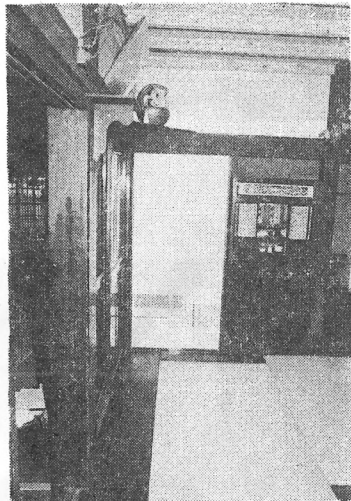
桑原 享家 台所



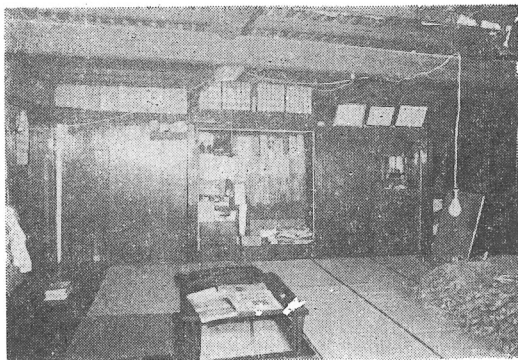
中村 輔家 茶の間と台所境の敷居に取っ手がついており夏になって畳を使用しなくなった場合簡単に取はずし出来る様工夫されている。



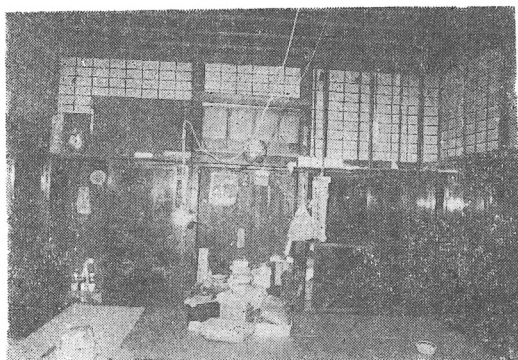
中村 輔家 オキノデー



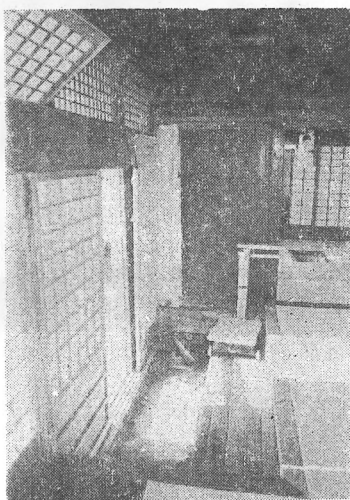
桑原 享家 茶の間の「畳寄せ」と台所境の柱



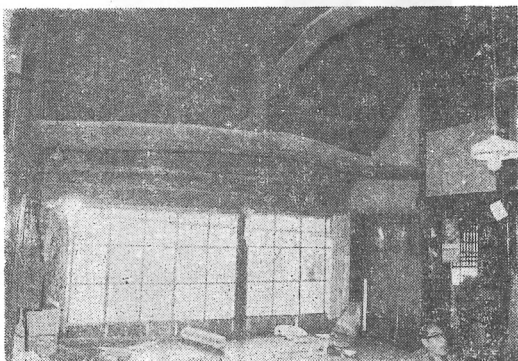
近岡義恵家「茶の間」



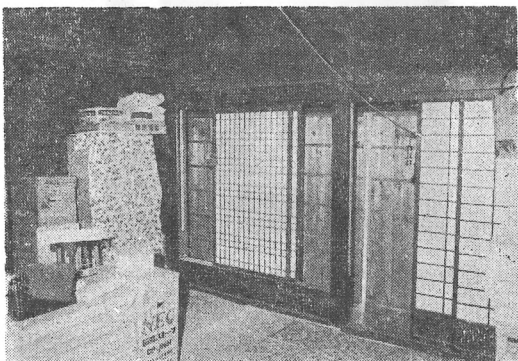
小林 功家「茶の間」カモイ上のショージ部分は土壁となり天井は吹抜けとなる



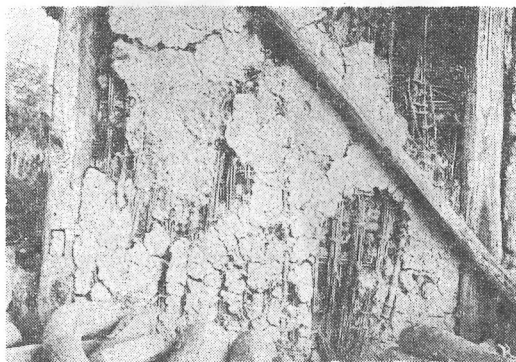
金子秀男家「茶の間」に残る「表口」



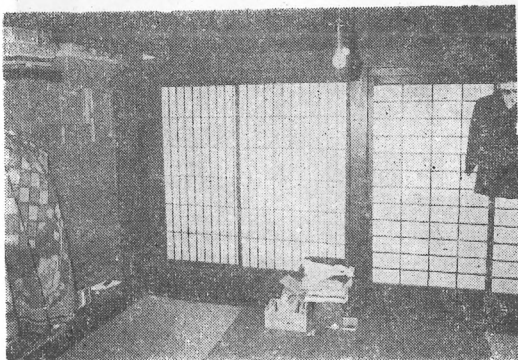
角田福方家「茶の間」表側



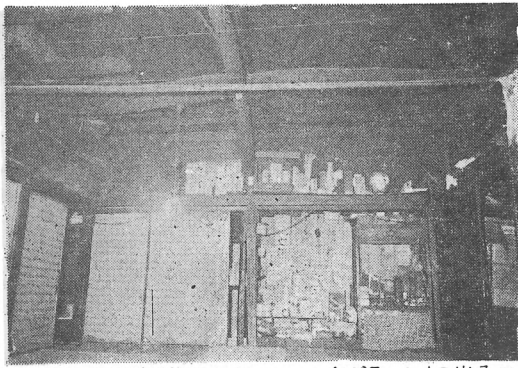
小林幹雄家「オキノデー」の平書院



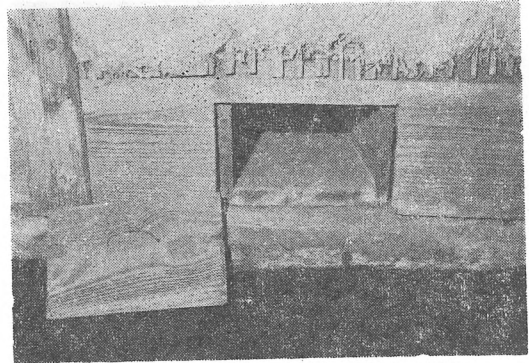
横坂始家の外壁（壁心はコマイ竹を使用せずして、横は雑木を使用し、縦はこれに草の茎をたばねてゆわえ、土を塗ったもの）



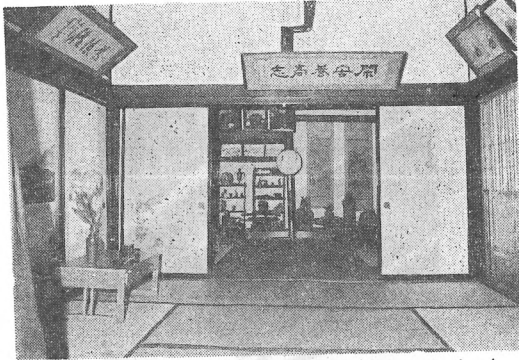
近岡義恵家「オキノデー」に付く平書院



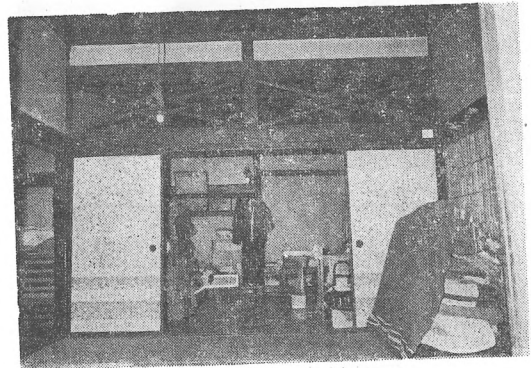
角田忠弥家「茶の間」のトコ、左が「ヘヤ」の出入口



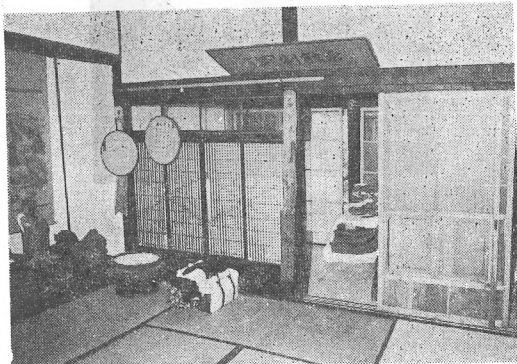
桑原 享家「上チョーツバ」の引出式便所



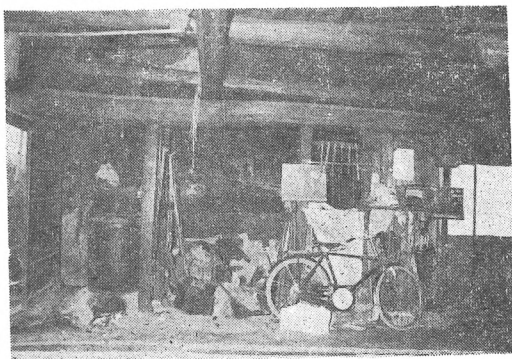
中村敏男家「トマノデー」より「オキノデー」を見る



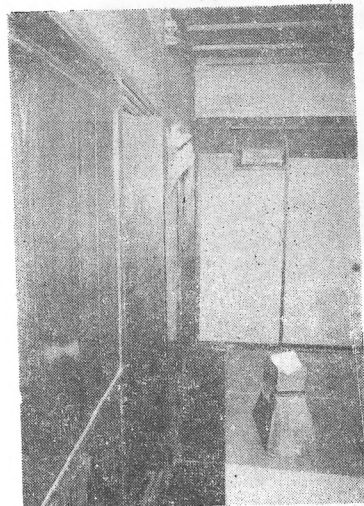
桑原 勇家「オキノデー」



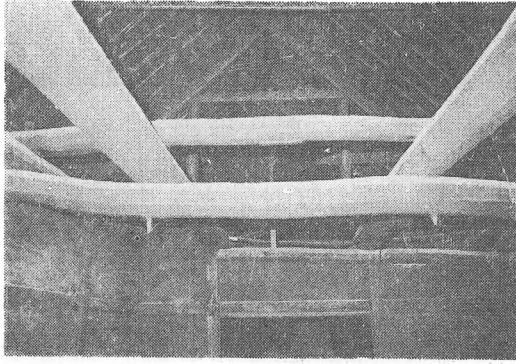
中村敏男家「トマノデー」の平書院



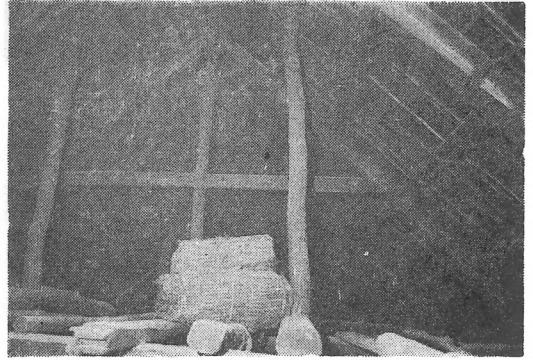
横坂 始家「フロバ」と「馬ヤ」



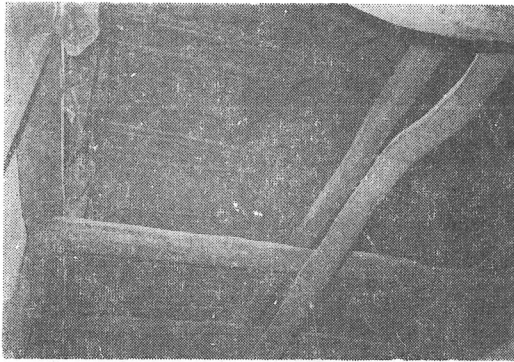
小林辰歳家「茶の間」の畳寄せ



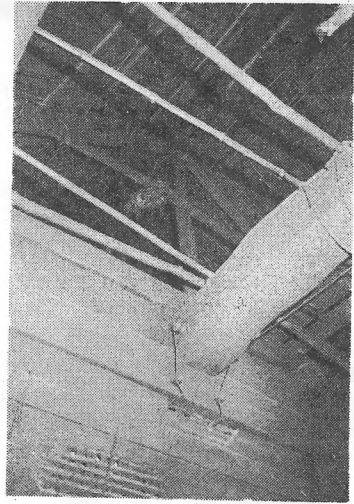
岡村源五郎家 小屋組



桑原 勇家 小屋組



角田福方家 小屋組



木暮六藏家 小屋組



木暮六藏家 台所に立つ「上屋柱」

民具

はじめに

白沢村の民具を一瞥して感じた事は余り目立って特殊な物は見当らなかつたという事である。そして調査員各々が拝見したものはその大部分が既に使用の生命を終った民具であつた。しかもそれは僅か数年、或は十数年前迄は明らかに生き生きとして働いていた物であつた。それ程、時代の変化は甚しく民具の変遷もきわだつていた。しかし、現在使用中のものについては遺憾乍ら、村の方達から見れば、余りにも平明の変化である為、殆ど実例を示していただけなかつた。従つて以下に実物を並べ解説する民具の多くは、現在既にその用途を失つて居り、この村で現実に使用されているものでない事を特に記憶しておいて頂きたい。しかもその殆ど全てが、私達にとっては目新しくも何ともない昨日迄の使用品であつたという、ほんとうの過渡期の時点にこの観察は立っているのである。

(今井善一郎)

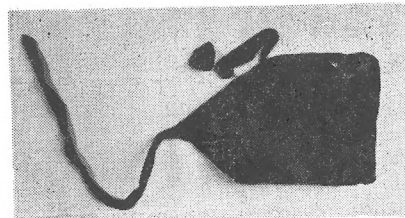
衣食住に関するもの

一、発火

燧石と火打金による発火は勿論明治初期から失われた。火打道具の残存は普通神祭用のが時折見受られるが、白沢では携帯用火打道具だけが

一個尾合の宮田福松氏方から報告された。それは裏付の布製の袋の中に火口(ホクチ)と燧石及び鎌(火打金)が入つており、袋の一端に紐がついていて、袋の上から結えられるようになってゐる。勿論袋は手製、金は市販、石は自然物かもしれぬし、販売品かもわからない。

二、灯用具

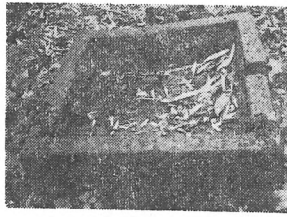


火打道具入れ(尾合)(今井善一郎撮影)

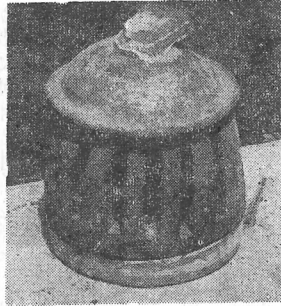
灯用具の中、最も原始的なものはヒデ鉢である。この中、上古語父宇敷伊作氏方の粗製の石皿様の背面に三つ足があり、上面は皿形に凹んでいるが、その中央にヒデを燃え易くする様に突起ができてゐる。岩室の岡村作次郎氏方の一コと尾合の山田新次氏方(今は鶏の餌入れに使用)のは円型の比較的整つたもので、尾合の鶴淵螢光氏方のはやや大形の四角型のものが残つてゐる。いずれも明治初期迄は使用したといふ。ヒデ鉢の中にやや新形式態のものに生枝で見出された瓦製の焼物があつた。これは皿状の台の上に籠用の蓋をつけたもので、ヒデ鉢としては進歩したものであるが焚き物の補充に世話のいる難があつたかに見える。

行灯(アンドン)は上古語父宇敷伊作氏と岩室岡村雄二氏方から報告されている。後者には燈芯(トウスミ)も残存していた。

行灯と同じく燈蓋(トウガイ)(油皿)を使用する灯用具で、火の位置を上下する仕掛のあるヒョウソク台というものがある。木製で次の



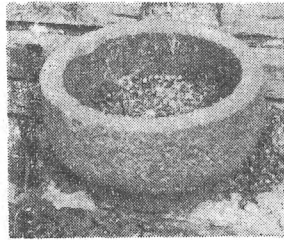
ヒデ鉢 (尾合)
(今井善一郎撮影)



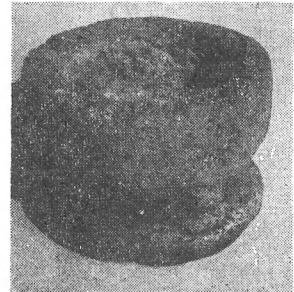
ひで鉢 (生枝)
(阿部孝撮影)



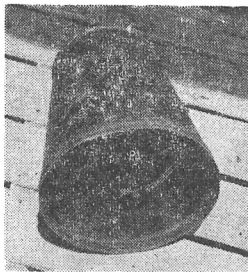
ひで鉢 (上古)
(阪本英一撮影)



ヒデ鉢 (今は鶏の餌入)
(尾合)
(今井善一郎撮影)



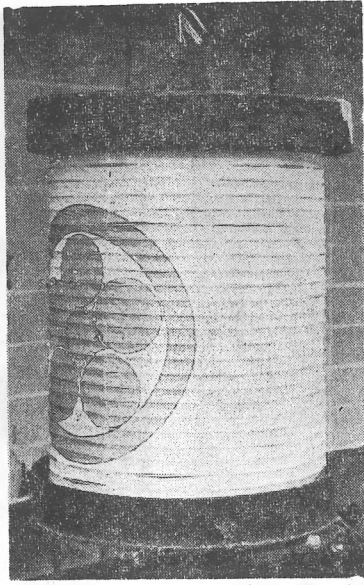
ひで鉢 (岩室)
(近藤義雄撮影)



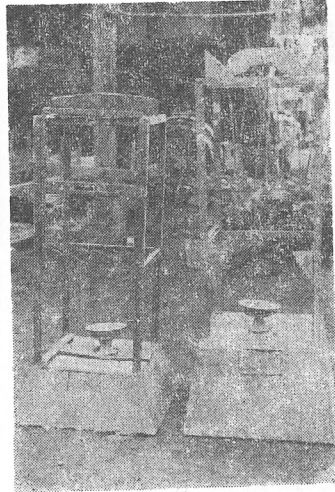
がんどウ (尾合)
(今井善一郎撮影)

ガンドウは一方的の光明投射器であり、又雨天の時の灯火移送具であった。周囲が漆塗の曲物でできているのが多いが、尾合鶴淵螢光氏方のは比較的新しいものらしくブリキ製で、中のローソクを垂直に立てる仕組みは旧来のものと同一である。

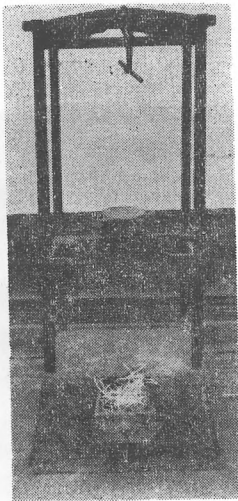
ローソク立ての原形と思われる。これは高平の諸田又二氏方から報告があった。
蠟燭立ては可成残存しているらしいが、これには木製のもの(尾合宮田福松氏方)、金属製のもの(下古語父)等がある。後者には真鍮製の芯切りがついている。
手燭(テシヨク)金属製の蠟燭の持ち歩く道具、可成多く使用されていた。この例は下古語父のもの。
提灯(チヨウチン)も蠟燭を歩く用具であるが、その普段用は余り使い古されてむしろ残って居らず、儀式用の大型のものが報告されている。高平の小野亀太郎氏のもの岩村の岡村雄二氏のもの等この例である。小田原提灯と今は呼んでいるらしいが、通例の小田原提灯は小型の普段持歩くものである。これは明らかに結婚などの儀式用のものである。岡村氏方の六角提灯というのはその異型のもので、提灯の一特性の畳む事の出来ぬものである。
ランプは明治の遺産で、大正の初期迄使用された。今も停電用、小舎用等に使用する人がいる。吊りランプ、台ランプの別がある。台ランプは初の脚の短かいのを別の台の上のせて使用した。後に台そのものが伸びたのである。吊りランプは下古語父から一つ尾合の小林ろく氏方から一つ出ている。上古語父の増田茂樹氏方には数種のランプが残されていた。



祝提灯(高平)(関口 撮影)



あんどん(骨)(上古)
(阪本英一撮影)



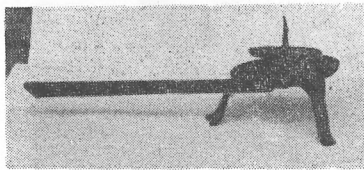
あんどん(骨組)(岩室)
(近藤義雄撮影)



ローソク立て(尾合)
(今井善一郎撮影)



ひょうそく(右)と竜吐水(左)
(高平) (関口正巳撮影)



手 燭(下古)
(佐藤清撮影)



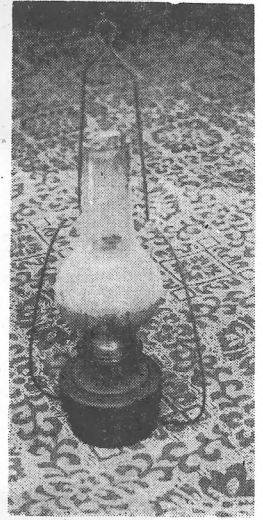
小田原ちようちん(岩室)
(近藤義雄撮影)

三、調理用具

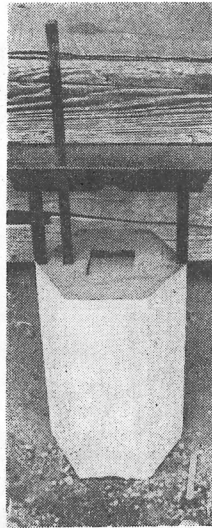
調理用具は実に多いのであるが、報告に現われたものは極く少ない。
木鉢 これはトチ・セン等の木製で、一時代前迄はうどん・そば・団子等を作る時粉をこねるに使用した。現在ではジュラルミン・アルマイト等に代位された、上等のこね鉢は朱の漆塗の美しいものもある。尾合からも報告があったが、ここには高平の鳥山鳴氏のものを掲げておく。
薬研 (ヤゲン) 名の如く製薬用具であるが又多く調理用で使用される。胡麻・唐辛子・陳皮(チンピ)・蜜柑の皮)等を粉末化した。上古語父佐實悦氏方。



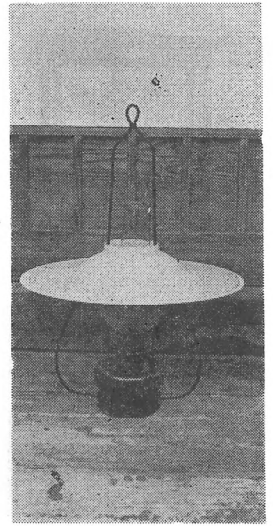
ランプ各種(上古)
(阪本英一撮影)



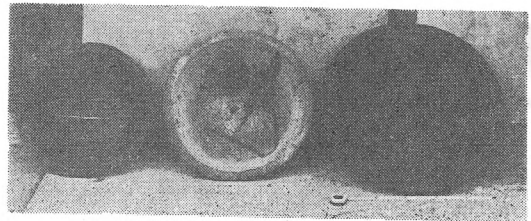
ランプ(尾合)
(今井善一郎撮影)



六角ちょうちん(岩室)
(近藤義雄撮影)

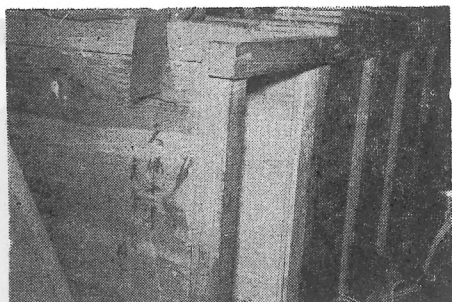


ランプ(下古)
(佐藤清撮影)

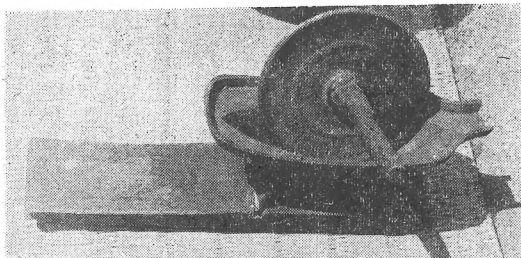


木鉢(高平) (関口正巳撮影)

鉄瓶と茶釜 共に湯沸し具であり、両者共五徳にかかるものと、鍵竹にかかるものがある。後者は勿論蔓がある。いろいろにかゝるのである。岩室岡村氏のやかんというのは茶釜であろうと思われる。



こくびつ(生枝) (阿部孝撮影)



やげん(上古) (阪本英一撮影)

噌豆の釜として同様のものが多い。
穀櫃 生枝中村佑氏方のもの、大きな四角な箱であるが、中が区切りされており、上と前が板がはずれる様になっている。今はブリキの罐を一般に用いるようになった。

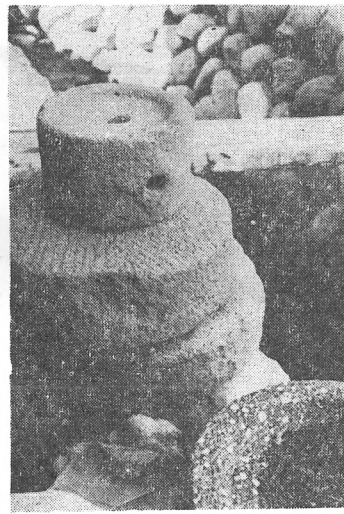
挽き臼 これには粗磨りし仕上磨りの差がある。粉挽き臼の如きは後者に属する。油しぼりもこの中に入る。茶を挽く茶挽き臼もある。
醤油しめ機 生枝の一例がある。風呂桶用の桶に、醤油のもろみを袋に入れて重ねラセンの力で締めるのである。
油しぼり機 高平の中口秀吉氏方から報告されている。太い二本の縦棒に横木を挿しこみ「や」でしめる。菜種はふかくして、袋に入れて、上からしめ木を入れてしめるのである。
豆腐釜 岩室の中村広次氏方の大釜、要するに大量に豆を煮た釜である。各地に味



鉄びん(俗称
まおとこてつびん)(下古)
(佐藤清撮影)



茶がま(岩室)
(近藤義雄撮影)



石臼(岩室)
(近藤義雄撮影)

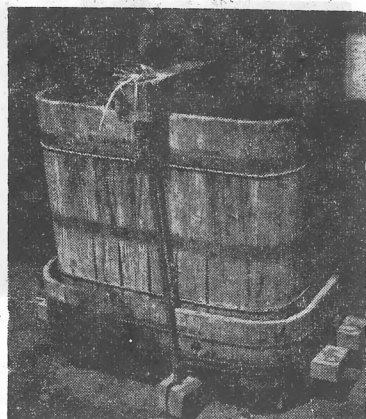
四、飲食用具

飲食用具も当然、数多い事であるが報告になったものはやや少なく、片よっている。

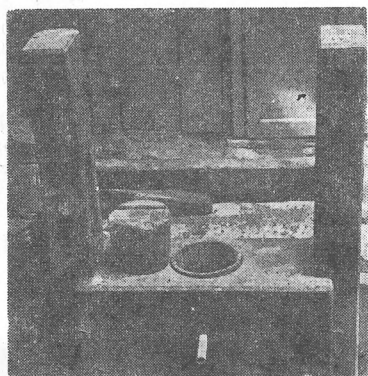
へぎ これは尾合で報告のあったもの、これは竹製である。竹の身を圧平して皿状にしたもので、漆がぬってある。多分に神事用とか祝祭用のものであるらしい。赤飯など盛る。

イヅメ・イズメ これは藁製の冬期の飯類保温具である。可成各地から報告されている。上古語父の鈴木正夫氏は茶器の入れ物であったという。同所の宇敷伊作氏方では洪紙張に補強されていた。以上の外尾合の宮田福松氏、小林ろく氏高平の小林一雄氏等のものは円形で、宇敷氏方の別の一箇、下古語父報告の一箇等は角形である。これらのイヅメは又乳幼児の子育用にも使用したと云われていて兼用のように見受けられるが、結局それは大きさによって異なるので、大きなイヅメは確かに育児用で使用されたと思う。

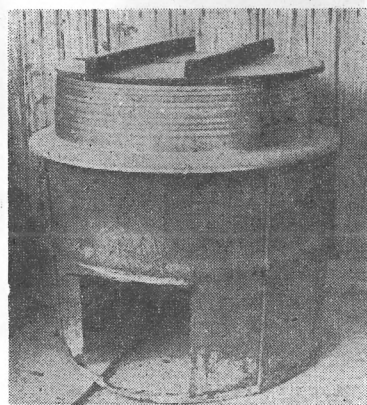
弁当箱 これは古いものは柳行李の小形なもので、御飯が圧されず美



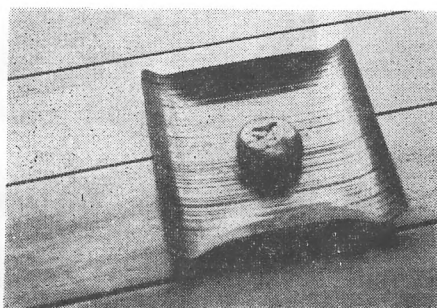
醤油しめ機(生枝)
(阿部孝撮影)



油しぼり機(高平)
(関口正巳撮影)



豆腐釜(岩室)
(近藤義雄撮影)



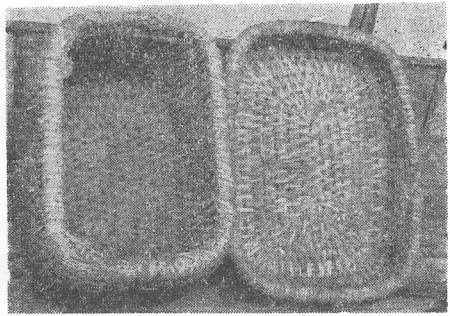
へぎ(尾合)
(今井善一郎撮影)



イヅメ(上古)
(阪本英一撮影)



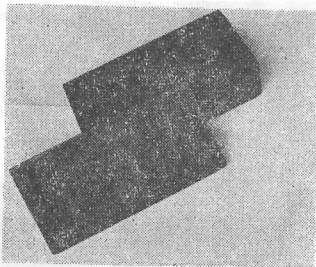
イヅメ(上古)
(阪本英一撮影)



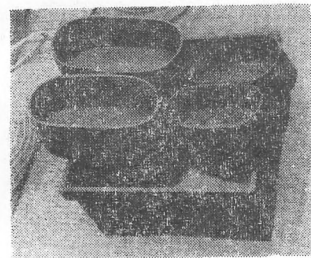
イヅミ(下古) (佐藤清撮影)



弁当のいろいろ (岩室)
(近藤義雄撮影)



メンパ(弁当箱)(上古)
(阪本英一撮影)



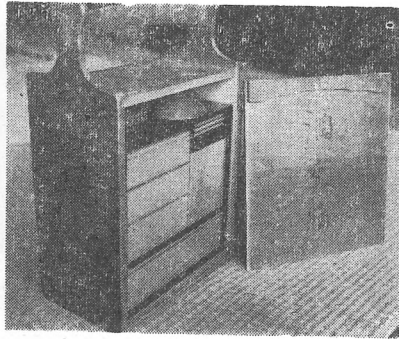
弁当箱(尾合)
(今井善一郎撮影)

味しかったという。次は所謂メンパである。これは蓋附の曲物で主に漆塗であった。岩室の中村雄二氏、上古語文の増田茂樹氏方等にある。今少し進んだのは四角形、オカズ入れのついた塗物の弁当箱で尾合の宮田氏方で報告されている。

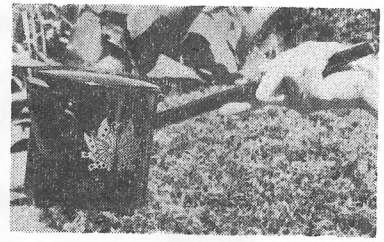
汁物の容器が二つ報告されている。一つは上古語文鈴木正夫氏方の「長柄の杓子」というが、用途不明との事で、或は祝儀の席に酒を入れたかという。これはしかし一見長柄の湯桶(ユトウ)かと思われる。之に反し、同じ上古語文小淵久佐久氏方の湯桶と称する器具は漆器であるがどうやら油差しに似ている。しかし酒器と解されているようである。前者は揚げ羽の向い蝶、後者は山口菱の立派な金紋入りで、いずれも購入品らしい。

酒器は各種のものが報告されている。下古語父から報告された大型の蓋附瓶と、上古語父増田茂樹氏方の花卉文様付の美麗な瓶とは共に下部に呑み口がついている事

この地方では充分活きて働いている民具である。
 茶道具は、下古語文から急須及び茶器の美しいものが報告されている。その外一般的のもの故か報告をみない。
 煙草道具は上古語父の佐貫悦雄氏及増田茂樹氏から、煙管胴乱等が報告されているが、いずれもやや特殊形のもので、一般形のものも現在では最早失われつつある状態である。

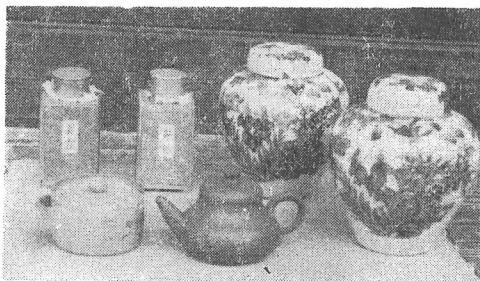


酒重箱(尾合)
 (今井善一郎撮影)

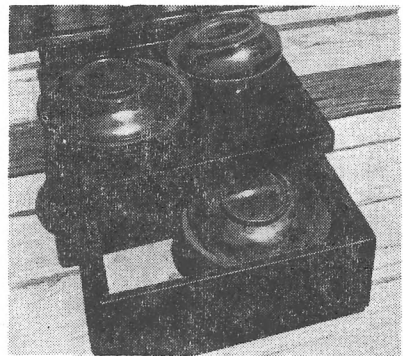


長柄ゆとう(上古)
 (阪本英一撮影)

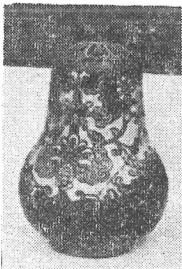
により酒瓶である事が知られる。徳利大小種々のものが報告されている。下古語父からは下端の尖った下に立てておけない徳利が報告されている。瓢箪もいくつか報告されているが増田氏方のもは可成大形のものである。珍しい酒器には尾合の中村哲夫氏方の酒重箱というのがある。これは携帯用弁当箱に酒器の附属したもので、四角形の酒入れがついてあり、あと菜入れ、皿盃の類が皆塗物で出来て居り、一つの手提用の箱の中に納まっている。野遊びとか芝居見物等に利用されたものであろうが、一般民具より一寸高尚である。
 箱膳 数例報告になっていたが、膳に普段用の茶碗、箸等の揃った好例は見出せなかった。釜敷が鶴淵螢光氏方から報告になつている。手製であるが、之はおそらく現在でもまだまだ



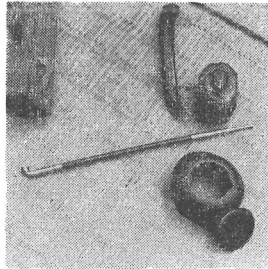
茶道具各種(下古) (佐藤清撮影)



箱膳(尾合)
 (今井善一郎撮影)



茶入れ(下古)
 (佐藤清撮影)



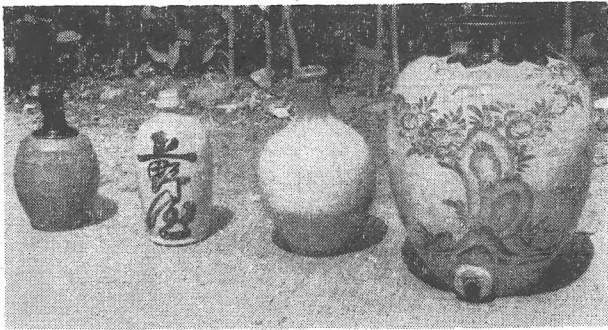
煙草道具(上古)
 (阪本英一撮影)

釜敷き 藁の手製、尾合鶴淵氏方から報告があったが、これは燃料にマキや柴をもしている地方では現在でも多く使用されている。
 五、服飾具
 この報告は極めて少なかった。
 笠 一個、下古語父から報



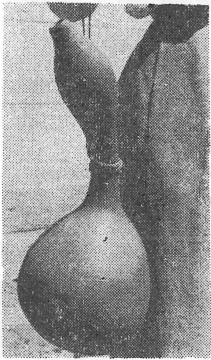
酒のいれもの(上古)

(阪本英一撮影)



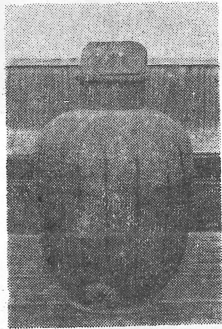
酒瓶徳利瓢類(下古)

(佐藤清撮影)



酒かめ(下古)

(佐藤清撮影)



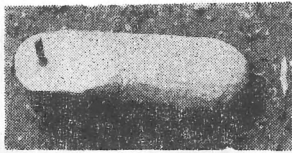
ひょうたん(上古)

(阪本英一撮影)

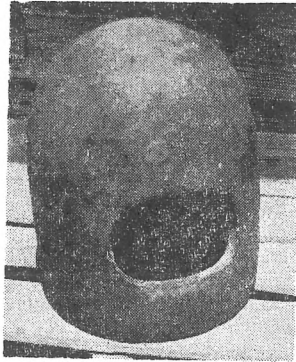


一升徳利(尾合)

(今井善一郎撮影)

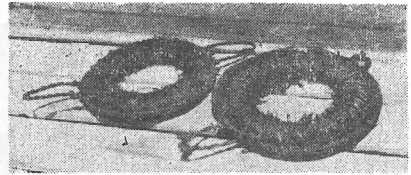


わらぐつの型(岩室)
(近藤義雄撮影)



綿帽子かけ(尾合)
(今井善一郎撮影)

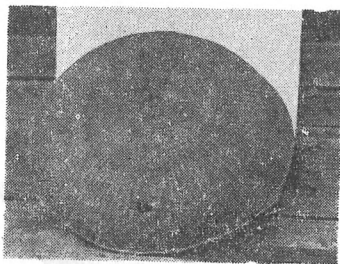
藁沓 右の増田氏方其の他で報告されている。大体同型である。半長靴式である。勿論雪沓用であるが、高平の藤井光男氏方の例によれば、味噌作りの大豆踏み、酒造りの麴踏みに用いるという。此の場合には底に木の板を当てる。この藁沓を作る時の木型が岩室の岡村雄二氏方から報告されている。



釜敷き(尾合)
(今井善一郎撮影)

いていた。材料は籐の細割りにした特殊のものである。この地方では一般に管笠が使用され、越後方面から移入されていた。

草履と草鞋 尾合の小林ろく氏方から報告がある。この場合草履は足半(アシナカ)で鼻緒がエボムスビにしてある。草履にはこの外冬期殊に雪中などにはく先端がツツ様になったものがある。上古語父の増田茂樹氏方から報告されている。スリッパの袋様のものが勿論藁で編んであるが、その外側にちやんと鼻緒がついている。この鼻緒は足指を



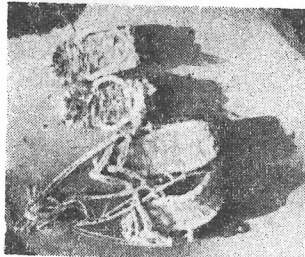
まんじゅう笠(下古)
(佐藤清撮影)



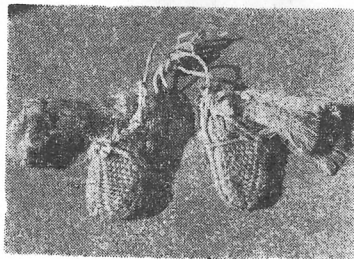
わら草履(上古)
(阪本英一撮影)



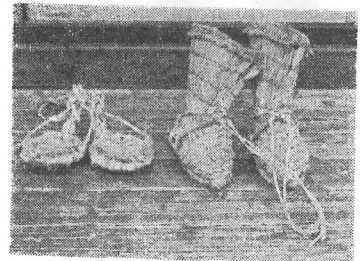
わらぐつ(上古)
(阪本英一撮影)



草履と草鞋(尾合)
(今井善一郎撮影)



わらぐつ(高平)
(関口正巳撮影)



わらぐつ(右)と馬のくつ(左)
(下古) (佐藤清撮影)

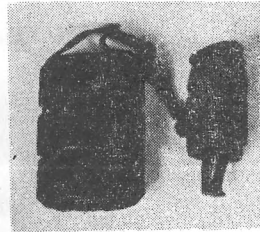
綿帽子かけ 衣服類の報告がないが、一つ祝儀用の綿帽子をかける、つまり真綿を之にかけて綿帽子に仕上る原型が鶴淵螢光氏方で見出された。瓦製のアンカ様のものであった。

六、調度品

印籠 この物の使用せられなくなってから久しいが尾合の鶴淵螢光氏、宮田福松氏から報告がある。



印籠(尾合)
(今井善一郎撮影)



印籠(尾合)
(今井善一郎撮影)

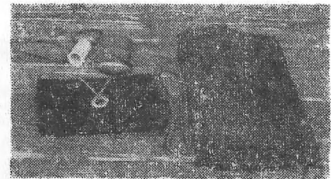
矢立 これも同じ右二氏から報告があった。
硯箱 これは箱形の大きな硯入れで、下に二乃至三の小引出しがあり、上は蝶番い上げ蓋になり、あけると筆硯がある。尾合の宮田福松氏、角田福市氏から報告があった。後者では之を掛硯と呼んでいる。

財布 下古語父から一例報告があった。

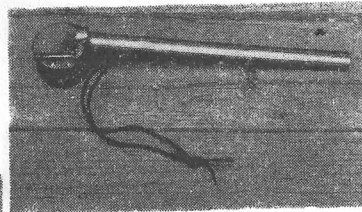
鏡 鏡は柄持式大型一面、紐式小型二面、岩室から報告になっている。

七、生活用度品

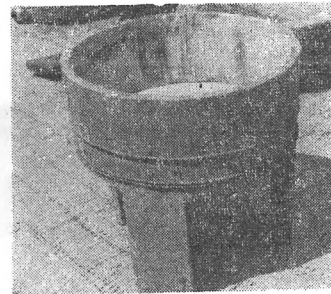
手水鉢 二種類上古語文の増田氏から報告がある。一つは木製の平桶、三つの脚が下部に伸びている。洗面具、一つは石製の深鉢、これは便所の手洗鉢、いずれも現在は使用されていない。



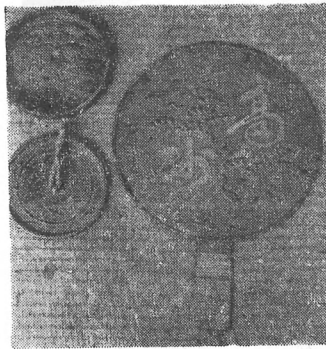
さいふ二種(下古)
(佐藤清撮影)



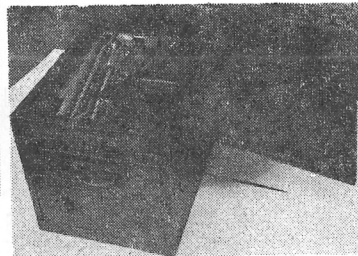
矢立て(尾合)
(今井善一郎撮影)



洗面器(上古)
(阪本英一撮影)



鏡(岩室)
(近藤義雄撮影)



硯箱(尾合)
(今井善一郎撮影)

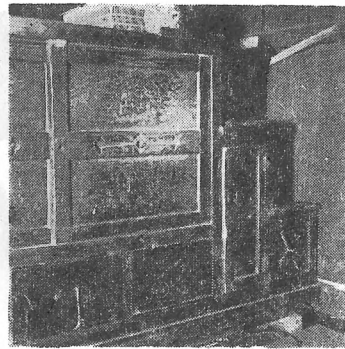
ネコ これはアンカともいう、同じく増田氏のもの、瓦様の焼物の平鉢に炭火をいれ、一方のあいた木製の箱に納め、上に布団などかける。簡易の置炬燵。

置戸棚 尾合壽木茂林治方箱形の大きな容れ物、前面がけんどん仕掛の戸が立たっている。

箱梯子 尾合小林辰蔵氏方にある。上下二段組のもの、今は別口に分けてある。安政四年作銘がある。戸棚と引出しが側面に作りつけられている。



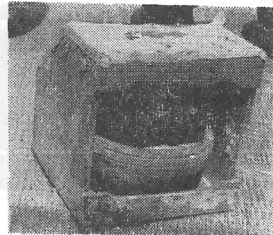
箱階段(上部)(尾合)
(今井善一郎撮影)



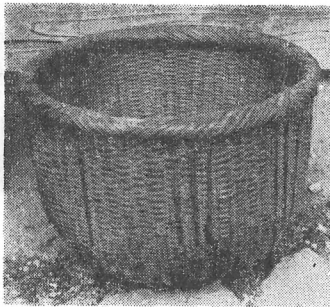
箱階段(下部)(尾合)
(今井善一郎撮影)



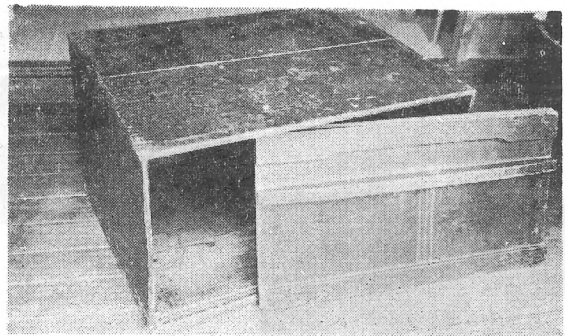
手洗鉢(上古)
(阪本英一撮影)



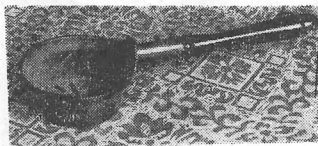
ネコあんか(上古)
(阪本英一撮影)



イジメ(岩室)
(近藤義雄撮影)



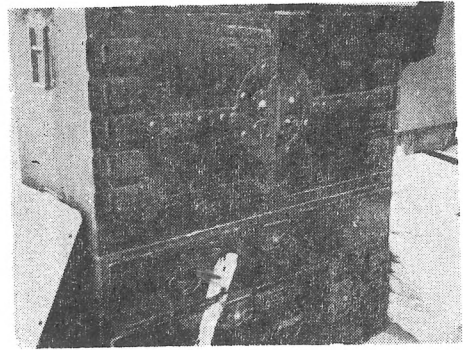
置き戸棚(尾合)
(今井善一郎撮影)



火のし(尾合)
(今井善一郎撮影)

イジメ 之は育児用品として項目を新にすべきであるが一応ここに入れておく。既に先述した藁製のいづみ・いづめ等と同一の用途のものであるが、前者が蓋がある為これを食品関係に分類したが、ここに竹製の籠のイジメ(と呼ばれた)が報告されている。土地の説明にイジメは子供の立場から、この器の中に入れられたつらさを現わす語とさえ云うが、いづれにせよこれは専用の育児具であった。岩室岡村雄二氏方報告。

火のし 之は真鍮製の火皿に木



箆 筒 (尾合) (今井善一郎撮影)



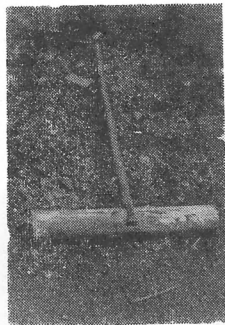
竜吐水 (岩室)
(近藤義雄撮影)

柄のついたもので、深い火皿の中に炭火を入れ、衣類等に火のしをす
 る。この金属は厚く、熱度の持続と直接の焦けを防いでいる。尾合と下
 古語文から報告がある。之は服飾具そのものではないがその関係品なの
 でここへ入れた。
 箆筒 旧形の古い鉄金具の物々しいものが尾合の檜木茂林治氏方から
 報告になっている。この型も今は稀らしい。
 竜吐水 高平の諸田又二氏、岩室の岡村雄二氏方から報告になってい
 る。木製箆筒。ポンプ柄一本を上下して、弁を開閉する事によって水を
 噴出する。明治時代のもの。

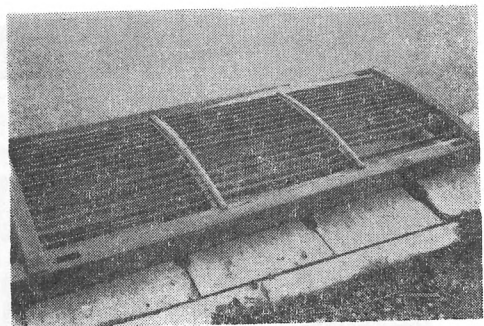
生業に関するもの

一、農具

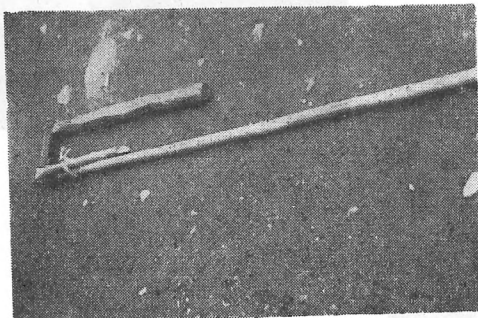
農具として報告された品物も現在使用されたものは少なく、一時代乃
 至もっと以前に使用された道具類である。以下不揃乍ら之を列記する。



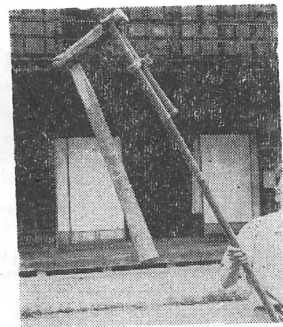
麦打ち杵(高平)
(関口正巳撮影)



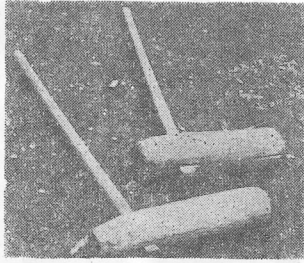
さ な (尾合) (今井善一郎撮影)



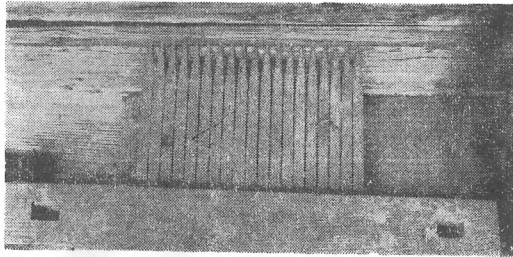
くるり棒(岩室) (近藤義雄撮影)



クルリ棒 (上古)
(阪本英一撮影)



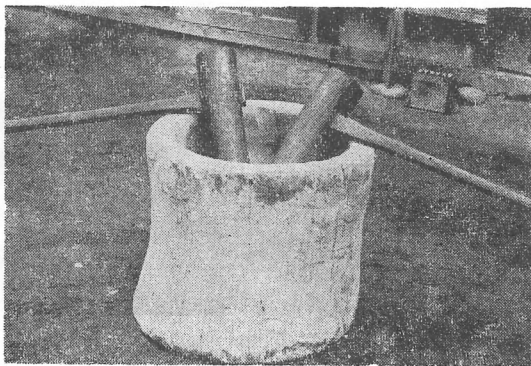
麦つき杵 (高平)
(関口正巳撮影)



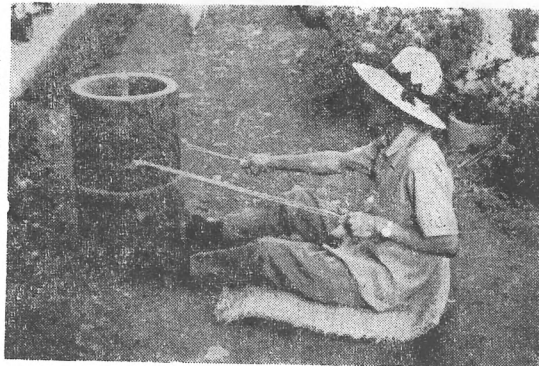
かなごき (岩室) (近藤義雄撮影)

脱穀器の原始的な形のものに麦打ち杵が高平の中口秀吉氏方から出ている。之はやや太目の棒に丁字形に柄をつけたもので麦の穂をネコの上にひろげて打って実を落したという。この進歩したのがクルイ或はクルリ棒という竹の長柄の先に廻転する棒をつけたもので、この棒には竹との接続部分が別の木を用いたものと、穀物を打つ棒の部分の自然弯曲を利用したものがある。後者の例は生枝の中村佑氏方にあり、前者は一般的であるが岩室の中村広治氏、上古語父の増田茂樹氏、高平の小林一雄氏等から報告されたがこの例は村内にまだ多いと思う。稲のボッサや大豆もネコの上で打ったものである。

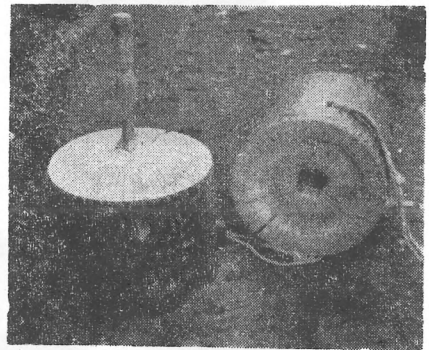
小麦の脱穀にはサナがあった。尾合の岡村和太郎氏方のは今は脚を失っているが一応昔の姿が偲ばれる。細長く割竹を縦にならべたもので小麦を打ちつけて穂を離したものである。



オシッコト (上古)
(阪本英一撮影)



木製臼 (岩室)
(近藤義雄撮影)

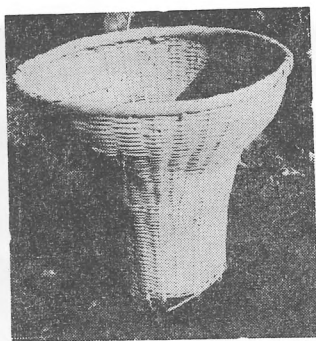


木製臼 (岩室)
(近藤義雄撮影)

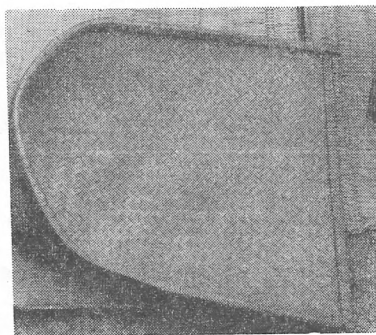
米麦共に（金具に多少の広狭があった）用いたものに金ゴキがある。他所で千歯（センバ）と呼ぶもので櫛状に鉄片をならべ、穀類をしごき落したものである。岩室の岡村雄二氏方から報告されている。下古語文にも報告があった。

麦の場合落ちた穂を大臼に入れて軽くつきノゲ押しをした。この時用いる麦つき杵は餅つき杵よりも軽くできています。高平の中口季吉氏方から報告されている。上古語文から報告のあったオシッコトウスはこの目的のもので、臼の下に麦稈束を二つ入れてスプリングの役をさせ、麦、米のノギやカラを取る為に用いた。

米や大麦は脱穀しただけでは籾がらがついている。之をとる為にスルスにあげてひく。岩室の中村広治氏方のスルスは松の木太いものを輪切りにし、その年輪を臼の歯として利用したもので古型のものである。臼の上玉の両端に紐をつけて交互に行き来させてする。一人でもすれるが二人使いが多い。下古語文から報告の一例は桶用の作りで土臼の一種であろうが、やはりやや古い形と思われる。



ヒョウグシ (俵口) (尾合)
(阿部孝撮影)



箕

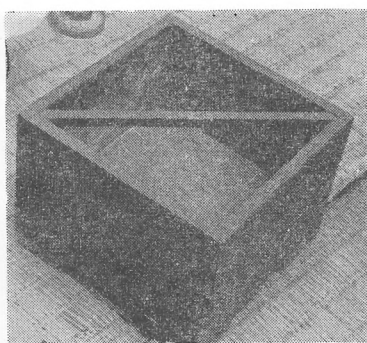
(上古)

(阪本英一撮影)

穀物の取扱は箕（ミ）です。その一例上古語文の増田茂樹氏方のはやや上等のもので篠竹製であるという。（写真を見ると籐のように思われる）

俵に入れる時一種のジョウゴを当ててすべりよく穀類の納るようになる。そのジョウゴ様のものを表口（ヒョウクチ）という。尾合の宮田氏から報告がある。外に下古語文からも一例出されていた。

できた穀類を計るに枡が用いられるが、ここには斗枡が上古文の増田氏から報告されている。これは旧式の金盤（カナバン）枡の一種で、一



斗枡 (上古)
(阪本英一撮影)

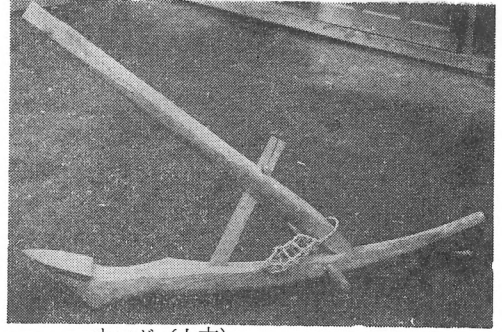
斗枡には補強の為の斜の鉄の角棒が入っている。斗枡はこの後皆円型になった。升以下の枡は引きつづき角形であったが金盤は失われて行った。

農具の中耕作用具を一瞥するとテンガ、エンガ、スキ等皆此の地にも存するが、報告にあらわれたのは僅々左の二種にすぎない。即ち一つは推土器の一種、四つ子である。一つは木製

のものに六本の鉄釘を打ったものであり、この方が古い。一つは鉄製の軸から釘が五本出た道具である。この方が新式のものであり、現在使用されている。エンガ等で田畑を鋤き起した後この道具で土の塊を打ち摧くのである。四つ子というのは昔こ



四つ子 (高平)
(関口正巳撮影)



オンガ (上古)

(阪本英一撮影)

の釘が四本だった時の名残りであろう。

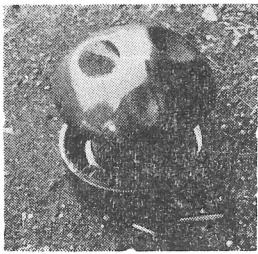
田畑を鋤き起す道具はオンガといい、馬に引かせたのであるが上古語文の桑原勝太郎氏方から報告されたものはそのやや古い一例である。このオンガは其の後幾改良された。この例の如きは先の金具は鍛冶屋で、木質部は村の大工等にたのんで作ったものである。

次に農業用雑器具を少しく掲げておく。高平の鳥山鳴氏方から報告されたものに肥出しかぎがある。その古いものは自然の木の枝



肥出しかぎ (高平)

(関口正巳撮影)

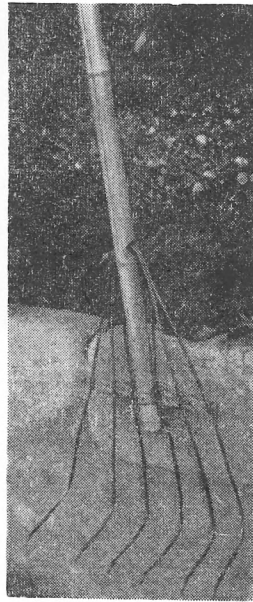


鶏の給水器 (尾合)

(阿部孝撮影)

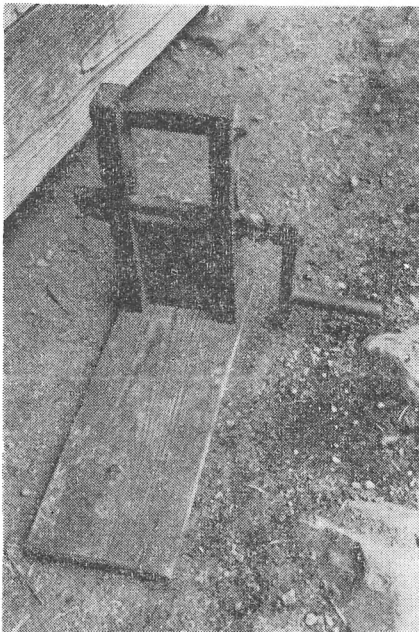
を使い、その股の部分を利用して尖ったカギ様なものを作り、主に堆肥をかき出すに用いた。最近はもっと作りやすい鉄製の二本子の釘を柄の先につけたもので同一の仕事をするのである。

養鶏用の水与え器 これには種々の形式があつたが報告された一例は尾合の小林みき氏のもの、さかさに立てられた器からは気圧によって水は下の受け皿に一定量しか下らず、いつも皿の中に水が保たれるのであるが、この考えの産物は非常に多かったのである。



熊手 (岩室)

(近藤義雄撮影)



綿くり機 (岩室)

(近藤義雄撮影)

これまで 熊手の事である。岩室の中村広治方から報告された例は爪の部分が針金で出来ている。通常は割竹でできているのである。つまり多少これは開けた産物と云えよう。

綿繰機 今木綿の栽培がたえて久しいのであるが、時にこの綿繰機の残っている家がある。云わば綿と種との分離機である。岩室の岡村雄二氏方にこの一例がある。二本の棒は螺旋によって相互に廻転し合うと共に互に距離を一定にせしめて、種を綿質部と分離せしめるのである。



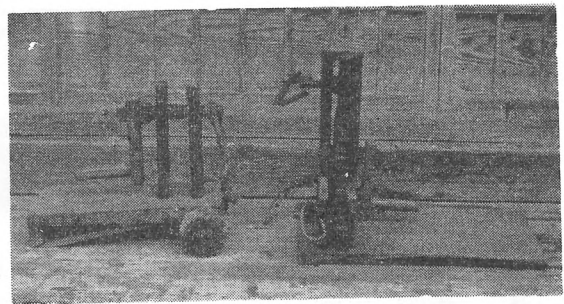
種子入れ (ひょうたん) (岩室)

(近藤義雄撮影)

種物入れ 農家にとって、次期農作の基を作る農作物種子の保存は最も大切な事である。この為に種子入れに種々な工夫がされる。第一は湿気をおそれ又過度の乾燥をおそれる。第二に虫鼠の害から守る、第三に簡便なものをという点等からして、上等なものはその為の小篋筒から、割目の入った竹筒等種々あるが、ここに報告になったのは岩室岡村氏方のとうがんである。瓜の中味をくり抜いたもの。

次には藁の工品作製用具を一瞥する。これもいろいろあるが、ここに報告のあったのは岩室中村広治方の藁叩き杵 (キネ) 一つの大きい (堅い質のものを用いる) を輪切りにし、柄の部分削って握れるようにしたもの、石の台上に藁をおいて叩き柔らめて加工に用いる。

次には縄より機、これは縄ない機ではなく、縄を三本つかって、それをより合わせる道具、尾合の小林みよ氏方から報告されたのはやや古く、

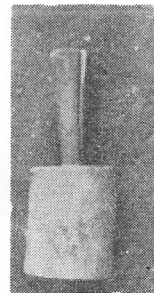


縄より機 (下古)

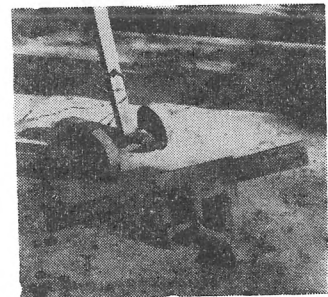
(佐藤清撮影)

一方の固定部は二本立てた木か杭かに固定して用いる。下古語文からの一例はより進んで三つのよりをかける部分が歯車で同時に動くようになり、固定部は台になって居り、人がのってその目方で動かさないようにしてある。他の一方の逆によりを (三本一緒に) かける方は両者とも似た構造で、下に車がつき、縊りがかかると次第に縄全体が短くなるので、車がついていて前進できる。

筵 (むしろ) 織機もまだ各地に残っているが岩室岡村憲一氏方から報告された一例。写真は杵だけで実演のところでないからよく了解しにくいかもしれないが、上下二本の杵と、左右二本の柱が見えるが、この下の杵はそのまま台で、実はその上の中間に今一つ杵が入り、上下の間に芯縄を幾重にもめぐらし、その縄を篋 (オサ) の役をする一方は只の穴一方は広く縦に抜いた穴をもつ柄つきの横棒に通し、これを上下して、そ

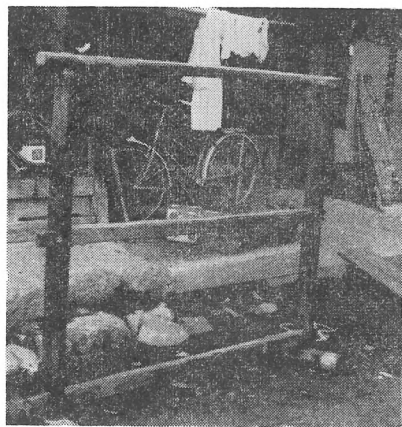


わらたたき (岩室)
(近藤義雄撮影)



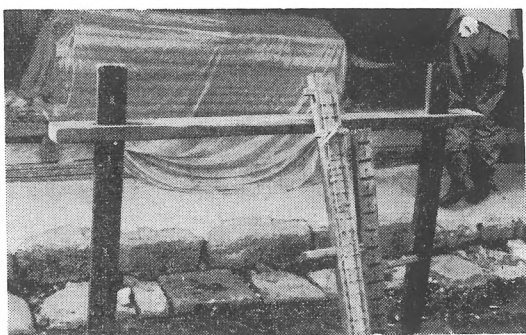
縄より機 (尾合)
(今井善一郎撮影)

編むので、大型の丈夫な筵ができる。白沢にはねこはまだ多く残存しているが、これは最早後の製作者を見出す事のできない技術であろう。堅

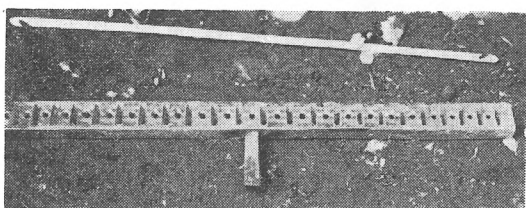


ねこあみ機 (岩室)
(近藤義雄撮影)

の間、藁を左又は右から入れて織る。此の地方ではネコは昭和の大戦前迄作られていたといい、ねこ織の機械も残っている。これも岡村氏方ねこばたが報告になつてい



むしろ織り機 (岩室)
(近藤義雄撮影)

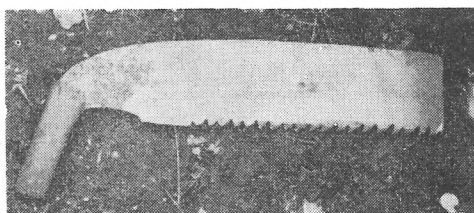


むしろ機のおさ (岩室)
(近藤義雄撮影)

牢な筵である。

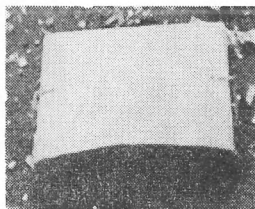
二、山樵用具

白沢は古語父の連山を背負つて山地が多いのであるが、山林用具は比較的少ししか報告されなかつた。稀しいもののみ報告されたが為であつたかしのれない。



大鋸 (岩室)
(近藤義雄撮影)

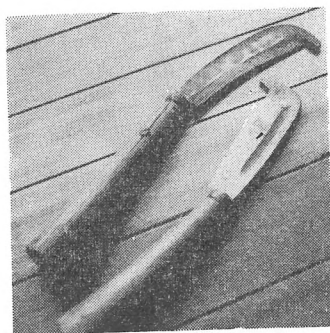
大鋸(オオガ)木挽鋸 これは本当の大鋸ではない。大鋸の普通の品はもつと背が厚い、本報告品は中位のものであろうが、たしかに木挽の使用品であつたと思われる。大正期のもの、岩室岡村雄二氏方の品。目立てばさみ これは鋸の目立て(鑪で刃を尖鋭にする)をする時、その振動をふせぐ為に鋸を挟んで固定する道具、同じ岡村氏方の報告、今も使用しているという。



目立ての時の鋸おさえ
(岩室)
(近藤義雄撮影)

枝打ち鉞 これは山林の育成中、下枝の打落しに使用する。普通の鉞の先に堅い曲りがついていて枝をおさえたり落したりするのに便利に出

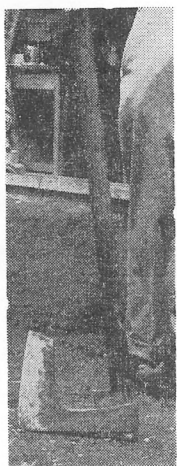
来ている。尾合礪木茂林治氏方の報告。



枝打ち鎌 (尾合)
(今井善一郎撮影)

削りよき これは蔽密に云うと、山林用具ではなく大工用具なのである。しかし、よきというと普通刃部の狭い背巾の厚いものになるが、それは専ら山林用具で、根切りや、枝打(大枝)に使用される。けずりよきは細身の丸材を鋸を使用しないで角材にけずって作り出す道具であ

り、又大きな材木の場合も之を荒けずりして平らな面を作り出すのに用いる。普通よく手斧(チョウナ)作りの家という場合、水平に木面を叩き平らげるチョウナと、このヨキパツリという削りよきを使用する場合があります、実際はこの削りよきの使用の方が多かったかと思われる。上古語文小曾根重雄氏方の報告。



ケズリヨキ (上古)
(阪本英一撮影)

三、狩猟用具

狩猟用具は全く報告に乏しかった。大形の鳥獣に別れて久しい為か少ない。

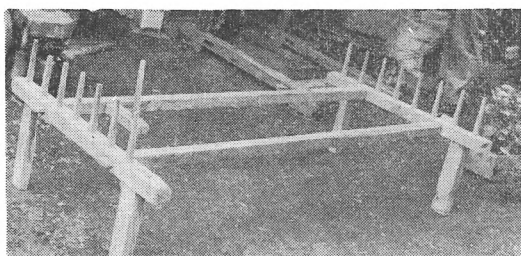
猪槍 (ししやり) 高平の諸田又二氏からの報告、江戸時代使用の由、猪狩に用いた鎗。全長一九三糎、穂長一二糎半。

四、紡織色染に関するもの

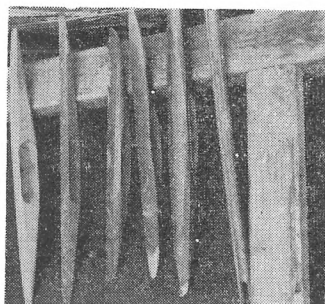


ししやり (高平)
(関口正巳撮影)

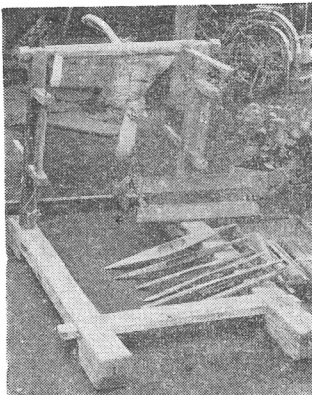
これも報告の少なかつたのは、今はこの仕事から女性が急激に遠ざかり、且つ忘却されつつある為と思われる。



ヘデ (上古)
(坂本英一撮影)

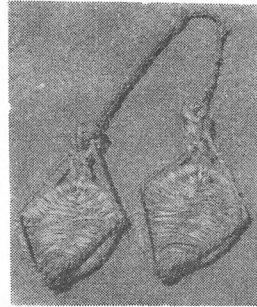


イザリばた上(ヒ)(下)(上古)
(阪本英一撮影)

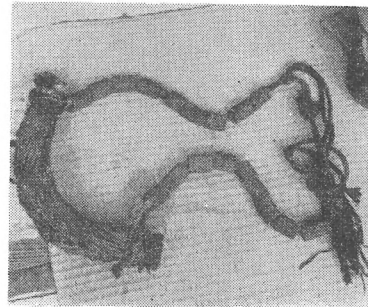


へでえ 糸をへる（織る前に糸を整えること）時に使う道具で此の地では多くの女性が使用できた。終戦後も物質不足の頃は農閑期には使用したという。材料は杉、村内の大工の製作。この例は上古語文字敷伊作氏の報告である。

いざりばた 同じく字敷氏の蔵品。終戦後しばらく使用したという。之は自家用機織の中では古式のものである。写真に見える尖ったのは「ひ」で細いのが絹の上品の時、太いのは木綿等に使用した。



馬の沓（上古）
（阪本英一撮影）



しりがい（岩室）
（近藤義雄撮影）

五、畜産用具

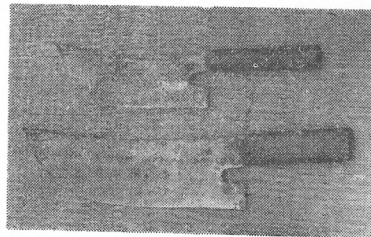
馬の沓 上古語文の桑原雅三郎氏方、尾合の宮田福松氏方から報告があった。藁の自製品、馬を飼った頃は沢山作った。今は作れる人も少ないであろう。二月上旬に奉公人の出代りという日があり、年期の使用人が止めて主家を去る時は「ゆずりぐつ」と云って、百足の馬の沓をおいていくものだと言われたという。

馬の尻繫（しりがい） 岩室の岡村雄二氏方からの報告、荷鞍用という。しかし写真を見ると普通の荷鞍用のものはもっと柔かな材料ででき

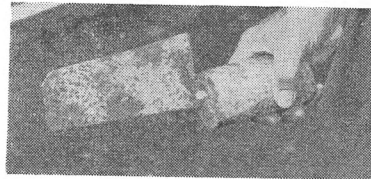
ているのではないかと思う。この品はむしろ田植などの代掻きの時に使う。しろぐら（代鞍）用のものではあるまいか。材料が濡れてもいよいよにできている。

六、養蚕用具

養蚕用具は本来農具の一部分であるが、資料がやや多く報告されているので一項立てておく。



桑切り庖丁（上古）
（阪本英一撮影）



煙草切り庖丁（上古）
（阪本英一撮影）

桑切り庖丁 もとは蚕の小さな時は桑葉を刻んで与えた。その時の庖丁である。鍛冶屋にたのんで作ってもらったり、市販を買ったりした。報告の一例は上古語父増田茂樹氏のもの。

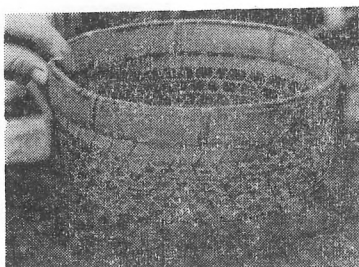
これに似て非なる一例を上ると、やはり上古語父字敷伊作氏方から報告のあった煙草刻み用の庖丁は、昔専売以前自家用当時の使用品であるが、刃がやや短かく厚い。

桑ぶるい これも現在では使用しないが刻んだ桑の葉を蚕の上にあぶるにかけて給する道具であるが、蚕齢の差によって篩の目が大きくなるの

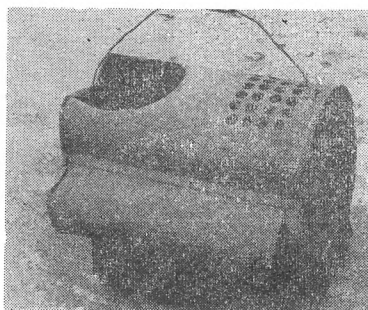
である。上古語文、宇敷伊作氏方。



ダンロ (上古) (B)
(阪本英一撮影)

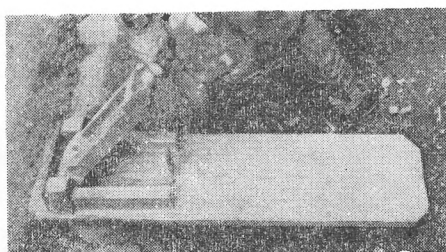


桑ぶるい (上古)
(阪本英一撮影)

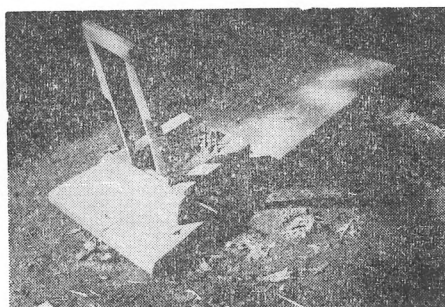


ダンロ (上古) (A)
(阪本英一撮影)

暖炉 これは成育期の気温の寒い時、室温保持の為め用いたもので、元来は室に小さな炉を切ったり、火鉢を持ち込んだりしたが、大正頃は炭又はマキ使用の持ち運びのできる道具ができた。Aはマキ用、Bは炭用、共に上古の増田氏のもの。
まぶし織機 明治から大正期、昭和の初期迄は此の地方ではマブシは萱を刈って自製していた。これは屋根葺萱のように剛くない柔かいのが



まぶしおり機 (岩室)
(近藤義雄撮影)

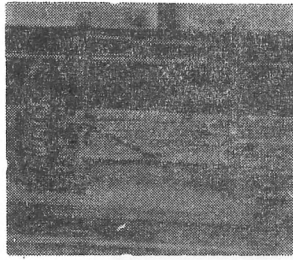


アブミ作り機 (尾合)
(阿部孝撮影)

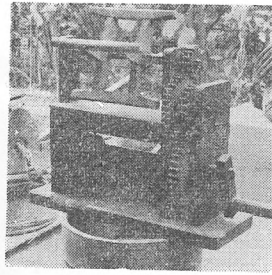
喜ばれ、専ら作りかやを使用した。報告の一例は尾合宮田福松氏方のもの、腕木を上下して、コの字形の中にカヤを折り込んで作った。同様な一例が岩村の岡村雄二氏方から報告されて居るが、これは中村卓郎という人の考案になるものという。
座繰りは ぐず蘭の自宅処理をした糸とり機で、明治、大正、昭和の初期を通じて一般に行われた。従ってその機械も岩野、上古語文、下古語文、尾合等各地から報告されている。終戦後も稀には糸をひく人もあったという。

牛首・糸かえし台 これらはいずれも糸を巻いたり、巻きかえたりするに使う道具で広く使用された。糸かえしは現在も利用されている。岩室岡村雄二氏、岡村作次郎氏方から報告があった。

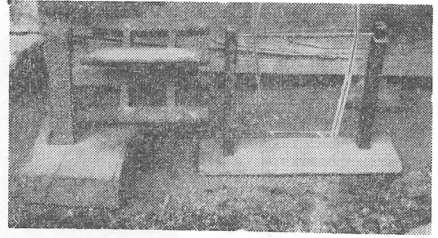
くだまき機 糸から機械への過程に使用する道具、いざり機を使用していた頃の品昭和の初年迄使用した。報告は岩室岡村雄二氏方のもの。



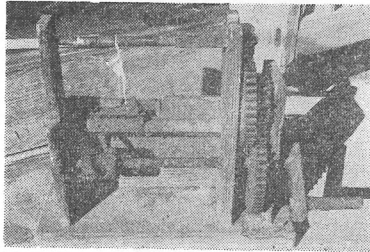
ざぐり (下古)
(佐藤清撮影)



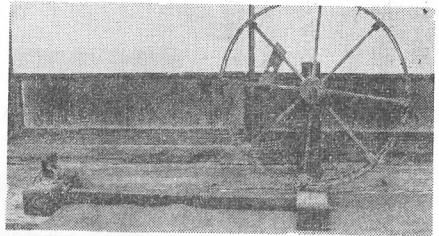
ざぐり (上古)
(阪本英一撮影)



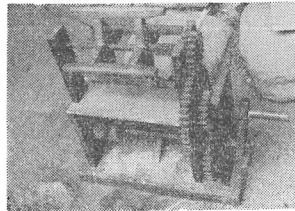
牛首と糸かえし (岩室)
(近藤義雄撮影)



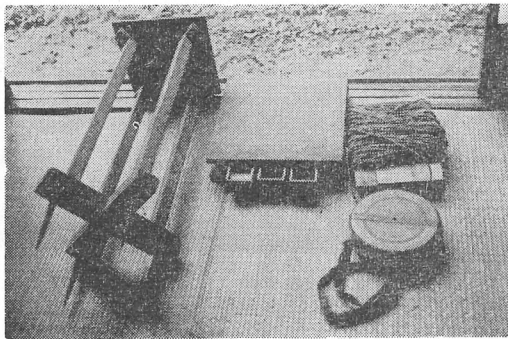
ざぐり (尾合)
(今井善一郎撮影)



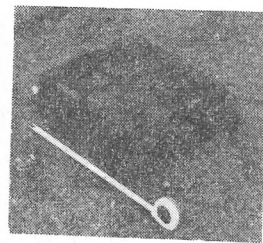
くだまき機 (岩室)
(近藤義雄撮影)



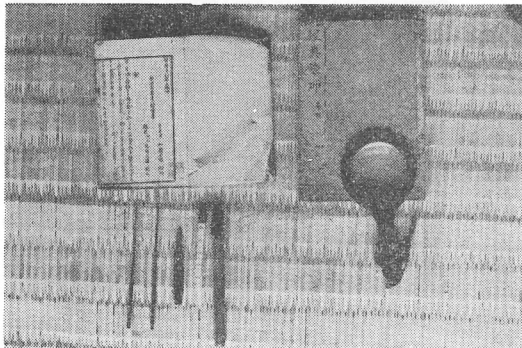
ざぐり (岩室)
(近藤義雄撮影)



測量道具 (岩室村有) (近藤義雄撮影)



伊賀桝 (高平)
(関口正巳撮影)



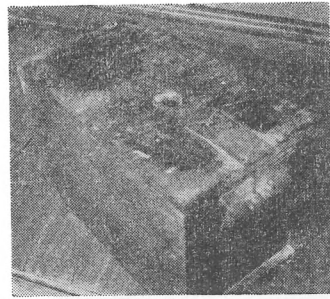
漢方の医具と医書 (岩室) (近藤義雄撮影)

これを二升桝と称したという。
測量機具 岩室の部落有であるが三脚の部分が固定した四脚のもので

度器の中斗桝は農業の収納の場合に記述したが、その特殊のものとして、これは民俗資料としてより史的資料であるが、伊賀桝というものが報告されている。沼田藩主真田伊賀守は苛政で有名であるが、年貢取立用の特殊桝を作り之を使用せしめたといひ、高平の鳥山鳴氏方に遺品がある。勿論云い伝えによるものと思うが、徳川初期のものである。桝は内法で縦横二一、二程、高さ八、六程あり、二升二合入るといふ。

七、各種職業用具

ある点などが興味深い、明治九年の地租改正当時の品物という。
 漢方医具 岩室の中村いち氏方にレンズ、検温器等極く簡単な材料が
 医書数冊と共に残っている。この程度の機具で人命をあづかつた昔の医
 者は余程の名医であろう。



銭箱 (尾合)
 (今井善一郎撮影)

銭箱 これは職業的のものかどうか
 かわからないが、(金融業関係の人
 もあつたかしれぬが) 各地に可成沢
 山残つて居り、古くから銭が好かれ
 た事を実証している。大体明治初期
 迄は之を使用していたのであろう。
 堅牢である為遺品が多いのである。

八、通信運搬に関するもの

これも報告が比較的少なかった。

一、運搬具

手籠 目籠(メケエ)などとよぶ。桑などつんだり、野菜物など畑か
 らもつて来るにつかう。

背負籠(ショイカゴ) 大形な籠で背負つて運ぶ。落葉など。

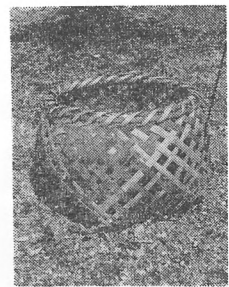
手桶 水類を普通手にさげて運ぶ時に用いる。天秤にかける時もあ
 る。

天秤(テンビン) 二つの荷を両方にかけて、肩のせて運ぶ棒、しな
 うように出来ている。

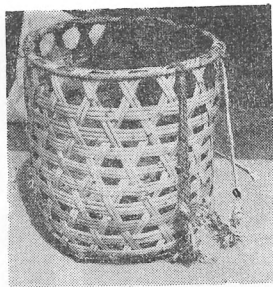
さげ 天秤用の深い桶、竹の長いツルがついている。水、肥料等運
 ぶ。

シヨッコ(背負子) 岩室の中村広治氏方からの報告、ついている繩を
 カッチニ繩という。この荷背負い具は現在も使用している。

尾合の小林きみ氏方の荷背負いは普通背中に当る部分は藁繩で痛くな

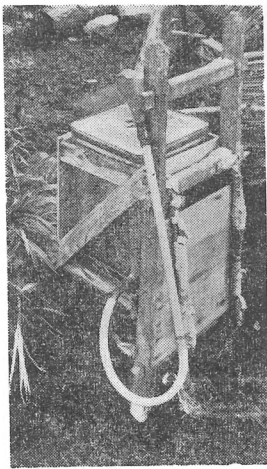


大籠(生枝)
 (阿部孝撮影)



手籠(生枝)
 (阿部孝撮影)

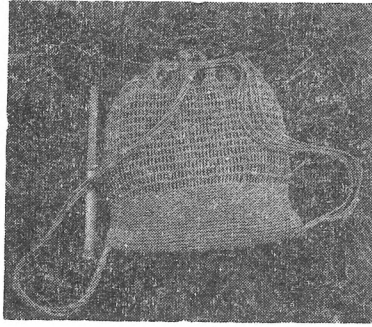
いようにできているのを、板にしてあり、且つ石油罐の大きさのものが
 そっくり入る様に構作してある。つまり、自家製背負い消毒器である。



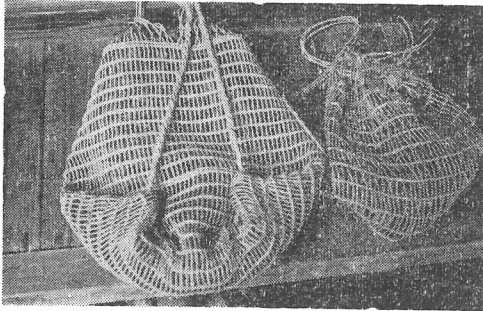
運搬消毒具(尾合)
 (今井善一郎撮影)



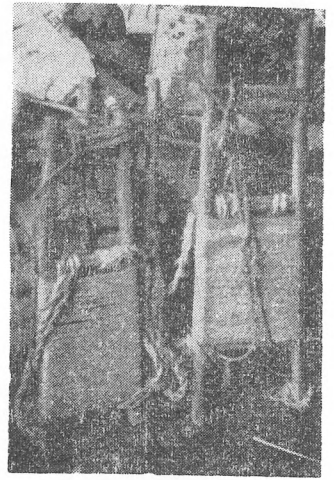
肥だめとさげ(生枝) (阿部孝撮影)



ビク (生枝) (阿部孝撮影)

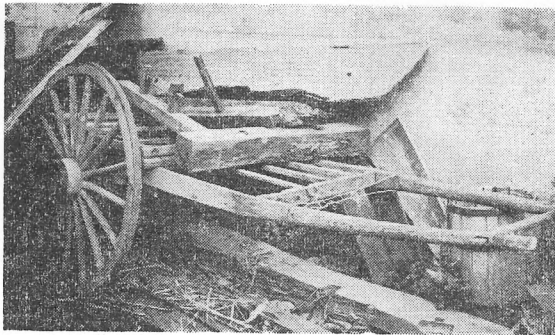


背負いびく (尾合) (今井善一郎撮影)

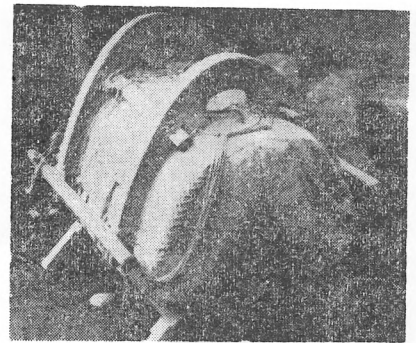


しょっことかっちに繩(岩室)
(近藤義雄撮影)

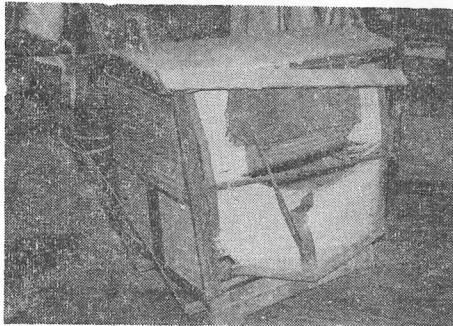
ビク 之は芝を綯って手製したナップサックの原形。丈夫で美麗であり、内容品も一目判然して忘れ物等にもよく、非常に役立つ背負い袋である。村内各地に見出されるが、この一例は尾合禱木茂林治氏方のもの。



荷車 (岩室) (近藤義雄撮影)



荷鞍 (岩室) (近藤義雄撮影)



かご (生枝) (阿部孝撮影)

あるが、比較的最近迄用いられたというのは、このカゴは病人専用のも

荷鞍 馬用の荷物鞍、馬のいない現在は稀らしい遺品になった。岩室岡村雄二氏方のもの。今は荷鞍を作り、修繕する人もいなくなった。

荷車 昭和初期迄は殆どこの車を人が、曳き、より大形の長柄のものを馬が曳いたのが重運搬の主要具であった。岩村の中村卓郎氏方のもの。

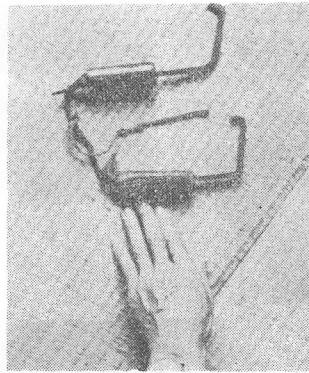
駕籠 これの使用時期は不明で

のであったからである。或は元来は昔の乗物の遺物であったのを病人用にしたのかもしれない。大きさは、高さ九五糎、上部縦一一〇糎、横六七糎。下部縦八〇糎、横六五糎ある。生枝の中村佑氏方の報告。

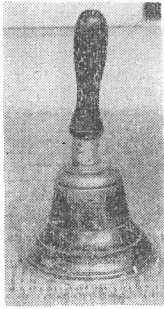
九、団体生活に関するもの

これは岩室の例だけ僅か報告があった。

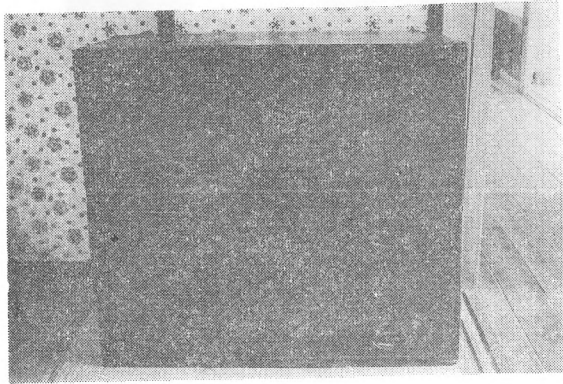
鎮守の鍵 岩室には二個あり、一つには鍵の柄に「諏訪大明神」とあり、他の一つは「保多賀大明神」とある。それぞれの社の名前である。



鎮守の鍵

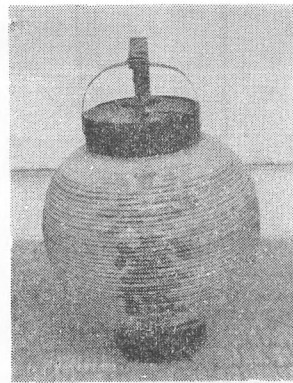


区の鈴



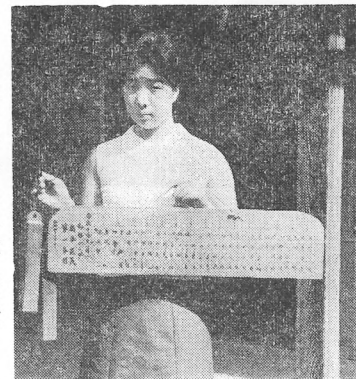
長だんす (何れも岩室)
(近藤義雄撮影)

区の鈴 真鍮製の首のふれる鈴、最近迄区の集合の合図に使用した。今は有線放送ができて鈴は不用になった。
区長箆筒 区有の文書を入れておく、区長が代れば引きゆずる。現在でも使用している。



区長提灯 (岩室)

(近藤義雄撮影)



夜番の番札と拍子木 (高平)

(関口正巳撮影)

区の提灯 之は区の行事のある時に使用する。又火災の時など区長がつけて出て、自分の所在を表示するわけである。

共同葬具 岩室には共同葬具のある部落があり、葬式の御輿は之を使用する事になっている。

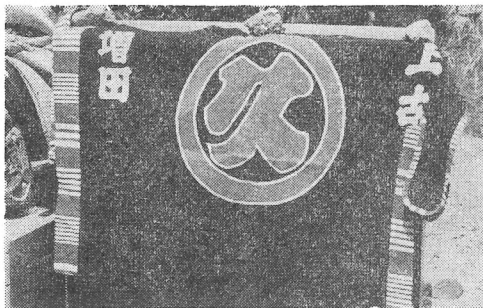
外に高平に次の例が報告になっている。

夜番の番札 之もどこにもあるものであるが、火の番の為め拍子木をうって夜警する。その順番を書いた札が廻ってくる仕組になっているのである。

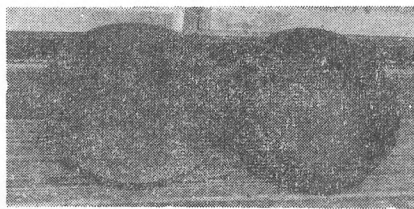
十、儀礼に関するもの

行器 (ほかい) これは幸、不幸の際赤飯、餅等を入れて他家(その家

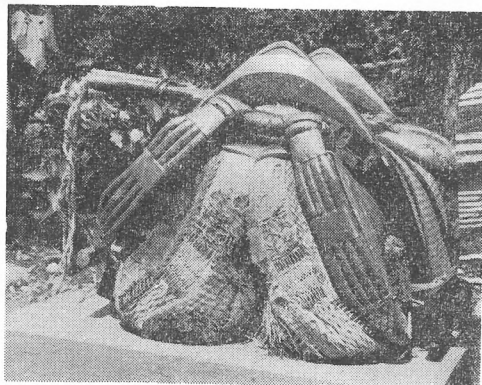
が当事者）へ贈る道具である。建築の建前祝には餅、祝儀の時又葬式の時等は赤飯を贈る例がある。下古語文からも報告があったが、写真の例は尾合生方伊雄氏方のもの。



飾馬具の腹掛け（上古）



行器（ホカイ）（下古）
（佐藤清撮影）



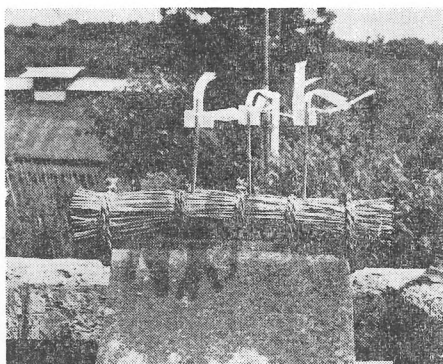
飾り荷鞍（上古）
（阪本英一撮影）

祝儀荷鞍 馬の鞍であるが特に結婚式にのみ用いるもの、化粧荷鞍で、赤青等の色彩も美しく、金具も光って居る。結婚の時は鞍の両側に箆筒をつけ、中央に花嫁が横坐りに乗っていったという。之に付属した腹がけもある。勿論しりがい等も残存している。共に上古語父増田茂樹氏蔵。

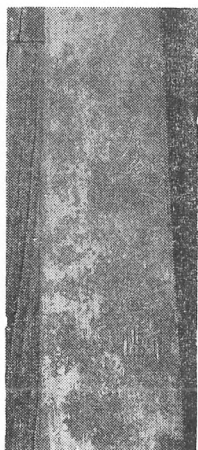
十一、信仰行事に関するもの

幣帛類 尾合付近の所見では屋敷稲荷の幣帛は屋根の棟上に立てる習慣がある。自製のもの。

祭供品 尾合鶴淵とり氏方には神様の太刀として長大な刀身が蔵されている。全くの供物である。尾合尾清という銘がある。



稲荷の神幣（尾合）
（今井善一郎撮影）

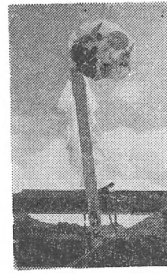


神祭用 太刀銘の部分（尾合）
（今井善一郎撮影）



神祭用の長い刀（尾合）
（今井善一郎撮影）

神棚にダルマを上げる風習は上毛の他地と等しくこの村にも行われていたが、猶、高平には小祠の内にもだるまが上げられているのが見られた。



建前の祝柱（高平）
（関口正巳撮影）



（絵馬尾合三柱神社）
（今井善一郎撮影）

盆の高灯籠 高平には新盆の家では戸外に杉の高竿を立て提灯を掲げる風習がある。

建前の幣立 建築の時、建前の際棟の上に丸扇形の祝飾のついた幣束を立てる。この地方一般の例である。写真は高平所見。

絵馬 神社に絵馬を上げる習慣もある。尾合の村社には大型の見事な絵馬が見られた。可成古いものであった。

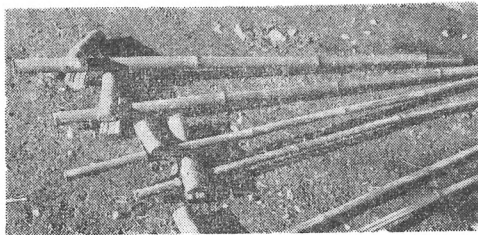
十二、娯楽遊技に関するもの

この例も少ないが左記少例報告になっている。

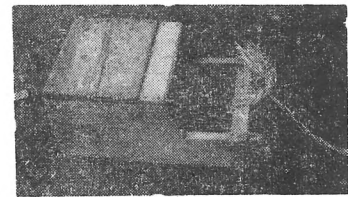
竹馬 尾合所見。

子供そり 尾合及び高平所見。

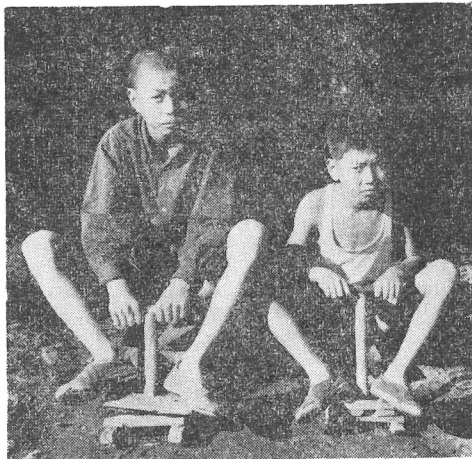
いずれも雪の日の遊び道具である。



竹馬（尾合）（今井善一郎撮影）



箱そり（子供用）尾合
（今井善一郎撮影）



子供そり（高平）（関口正巳撮影）



雪かきと子供そり（高平）
（関口正巳撮影）

白沢村民俗関係資料

○ 三騎石

大字生枝の数坂峠の中腹に三騎石と云うのがある。文治の昔九郎判官義経が、兄頼朝に追われて再び奥州に赴き秀衡に投ぜんとした時、主従三人が此石の陰より谷間へ逃れたと云うので、今も道行く人が小石を拾っては其上に積み重ねて、之をかくしてやろうとして居る。其側に蹄溜と云うのがある。義経が馬の蹄跡に溜って居た水で咽喉を潤したので、それ以来どんな旱天にも干た事が無いと伝えられている。只此の前で倒れた馬は快復しないと云って今に恐れられて居る。

それから東村の平川には義経主従三人の木像を祀った判官堂があり、判官井戸や義経の腰掛石がある。又片品村の東小川には弁慶の下駄の跡だと云う、二の字形の凹の付左右がある。更に奥へ行くと赤城根村根利山には、義経が滞在したと云う公屋敷がある。尚池田町下発知には義経公の粟の借用証文があり、花咲峠を越えたと云う千貫松の伝説がある。思うに鎌倉よりの追手を迷わさんが為に、幾組かに別れて何れか真の義経であるかを知らしぬ策に出たものであろう。

三騎石谷深くして霧を吐く

○ 田植地藏尊

大字尾合の禅定院にある本尊は、延命地藏尊にして丈三尺の厨子入にて、弘法大師の彫刻と伝え、世に開眼読経の地藏と云って、名高いものである。今日は田植えて忙しいが人が夫が不足して困ると云って居ると、何処からともなしに来ては手伝って行く男がある。それが何時になっても賃金を取りにも来なければ何処の人とも解らない。そういう事が何時になっても賃金を取ににもこなければ何処の人とも解らない。そういう事が幾度となく繰り返されたので、だんだん不思議な噂が立つようになつた。それに気付いた連中がそつと跡をつけてみると、何時もお寺の門前で見失つて仕舞うのである。或る日住職が朝の御経の時に、御像に泥が付いて居るのを幾度も掃除した事もあるところから、是は本尊様か俗人の姿とないて我々百姓を御救い下さるのだと、それから誰云うとなく田植地藏と云う様になつた。昔の開山は慈覚大師で開基は葛原親王である。又小児の虫封に靈験があるので遠方から参詣する者が多い。

○ 化物石

大字上古語父の道端に、高さ五尺、長さ二間にも余る大石が在る。時代は未だ此所か上組下組と別れなかつた貞享以前の事である。紅葉も己に色褪せて、芒の穂の中を狐の嫁入行列が通ると言う頃の事である。人家を離れた原中に魔物の踞った様に大石、側を通るとなんだか小川の流れる音迄がヒソヒソと話でもしかけられるようで、小雨の降る晩等通り掛ると身震する程淋しく、誰もがなるべく石の側を避けては山の根腰の方を通ろうとするのである。

或る夜庚申待って若衆が集まつた時の事、話は偶々化物石の事に移つた。衆議の結果は、剣道修業中の若者が化物退治に行く事に決した。而し相手は神変不思議な怪物である。失敗してはならぬと色々工夫を凝らした。夜は次第に更けた時分はよし、いざと言わば拔手を見せた見事切捨ててやろうと、伝家の宝刀鞘を払って其假肩にして通り掛つた。果して闇の中から何物か冷たい物が顔に触れた、間一髪を入れず、紫電一閃!! 確かに手応えがあつた。返す刃に怪物の本体と瞰む大石目掛けて五大刀、六大刀切付けて帰つた。化物退治をしたと、血の付いた刀を掲げて飛び込んだので幾つかの提灯が現場へ駆け付けた。見れば、怪物の手だと思つて切つたのは芒の

だ。夜な夜な丑満頃になると露を含みて重くなり、自然に道へ垂れ下がるのであった事が判った。側に血に染る人の耳が一つ落ちて居た。之は剣道の先生が肩にした抜身で切付ける時に手先が狂って、自分の耳を切り落したので刀に付いた血も之だと判った。斯んな悲喜劇があつてから化物石と言うのである。

(すると、折々冷い手で顔を撫でられたと言つて氣を失う人や、命からがら逃げ帰った人もあつた。)

春の颯、秋の夜長を上下と遠く隔てた若い者同志が、互に人目を避けて恋を語るには屈強の場所だった。夜更けて通り掛つた臆病者が之に驚いて逃げ出したのが怪談の因となり、若者同志は又之を幸に永く甘い恋に酔つた事であろう。

大石は只黙しけり朧月

○ 米山の湯

大字下古語父、昔も昔ズツと遠い神代の頃から古語父山の麓に、滾々と湧き湧るる温泉が在った。此恵まれた地に生れ住む人達は、朝は星を頂いて出て夕は月を踏むて帰り、田に畑に終日稼いだ体を自然の靈湯に浸し汚れを洗い清めて、楽しい夢を結びつ、老いも若きも又、輝かしい明日の希望に燃えつつも互に喜び会ふ桃源郷であつた。此湯番をして居る年寄夫婦に只一人の娘があつた。美人

と言うではないが、田舎にはめずらしい何となく垢抜のした愛嬌者である。年頃に成り多くの若者達の目は何時となく彼女に注がれた中には言い寄る者も数あつたが、柳に風と受け流しては居た。恋に狂うた一人の若者が遂に自分の恋の叶わぬのを恨むで馬骨を湯壺へ投げ入れた。神の怒にふれたのか、忽ち湯は冷えて水となり、加持祈禱も効なく、昔の湯には戻らなかつた。

大正十二年に地主の重太郎さんが之を汲み込むで沸湯を始めた。神経痛、リョウマチ、に効があると云うので繁昌する、今に湯船と云う地名が遺つて居り、享保十二年小林権平の建てた湯薬師の石祠が在る。

恋の米山灯が見える稲も孕むた夕月夜

○ 雲谷寺の鐘

大字高平、明けても暮れても戦の絶間が無かつた或る日の事、鎧を着て七つ道具を負つた弁慶坊がやって来た。門を這入ると峯の鐘楼を目差して駆け登り、掛けて在る大釣鐘を取り外して駆け出して行つた。さあ大変だと思つたが誰にも手も足も出せない。漸く過ぎるの事である、「オーイ其釣鐘を返してくれ」と、一生懸命に其跡を追いかけて行く坊さんがあつたが、もう遠く離れたと見えてとうとう追付く事が出来ず日は暮れてしまった。腹はペコペコになつて歩く事さえ苦しくなつ

た、幸い道端にある農家を見付けて粟飯を振舞つてもらい、すこすこ帰つたと言ふ。それが縁となつて今も下久屋に檀徒が残つて居る。後になつて本尊延命地藏尊の口の辺に粟粒が付いて居たので、之は本尊様が若い坊さんの姿と成つて釣鐘を取戻そうと、其跡を追いかけたのだと言ふ事が解つた。其後、鐘は信州の諏訪湖に沈められたので、天氣の好い日には水底に此鐘が見えると言つて居る。

沼田加沢記には文明五年高平山雲谷寺の鐘の銘が載せてある。思うに白根神社の鐘と共に武田勢の為に持ち去られたのが事実だろう。元禄十一年の書上帳には薩摩国雲谷寺末とあるが、長州禅門の逆修塔から考へても本寺と末寺が同名な筈もなく、周防国天花山雲谷庵こそ深い関係があると思われる。

○ 岩坂の天狗

大字平出と上久屋との間に岩坂と言ふのがある。古元の大藍之牧と久野の牧との自然界をなした処で、俳人松永乙人が「岩坂や雲に這る杖の跡」とよんだ様に、羊腸たる小径は辛して人馬を通するのみであつた。苔生したる石段高く十二神社があり昼さえ何となく淋しく、昔から天狗が住んで居て時々人を驚かすと言ふので、誰しも日が暮れると通る人は無かつた。

偶々止を得ず用事が出来て通り掛ると、夜

中に絶頂で鶏が啼いたり、大木を伐倒す音がしたり、地響を立てて岩石を投げ落しかと思つたと後では何もなかつたりする。

ソナナ馬鹿な話があるものかと、血気にはやる若者が度胸試しに行つてみると、闇の中に建てである道標の文字判然と読める不思議だと気がつく、それがソロソロと自分の方へ倒れて来るので気味が悪く、とうとう逃げ出したとか、又サラサラと行手の崖一ぱいに十三仏の大きい掛物が下がつて来たとか、道路の真中へ大木の玉切つたのが幾つも転がっている、邪魔だから一つ側へ片付けて通ろうと力を出して抱き付くと、突然其木が笑い出したので腰を抜かした事もあつたと言ふ。

投網する人が此下の淵へかかった時、向うの岸で「オーイ」と呼ぶので、之は同じ投網仲間が来て居るだろうと思つ中に、自分の腰にあつた魚籠の中から「オーイ」と返事をしたかと思つと、大きい光の玉が飛び出してお宮の上で消えたとか、中には宵闇に來た男が事もあろうに饅頭が一個かかった。之は天狗の悪戯だろうと又一網やると相変らず饅頭なので川へ捨てて逃げ帰つた。後になつて之は川向うに葬式が出来たので、それに使う饅頭を運ぶ荷馬が土橋を踏み抜き川へ落ち込んだのだと言ふようなナンセンスも含んでいる。又管田の石投天狗だとか、南越生の薪伐天狗

だとか言う様なものがあつて、石を投げたり木や竹を伐る音をさせたりする。辞典等調べると、天狗は深山に棲むと呈う想像上の怪物で、大天狗は山伏の形をなし鼻高く翼を有し、小天狗は鳥に似て木葉天狗と言つと書いてある。してみると、世間に伝うる怪談が暗示となつて、種々のな幻覚や錯覚を起した精神上の作用と、好事家の作り話も加わり伝えられた事と思われる。

天和の昔、沼田城主真田伊賀守信利が、沼須平を田にしようとして此山裾に設けられた用水路がある。ソレが大正元年沼田大間々線改修工事の際に穿掘げられて、今は定期の自動車を通ずるようになった。

榎の実の石段を落ちて転げ行く。

○ 榎の木 榎

大字尾合字安場の山林、時は明治十年頃の事である。鶴淵治良七と言へば旧高六十石宗家十右衛門と共に、神社にも寺院にも相当力を尽した旧家であつたが、今は衰えて日々の生活にも差支える程となつた。或る夜の事何処よりともなく一人の女神が材元に頭れ、夢の中に告げて言うには「是より乾の方に当り汝所有の山林中に夫婦の榎の木あり、吾は其中に棲める者なり、汝等我を祀らば福を授くべし」と、明朝起き出て、妻子に語れば不思議の事なりと、皆打ち連れて林の中を探し求

めけるに果して異様の榎の木があつた。

其形土より一足許り上りたる所にて二本の幹合さりて一本となり、恰も人の抱え合えるが如くにして其間を子供の潜り抜ける程輪になりたる所あり、されば茨草を刈り払い陰陽師を招きて祭の式を行けるに、我も我もと聞き伝え集り来れり、諸の願を掛くるに感応著しければ近郷より参詣する者日に数十人に及べり、然れば米は一家の食に足り錢は塩味噌を買つて余あり、裕ならずと雖も日々の生活に不自由なきに至れるは、治良七が日頃の正直を神の恵み賜いしならんと人々に語り合えりと言ふ。其後幾春秋を経て今は其跡する定かならず、只僅に植物崇拜に關する物語を残すのみ。

木の実さえ豊なりけり夫婦榎

○ 片品川の筆草

長閑な春の日を浴びて片品川の溪谷をフラ入り込んで來た絵師があつた。耶馬溪にも勝る風光明媚の地である一つ彩管を振つて仕上げようと努めた。漸く左を書くに右に霞が掛つて見えなくなる。右から書くに又左が隠れて仕まう。翌る日來て書き始めると又うまく行かない、次の日も思ふようなが出来ない。トウトウ彼は絵筆を投げ捨てて立ち去つてしまつた。其れに根が生えて筆草になつたと言つてゐる。

高山正之先生の北上日記にも片品川の筆草
と言うのが書いてある。

筆捨てて絵師もありとか春霞

○ 太郎三人様

大字生枝、徳川家康は方広寺の鐘に事寄せ
て慶長十九年大阪城を攻めた。沼田城主真田
伊豆守信之は父昌幸と意見を異にし徳川方に
加勢した。是が為、それぞれ領内に夫役の割
当があつたので村内一同を集めて幾日も評議
したが、扱て誰も好んで応ずる者はなく、結
局生枝の石高五十三石の半分を与えると言
う約束で、浪人者の太郎が行く事に成つた。翌
年春両軍の和議が整つて無論死だと思つた太
郎が戻つて来た。さあ村内は大騒ぎだ、村高
の半分を取られては皆が立ち行けない。一層
の事に、奴を殺すより外に策は無いと、其所
で名主寛右衛門の宅に偽つて慰勞の宴を催し
た。太郎も身に危険の迫るを覺つて逃れよう
としたが、遂に大勢の為に追いかけれ西原
に於て切り殺された。

早くもそれと知つた妻は幼児を臼に入れて
搗き殺し、自分も自害して果てたのである。

それから三年間と言ふものは此村だけが作物
が稔らず、名主や役人に成つた者えは頻りに
災難がつづいたので、之は太郎達三人の祟り
であろうと石の祠を建て、毎年三月十日に祀
る事にした。

○ 聖が坊

大字尾合、幾日となく降りつづく大雨に風
さえ加わつて片品川には濁流が渦巻き流れ、
水は日に増し勢を加え、遂には田を呑み畑を
浸して、果ては人家を押し流そうと迫つて来る
のである。人々が如何に立ち騒げばとて其甲
斐なく、崖は次第に崩れて行くばかりなの
で、村人達は只此の上とも万一の場合を慮つ
て昼夜怠らずに、逃げる用意と神仏の力にす
がる外なかつた。

是を見かねて多くの村人を救うべく、聖須
法印は身を此の淵に沈めて治水を祈り崖の崩
れを永久に保護しようと誓つた。其の誠の天
に通じてか、不思議にも流れは急に向を換え
て其假安全となつた。村人は其徳をたたえて
今に聖が坊と言つてゐる。禅定院の過去帳を
見ると、四世聖須法印寛平八年九月寂として
ある。それから千有余年崩れかかつた崖には
血に燃ゆる聖須法印の義心其ものの様に紅葉
が色彩つて、追憶の念を呼び起すのである。

○ 打伏の森

大字高平、時は正平二十三年（六〇〇年
前）の昔の事、足利勢の為戦破れて新田方の
大将二人、此所迄は落ち延びて来たが、兄は
遂に流矢に當つて馬より打伏に落ちて戦死を
した。之が打伏明神即ち新田義宗公である。

弟は片品村土出迄逃れ其処で終つた。之が山
妻在明神で実は従弟脇屋義治である。雪のチ
ラツク頃足跡隠しと言ひ、私言条と言うて其
日は小声で話すと言うて居る。

里人義宗公の祠を建てて打伏明神と称し、
馬にて此前を通行する時は必ず下りて礼拝す
る事として居る。雲谷寺境内に五輪の塔が在
り衣冠束帯した木像も在る。
尚附近には幾つかの砦跡もある。

堀幾つ崩れ残りて笹茂る

○ 古語父山の鬼女

天正の頃、沼田盆地には武田と北条との争
いが層々あり、北条勢が東入に乱入して在々
の民家を威し、妻子財宝を掠め作物を損した
から、住民は皆恐れて山へ逃げ籠つた。或る
日古語父山に煙の立ち登るを見て敵大勢が押
寄せて来た。此所は只女子供と老人ばかり
四、五十人なれば驚き悲しむを、立岩清岸院
の爰鳳が母のぶと言う者之を静めて、薪二束
を掲げて峠の上に立ち現れ、帯締め直し之に
腰打ちかけて待ち受けた。敵の駆け上がるを
見て、「我等如き賤き者三人、五人捕えたとて
酒代にも足り申さじ引返されよ」と言え、
「憎き女め先ず奴より引捕えよ」と勇みかか
るを、手頭を取つて打ち込む薪は矢鳴り谷に
響き、髪は乱れて風に逆立ち恰も夜叉の形相
なり、不思議の大力人間業とは思われず、真

先に進みし者を打ち倒し続いて二、三十本打つ内に、木の根に距き枝に刺され蜘蛛の子を散らすかの如く、見苦しき様にて逃げ去った。

草木は血に染り投げたる薪は深く地に突き刺さりて抜く事も出来ぬ。「ソレ古語父山には鬼女が居る」と、恐れて再び近寄る者もなく、為に一同恙なきを得たと言う。今も清岸院には、のぶ女の洗濯石と言うのがある。

○ 河 童

片品川の右岸尾合から多那へ通ずる板又橋の袖に、紺碧の水を堪えた観音淵と言うのがある。或る日の事近所に住む彦翁さんと言うのが其上の林で薪伐をやつて居た。一汗かいてヤレヤレと昼前の一休み切株に腰を下して先づ一服と煙草に火を移した。散り行く紅葉に俳句の一つもと跳めて居ると、何時の間にか大きな蜘蛛が一つ現れて、手と言わず足と言わず絡み付けてある。妙な奴だと思つて居る中に煙草の煙に巻れた故か姿を隠して仕まつた。ドレモー一仕事と、手足に絡んだ糸を測の切株に巻きつけて仕事に掛ろうとすると、ソレがだんだん太く成つて来其時である、下の河原で「ヨイショ」と大声を出したかと思つと、其切株が根抜きになつて下の淵へ引込んだのである。扱は河童の奴め蜘蛛に化けて己を引込もうとしたな、笑止笑止と崖から覗き込むと、淵に落ち込んだ切株の浪に

喰つて磯に打ち上げられチョコンと岸に座つている河童小僧の皿頭が見えたと言う。ソレカラは誰も彼も油断して河童に尻を抜かれるなど、近寄る者は無くなつたと言う事である。河童は四、五歳位の童子に似て面は青白く、鼻尖り背に亀甲あり足には蹠があつて、頭上に皿の凹があり常に水中に棲み時には陸に上がる事もある。小児の遊泳中に溺れるは之に捕り殺されると言つて居たが、是も想像上の怪物だとしてある。

○ 野地穴の狐

大字上古語父、笄山の麓に沼田横堂二十四番の札所が在る。金井与惣左衛門が建立と伝え千手観音が祀つてある。

古語父山月も影さず池の入、深き誓に我もらすなよ、堂の側に穴が在つて年経た狐が棲んで居るが、少しも悪戯をしないで大層皆が可愛がつて居た。或る日の事、源平爺さんが通り掛つて見ると、子狐が穴の端へ出たり這入つたりして居るので、之はお産があつたのかヤレヤレお目出度い事だと、爺さん自分の事のように喜んで家へ帰ると婆さんと相談して、赤飯を炊き油揚げやお豆腐を買つて行つて御馳走した。

二、三日経ての夕方山からの帰り途、何時の間に来たか立派な一構が在る。爺さんが見とれて見ると、戸が開いて出て来た女房が

「私達今度近所へ参りました者、又何かとお世話になるばかりです、ドーカ一寸御立寄下さい」と無理やり家へ引き入れて「何も御馳走はありませんが、お上が下さい」と酒が出る、肴が運ばれるという応待ぶり。フト何を気付いたか「お爺さん済みませんが一寸用事を思い出したので其所まで行つてまいります。速くに戻つて来ますから留守をお願い致します」と出掛けようとして「只奥の座敷だけは見ないで下さい」と念を押して行きました。サー見るなど言われると見たいのが人情だ。外に誰が居るではなし、一つ見てやろうと、襖をソツと細目に開けて覗くと娘が一人針仕事をして居る。知つて知らぬか此方を向いての笑顔、それが又顔るの別嬪である。漸くして爺さん元の座敷へ戻り知らぬ顔の半兵衛をきめ込んで居ると、間もなく女房が帰つ来た。

「すみませんでした、サーお酌致しまして」と幾度か盃を重ねた後に「お爺さんあれ程妾が注意して置いたのに覗きましたね」。何を隠しましょう。彼は此家の跡取娘です。婿を探して居るのですが未だに見付かりませんので困つて居るのです。見られた上は仕方がない。どうでも婿に成つて下さいと強硬な談判。「決して覗きはせぬ、知らぬ、存ぜぬ」と言うても承知しない。結局假よと、大胆にも婿入する事に極めた。スルト忽ち何処から

ともなく大勢集まって来て、入浴させる髪を結わせる、竜紋の上下を付けて鏡に向つて見ると、成程馬子にも衣裳とやら自分ながらも見違える程若々しくなつた。娘も衣紋を整えて座敷に着く。飲めや唄えの大騒ぎだ、高砂、四海波の謡も済んで、愈々取結びの玉の井が謡われる事になつた。

一方家では爺さんの帰りが遅く夜が更けても戻らないから心配した。婆さんが提灯を点けてだんだん来てみると、爺さん狐に化かされたのか、畑中に行儀よく座つて居る「爺さん何うしたのだい」と声かけると、驚いて「助けて呉れ」と逃げ出した。婆さん一生懸命追いつて、背中をウント打つてやると、やっと正氣に戻つた。見れば、昼の仕事着のまま元の白髪交りの爺さんに成つてしまつた。「あの時は面白かつた、楽しかつた、まるで夢のようだった」と爺さん鼻水を垂しながら、後になつての話。ソレカラ誰言うとなく、野地穴の浦島狐と言つて評判になつた。狐が恩返しに爺さんを喜ばしたという話。

○ 金屋の長者

大字岩室、大崎の平へ何処から来たか、鍛冶を業とする者がやつて来た。小屋を建てて毎日砂鉄や鉱石を求めてたたらにかけ、鉄を求めては農具を練える事を仕事として居た。それが何時の間にか金や銀の鉱石を掘り当て

て沢山の富を貯え、都へ上つて長者の免許を得た。

長者免許の事 昔就天氣令旨依執達仍手如

件 庚平三年正月 左小弁教通 右

小弁師家 毛野国 金屋長者へ

サーこうなると昔の事は何時か忘れて、酒池肉林と榮華の日々がつづいた。今年の春も京都へと上がつた跡の事、山火事が起り折からの風が加わつて、アレヨアレヨと言う間に燃え広がつて、流石の邸宅も瞬く間に焼け尽してしまつた。

跡へ歸つて来た長者は「我過てり僅かの財宝に心奢りて己れの務を怠りた己れは神の咎を受けたのだ」と悟り、朝日さし夕日輝く十九折岩黄金千枚後の世の為、と言ひ遣し、又元の野鍛冶と成つて立ち去つたが其戻つては来なかつた。其後幾星霜何処に金が埋めてあるだろうと、探し廻つた人々もあつたが未だに見付からず、只噂のみが残つて居る。只天和元年真田伊賀守が改易となつた同二年、代官所竹村惣左衛門熊沢武兵衛支配となり、二月加沢平次左衛門が調べた沼田領品々覚書には、岩室大崎山は銀山、先年は盛なりし様伝承等が、伊賀守領地の内は後に出申さす候、と記してある。

○ 六算の神

昔、唐天竺から我日本へ渡つて来たと言

う。所謂三国伝来の金毛九尾の狐は、鳥羽帝の御代に女官と化け、玉藻の前と名乗つて宮中に在りしを、安部泰親の為に調伏せられ遂に下野国那須が原に追い詰められて、殺生石と成つたのを玄能和尚に打ち砕かれ、其破片が関東地方に飛び散り六算の神となつて世人を悩ますのだと伝えられ、

五七か肩に二六腰四腹八股一三か足、九を頭として、年令九より多き時は其数を除きて残りたる数により計算して、六算除を行うのである。

○ 小豆研ぎ

村の端に在る水車小屋の附近、虫の啼く声も止み木の葉も落ち尽し、モウ粉雪のちらつく頃になると「ザックザック」と小豆を研ぐような音がする。又小豆ときが出たと言うので通る人も少なくなる。

「小豆研うか人取つて喰うかザックザック」と、村の子供達が唄うようになったが之は専ら馳の仕業だと言の評判である。

○ 火柱

狐火に似たようなもので火柱と言うのがある。何処とはなく突然燃え上がつて漸くすると音もなく横に倒れてしまふ。すると、其方向に當つて二、三日中に火災が起る等と言われているが、之も馳の仕業だと言うのであ

る。

○ 人 魂

昔から一般に、死ぬと地獄か極楽へ行くのだと靈魂不滅が信じられていた。よく人が死ぬ二、三日先に魂が抜け出して、夜中に其家の屋根からフラフラと光を放して迷い出すのを見た人があり、又二つ並んで通った事もあつた。人魂の他にも凄惨な光を放ち尾を引いて、空飛ぶ円盤の様なものを見る事もあると言ふ。又人が死ぬと、魂がお寺へ行くとも言つて居る。本堂の戸や障子に突き当たつた様な凄惨な響がしたり、女の死んだ時には勝手元へ来て音がすると言ふ。

寺男に聞くと、今でも人が死ぬと速く何か死らせがあり、稀には死んだ人の姿を見た事もあつたと言つて居る。

メーテルリンクの「未知の賓客」に論ずるように、未だ学術上満足な説明は出来ないが、靈感に依る不思議な事実は、今後の精神学界の研究に待つべきなのである。

○ 雨乞と天気祭

昔は七、八月頃になり早天が続くと、何処の村でも雨乞と言ふのをやつた。此所でも上郷の高平、上古語父、下古語父は雨乞山に、生枝は想台山に上つて、薪木を集めて千駄焼をなし、下郷の岩室、尾合平出では神社に集

まり、神官又は僧侶或は山伏を招き八大竜王の旗を建て等して、榛名山や赤城山へ使者を立てて、竹筒え湖水を汲み来りて祭場に撒布し、若衆達は川端で水を浴びて雨を祈るのである。水を貰いに行つた者が途中で休むと、其処で雨が降つて仕舞と言ふので、途中へ又迎いが出て居て休みなしに運ばれて来る事になつて居る。

又永く雨降がつづく時には、助太刀と言つて杉の葉を以つて人形を作り、小皿で目を作り天を殴んで立たせ置き、反対に天気祭と言ふ祈禱を行うのである。

今ではモー廢れてやつて居る処もなく、只老人の語り草にのこるのみである。

○ 狐 憑

狐につかれたと言ふ人は布団を被つて食物したりして、之は病人が食うては無く皆狐が食うのであつて、俗には其人の腸迄も食い尽す等と言つて恐れたものだ。ソレデ坊さんを頼んで護摩を焚くとか、神官に引目の法を行つて貰うとか、皆で掛つて病人を縛つて置き、硫黄や唐辛子を燻してやると、狐が放れて正気になると言つて居る。又狐は女や友達に化けて一夜中野原を引き廻されたとか、提灯の蠟燭を吸い取られたとか、又狐を荷めた仇討に赤子を掻き殺されたとか、妒に入れて焼き殺されたと言ふ話もある。

学者は狐憑は精神病だと決めて居り、化されて迷い歩つたと言ふのも詳しく言ふと、誰が体にも持つ組織上から来る一つの癖だと解いて居る。従つて真直に歩く心算でも幾分づつか右とか左に片寄るものである。試に目隠をして歩行させて見ると、何時か円く元の位置へ戻つて来るものである。夜中に広い野原を迷い歩くのも同じ理屈だと言ふ。而し東村の藪原では女に化けて来た狐に一晚中野原を引き廻され、朝に成つて小川を渡ろうとする時に狐の姿が水に映つたのを見て、之を捕えて帰つたと言ふ実例もあるので、一概にそうばかりとも決められない。

○ 火の玉

夕立雷鳴の時よく現われる火の玉と言ふのは、球電光と言ふので人魂と言つて居るのも同じだらうとも言ふ。諸所外国等の例を拾つて見ると、巨大の火の玉が現われ、頭の上一丈程の高さを通つて、側の木に当り皮を剥り附近の家へ飛び込み大分焦したとか。火の玉が落ると一処に道路で幾つかの玉となつて横道へ入つて消えたとか、台所の窓から提灯程の金色した玉が転げ込み、戸が締つて居るので突き当たると、五尺も昇つて其割目から外へ出て鉄砲を連発した様な音がして消えた。又濡で少女が鷺鳥を追い込もうとして居ると、三尺程離れた処へ突然火の玉が現われ、足に

突き当たったかと思うと、着物の裾から這入って襟へ抜け、空中へ飛び去り少女も一時気絶したが、直ぐ意識を恢復したが体を調べてみると、膝の下から胸の中央にかけて掻き跡が付いて居り、其両側に黒い線がうねてあったとの事だ。

落雷したと思うと、火の玉が煙突から室内へ転げ出し、三、四人話して居た中央を転り側の木製機具に突き当り毀して、次の室へ入って消えた。跡に硫黄のような臭が残った。中庭に火の玉が三つ現われたが、二つは静かに地面の上に運動し、一つは鉄棒に当って跳ね返されると、二、三回転がって方向を変え廊下に入り、階段を下りて戸の間に入り錠前を毀して大穴を明け、往来へ出て二つに裂れて消えた。又庭から屋根裏へ昇り、火を付けて非常な音を発して消えた。

蒼い火の玉もあって、足下へ来た時には、頭をくるりと曲げた小猿のようで人に戯れるように見えたとも言つて居る。

○一本松

大字上古語父、塩原太助が志を立て江戸に向わんとして、愛馬の青と泣き別れた一本松は、昔八百比丘尼が植えたもので、地上より真直に二丈ばかり枝は東に伸びて恰も結びたるが如くにして穴あり、甲州勢が此所に鐘を掛けたりとて鐘掛の松とも言ふ。後年落雷あ

りて其松枯れ今立ちて居るは二代目の松なり。此辺一帶滝棚(田北)の原と称し、三里が間に坂なく橋なく馬駈として天下に誇る所である。沼田の地なるや四面山を以て囲まれ、加うるに利根、片品の二川を廻らし、南僅に十八坂の剣を以て通するのみなるが故に、大軍を以て攻むるも食糧統かず、一夫之を守れば万夫も越ゆる能わず、沼田難攻不落の名城たる所謂なり。従つて米、塩は之を越後に仰ぎて東入に送り、代るに大豆を以てしたのである。

○法螺吹爺さん

まだ明治以前薩を馬に荷せて赤城の原を越えては前橋へ行く頃の事である。定七と言う爺さんが在った。江戸へ中間奉公に行った若い頃の話である。極上等の扇子を買つて戻つた、「最も価も高いには高かった、何しろ一分(今の二十五銭)と言うのだが効能もあつたよ。ソレハ夏の土用最中茶碗に水を汲んで此扇であおげば氷つけむし」と得意になつて咄す。

又或る年、馬丁を雇つて奥州へ馬買いに行つて戻り「宇都宮迄来て宿つた晩の事だ、夜が明けて見たら七手繩(一手繩は十二頭)引逃されて、此時は男ながら涙が溢れたよ」。宇後根に大蛇が居たと言う羅ぎに、ソレと鉄砲を憺いで行つて見ると、「居た居た、雷

の様な軒を立てて眠っている。之れ幸とソツト近寄つて覗いて見ると、胴の周囲が三升樽程もある奴だ。鉄砲を逆手に台尻で頭を目掛けて打ち込むと、クルクとトグロを巻いて鎌首を上げ、口を開いてペロペロと舌を出して飛び掛つて来そうな勢に胆を潰して、夢中で逃げ帰つた其時の恐しさ、今も身の毛がよだつようだった」と、何時もこんな凶無の大法螺を吹くのを得意にして居るが、別に罪のない話なので皆喜んで聞いて居たと言う事である。

○亡び行く童謡を追うて

日に日に新しい童謡が沢山作られるにつれて、日に日に亡び行く童謡を追うて、一応調べて置くのも万更無駄でもあるまいと、茲におぼるげな記憶を辿りつつも、幾度か人にも諮つて成つたのが此稿である。

「天智天皇秋の田の……」と、お祖母さんに子守られた事を考えると、又懐しくたまらないものである。(昭和六年十一月)

一、子守唄

坊やはよい子だねねねしろ
ねんねのお子守りゃ
何処へ行つた
あの山越えて里に行つた
里の土産に何もろた
でんでん太鼓に笙の笛

起き上がり小坊子に犬張子

(一に香箱 二につづみ)

ねんねんころりん

ねんねしろ

二、子守唄

ねんねん子守はつらいもの

人には楽だと思われて

雨風吹く時や宿がない

人の軒場で目を暮し

ねんねんねろやい

眠れやい

三、お月さん

ののさん幾つ

十三七つ

未だ年や若い

若子を生んで

だあれに抱かしよ

お方に抱かしよ

お方に何処へ行つた

油買茶買

油屋の前で

滑って転んで

油一升こぼして

お母さんに叱られた

四、大寒小寒

大寒小寒

小僧が山から泣いて来た

五、野火

野火がついた、火がついた

あつたら猪が焼け死んだ

六、兎

兎、うさぎ

何見てはねる

十五夜お月さま

見てはねる

七、鳥

鳥からず、とんからず

汝が家が焼けるぞ

早く行つて水掛ける

水が無ければ溜かける

後の鳥が先になれ

先の鳥が後になれ

八、鳶

鳶とんび、羽落せ

九、燕

越後じゃ米食う

此方来ちゃあ泥食う

ちいちこ、ちいちこ

ちいちこちい

一〇、雉子

きじはけんけん

山鳥やばっさばっさ

一一、鶏

とてこっこう 夜があけた

一二、螢

ほほ、螢来い、かんねんこい

かんねんかんねん、水呉りよ

彼方の水は苦いぞ

此方の水は甘いぞ

一三、蜻蛉

とんぼ とんぼ

そこらに止まれ

明日の中に

飴買って呉れる

一四、蝸牛

つのでいろ

角を出さぬとお棚え上げて

首べったり打切るぞ

一五、山いも

坊主ぼっくり山芋

山の中昼寝して

蜂に尻刺された

一六、桃

ゆっさこっさこ 桃の木

桃がなつたら呉れるぞ

一七、お正月

お正月はよいもんだ

おんぼろひいてもよいもんだ

油のような酒呑んで

雪のような飯食って

木片のような魚せて

一八、七草

七草なづな

唐土の鳥の

日本の国へ
渡らぬ内に

ひっぱたけ ひっぱたけ

一九、十日夜

十日夜 十日夜

朝蕎麦切に昼団子

夕飯食っちゃあ

打ばたけ

二〇、れんげ

開いた開いた

何の花が開いた

蓮華の花が開いた

開いたと思つたら

つうぼんだ、つうぼんだ、

何の花がつぼんだ

れんげの花がつぼんだ

二一、かあごめ

かあごめかあごめ

籠の中の鳥は

夜明けに出しようか

昼げに出しようか

つうんつうんとつんむぐれ

二二、いつちこたつちこ

いつちこ、たつちこ高崎の

黄色い帽子の兵隊に

西郷が追われて

とことごと

二三、鬼ごっこ

鬼の来るまで洗濯でも
としょとしょ

二四、隣のおばさん

隣のおばさん

お茶呑みおいで

あとでくるのはごめんだよ

二五、酸漿

ねんねん、ほうづき

根は先出ろ

種子は後で出ろ

二六、どんどん廻り

どんどんめぐり、こめぐり

目がまわつてもころぶな

二七、ちゃんぼこ茶釜

ちゃんぼこ茶釜が煮立った

二八、あんよが上手

あんよが上手

お転びがお上手

二九、じいさんばあさん

爺さん、婆さん聞いとくれ

あかねのふんどし買つと呉れ

三〇、上り目、下り目

上り目 下り目

くるりと廻つて猫の目

三一、草履投

あしたあ雨が天気か

三二、雪

越後のお婆が降つて来た

三三、指切
指切りかまきり
嘘をついたら

百円五厘の罰金だ

三四、泣虫

いま泣いた鳥が

墓場の団子食つて

はあだまつた

三五、人まね

人まねこまね

酒屋の狐

酒の粕呉れて

追ん出せ追ん出せ

三六、草履隠

おらがお母さん

しわんぼしわんぼ

じんじょ買つてお呉れ

近よつ近よつた

遠寄つた遠寄つた

三七、羽子突

一と子に二た子

見抜や嫁子

何時来て見ても

七々子の帯を

やの字にめて

おしゃれことんよ

三八、寄合つて

赤と白と寄合つて

寄合の前で屁たれた
幾つひった、十ひった
峠の山ひり越した

三九、桃 栗

桃栗三年 柿八年

梨の馬鹿奴一十三年

四〇、河原ちご

河原のお婆さん

びんたぼ出しやれ

四一、あばよ、こぼよ

あばよ、こぼよ

蛙が啼くから又遊ぼう

四二、豆 煎り

男と女と豆煎り

煎ってもいっても、生臭い

四三、お寺の縄ない

お寺の縄ない

チヨリチヨリチヨリ

一尋、二たひろ

三ひろなったらお茶にしよ

四四、牛ねんぼう

牛ねんぼう、かんねんぼう

車引いちやがあらがら

四五、あかんべい

あかんべいが十六文

皿が三十二文だ

×
あかちやがべろりん

四六、てっこはっこ

てっこはっこ居たか

隣へお茶呑み行つたか

四七、土遊び

ほうとのかな

ほうとのかな

ほい

四八、福 徳

徳、福、貧乏、金持

四九、三めの子

一人、二人、三めの子

よって眠れ、雉子の糞搔棒

五〇、蜜柑 金柑

蜜柑 金柑 酒のかん

親がせつかん

子が聞かん

橋の欄干

屋根葺かん

五一、やんめ

やんめやんめ糞やんめ

雪隠箒で掃き出すぞ

五二、がらがらもんじゃ

がらがらもんじゃ、何文じゃ

三文じゃ未だ解らぬか

解らぬよ

足音止んだらおめつけよ

五三、あついや

あついや

あつけりや後へしやれ

後には、はらがある

はらがあつたら、かんのける

かんのけ棒持つて来い

持つて来にや、餅つけ

猫の尻ひっかじれ

五四、きつこんばつたん

きつこんばつたん水車

内の坊やがしやつがしやつ

五五、こうもりこい

こうもりこい、こうもりこい

草履をやるからはいて来い

五六、八釜と四釜

八釜と四釜で十二釜

五七、梅 干

梅干食うとも種子食うな

中に天神寝て御座る

五八、よいよい横浜

よいよい横浜まるやけで

東京じゃお女郎が

車挽く車挽く

五九、いいとこ

いいとこ床場の縁の下

六〇、ねんねこ坊ちゃん

ねんねこ坊ちゃん

亀の子坊ちゃん

六一、泣 虫

泣虫、毛虫

縁の下のゲジゲジ虫

六二、道 陸 神

道陸神の馬鹿がいて
一枚紙欲しがって
しびで尻のごった

六三、鳩

ててっぽっぽう

ごっこくいてい

ととせいて

六四、摺 白

すうるすこめで

一升五合挽き出した

六五、小豆とぎ

小豆とごうか

人として食おうか

サツク サツク

六六、ふくろう

ほろすけ ほうほう

六七、知らん看板

知らん看板

練った膏葉

六八、嫁 御

嫁御、此方向け

よい物呉れる

蜜柑むいて

中味を呉れる

六九、春 蘭

爺婆寝て居る

嫁は起きて茶沸せ

七〇、らっきょう

らっきょうらっきょう

生らっきょう

むいてもむいても皮ばかり

七一、尻 捲

今日の十六日に

尻捲じんが始まった

七十二、馬鹿野郎

馬鹿野郎、こけ野郎、年期野郎

そんな事で年期は勤まるか

おらんざ三年勤めたぞ

七三、ちいりこさい

ちいりこさいよ

あいこさいよ

七四、お借もの

お借もの、何んなどの

こんなもの

七五、寺

なんたら生枝の観音寺

おっかな尾合の禅定院

久屋しい急坊町田坊

岩室一番一音寺

高平田中の雲谷寺

平出平間の正眼寺

七六、ねんねん

ねんねん猫の尻へ

蟹が這い込んだ

お母さんがたまげて

お茶こぼした

七七、盆の牡丹餅

盆の牡丹餅ちゃ

甘いか酸いか

七八、夕焼小焼

夕焼小焼

明日は天気になあれ

七九、盆 踊

盆の十六日に踊らぬ奴は

子でも出来たか

シオサンでも仕たか

八〇、ゴンベゴンベ

ゴンベゴンベ赤くなれ

酒呑んで赤くなれ

八一、何たらぼうし

何だらぼうしの毛のふぐり

八二、痛い や

痛けりや颯の糞三文買って

三年つけろ

八三、トーケン

誰かさんの頭へ

トーケンがたかった

ソレ落すと坊主に成る

八四、てっちゃん

てっちゃん手が悪い

足がない

達磨の形によく似たり

八五、多那村たんぼ

多那村十三軒

流れちゃ困る

田圃の土手では

イチゴが交んで

片足もがれて

大騒ぎ

八六、うんだら

膿だらっつ切れ

やんだら医者に掛かれ

あとがき

白沢村民俗関係資料として、白沢村尾合在住の郷土史研究家鶴淵伊勢松氏の調査報告の中から伝説、わらべうたを主にその一部を掲載した。鶴淵氏は、白沢村誌をはじめ、わが赤城根村、沼田町史などに関与し、意欲的な郷土の研究を長年にわたり続けている。

アワ(あわ・粟) 三、四、六、六、七、七、六、
 淡島様 三、三、三、
 アワセ(あわせ) 六、七、
 アワセメンパ 六、
 アワボヒエボ(粟穂稗穂) 五、五、
 粟飯壇中 六、
 粟飯種 六、
 ア産守カ 三、
 安産守護 三、
 あんどん(行灯) 三、
 アンネー 三、
 アンペラ 九、
 家氏神 三、
 家及び屋敷にいる神 三、
 家の神印 七、
 家の紋章 五、
 家の紋章 五、
 伊賀禰 三、
 育兒 三、
 用具 三、
 イザリバタ(いざりばた) 三、三、三、
 石臼 三、三、
 インダタミ(いしだたみ) 五、三、
 石蔵 三、
 石宮 三、

イジメ 三、三、三、
 石屋 三、
 イズメ 三、
 出雲 三、
 伊勢音頭 三、
 伊勢講 三、
 伊勢神宮 三、
 伊勢参宮 三、
 伊勢まいり(参り) 三、
 板の間 三、
 イタリヤサン 三、
 イタワリ職人 三、
 一音寺 三、
 市が酒買っちゃった 三、
 一月二日 三、
 イチゲン 三、
 イチゲン(二見)座敷 三、
 イチゴガサ 三、
 一代 三、
 一 三、
 一日十里づめ 三、
 一人前 三、
 一の仕事 三、
 一のよめ 三、
 一ノセ 三、

一宮 三、
 一ぼう 三、
 一文銭 三、
 一夜飾り 三、
 一夜松 三、
 イチヨウガエン(いちようがえし) 三、
 イチヨウゲイン 三、
 一升もち 三、
 一升もち 三、
 一升もち 三、
 一升もち 三、
 イッセイキ(一周忌) 三、
 イツチヨウメイ 三、
 イツチヨライ 三、
 イツツオメシ 三、
 五つ坊主 三、
 一本づきあい 三、
 五間取型の民家 三、
 イヅミ 三、
 イヅメ 三、
 移転 三、
 井戸 三、
 井かえし 三、
 糸かえし 三、
 井戸神 三、
 糸と 三、
 糸作り 三、
 稲妻 三、
 稲荷 三、

イナリ様(いなり様、稲荷様) 三、
 イナリサン 三、
 イナリ神社(稲荷神社) 三、
 稲荷の神幣 三、
 イナリ祭(稲荷まつり、稲荷祭り) 三、
 稲 三、
 稲かり(稲刈) 三、
 稲のほし方 三、
 犬 三、
 イヌの日(犬の日、戌の日) 三、
 「犬」という字 三、
 位はい(位牌) 三、
 位牌持ち 三、
 位はい分け 三、
 衣服 三、
 俗信 三、
 いぶし飼い 三、
 イブシゲエコ 三、
 イヘズラ 三、
 イボ(いぼ) 三、
 イボツキ 三、
 忌 三、
 イモガラ(いもがら) 三、
 イモゴマ 三、
 イモのズイ 三、

演芸会	六	大道具	二四	奥の座敷	二〇	オサンヤサマ	六
役の小角	三	大名主	一六、一七	尾内に祀る神	三三	お三夜参り	三元
エンマ様	一	大なべ	一六	オクネゴ刈	元	オシイ	一六
縁結びの神様	四	オオマクレ	一六	お蔵米	六	オジイサン	七
お		大みそか(大晦日)	一五、一六、一七	送り正月	一五	オジイサン	七
尾合柿	三、七、一、四	大麦ごなし	三、三、元	送り正月	一五、一六	押し板	一五、一六
尾合の कोरो柿	七	オオヨリ	元	おけ屋(桶屋)	一七、一八	お七夜	一五、一六
尾合の禪宗寺	三三	オオケイシユ	一四	オコジヨ	一、一八	オシツコト	一四
尾合の干柿	一	オオワケイシユ	六	お高祖	七	オシツコト	一四
尾合のまんじゅう投げ	一	おかいこのまつり	六	オコソ頭巾	七	オシツコト	一四
尾合のヤアヤアドリ祭	一〇三、一三	お飾り	一七	お事じまい	一四	オシツコトウス(おしつことうす)	一五、一六、一七
オハチハサマ	一五	オカシラツキ	一六、一七	お事始め	一八	おしめ(オムツ)	一六
お稲荷様	二六、一四、一五	おかす	元、九、三	お事八日	一八	おしめ(おかざり)	一五、一六、一七
オイナリさん	元	お勝手仕事	三、五、六	お籠り堂	八	オシメカゴ	一五、一六、一七
オイハイ	二	オカマガニル	四、一	おこもり	八	オシメ飾り	一四
お位牌代	一	オカマゲーロ	一〇	おこわめし	八	おしめカパー	一四
奥州	一	岡本文太夫	一〇	オコサイセ	八	オシメナイ	一四
大鋸(オオガ)	三	おかゆ	二、三	オサイセン	八	お釈迦様	一四
大節	三三	オガラ	一六、一七	オササキ	一六	お正月	一四
大がま	一六、一四	オカリ屋(御飯屋)	二、三	おさげ	一六	おしょうばん(お相伴)	一四
大かんじょう	七	オガシシヨ	一六、一七	オササキ	一六	オシラ	一四
大グクリ	七	—パタシ	一六、一七	オサラツコ	一四	オシラサマ	一四
オオグミ(大組)	三、五、一、四	オカンノンサマ(お観音様)	一六、一七	お産の神様	一四	「おしらさまおしら様」	一四
王様落し	三	お祇園	一六、一七	お産の方法	一四	オシラ信仰	一四
大ジメ	一八	置戸棚	一六、一七	お産の部屋	一四	オシラビマチ	一四
大正月	一五、一六、一七	オキノデイ(デー)	一六、一七	お産の仏様	一四	(おしらびま)ち、おし	一四
大掃除	一八	置き針	一六、一七	お産の別れ念仏	一四	ら日待)	一四
太田の香籠さま	一〇〇	お給仕	一六、一七	お産見舞	一四	オシ	一四
オオデ	一〇〇		一六、一七	お三夜	一四	オスワ様(お諏訪様)	一四

お諏訪様の氏子 一五
 お諏訪さん 一〇四
 オセ イ 一六
 お歳暮 一五、一五、一五
 お節供(句) 一五、一五
 オソウゼンさま 一五
 オソーデンさま 一五
 お供え餅 一五
 お大師さまのお祭り 一六
 オタキアゲ 一七
 オ棚オロシ(お棚おろし) 一三
 お棚さがし 一五
 おたふくかぜ 一六
 おたぼこぼし 一四
 オタラシヤキ 一六
 オタルイレ 一五
 オタルピラ 一三
 小田原ちようちん(提灯) 一三、一三
 お誕生 一〇
 おちご 一四
 お茶 一三
 お茶っば 一三
 オチャボウズ 一三
 お茶湯 一五
 オチューゲン(お仲間) 一七、一三、一三
 雄蝶、雌蝶 一三
 オチョンマ 一四
 オチンコのはれた時 一三
 お月様 一六
 オツケ 一六

オツチャン 一七
 オデアレヨ 一七
 オデンゲー 一八
 オデシコ 一八
 お手玉 一三、一三
 オテノコボ 一六
 オテンマ 一四
 お寺参り 一五、一六
 おてんぐさんの面 一六
 御灯明 一六
 オトキ 一四
 男アルキリ出る 一七
 男の子の遊び 一三
 男の節供 一三、一六
 男びな 一六
 オトツチャン 一七
 オトメ 一四、一六
 鬼 一六、一六、一六
 オニウチ木 一六
 鬼子 一六
 オニノコブシ 一八
 鬼除け 一八
 お念仏 一四
 小野組(イツケ) 一三
 小野家のウジ神 一七
 小野氏 一六、一五
 小野マケ 一六
 オバアア 一七
 オバアサン 一七
 お墓参り 一五、一六

おはぎ 一三
 お歯黒 一四
 おはぐろつぼ 一四
 オバサン 一七
 おはじき 一三
 おび(帯) 一五、一五
 オヒガミサマ 一五、一六、一六
 オヒガミマイリ 一六
 オヒガミメーリ 一六
 お彼岸 一五
 オヒナ 一七
 オヒツ 一六
 お雛様 一六
 お百度 一六
 —まいり(参り) 一六、一三
 オビヤッコ(お白狐) 一六、一七
 お富士様 一〇、一三
 お 一六
 おふるまい 一六
 お便所の神さま 一六
 オボ毛 一六
 オボタ 一六
 オボの神 一三
 オボヤキ 一〇
 オボヤケ 一〇、一三
 オボンデン 一三
 オボンヤケ 一三
 盆 一三
 盆迎え 一三、一六

オマエダマ(おまえだま) 一七、一六
 お松ぐい 一八
 お松迎え 一八、一八、一八
 オマル 一五
 オミゴク 一八、一八、一八
 オミタマ様 一五、一六
 お宮参り 一六、一六、一六
 オムツ(おむつ) 一三、一八
 おモツツイ 一五、一六
 表 一五、一六、一五
 オモテ仲人 一五
 おもて紋(表紋) 一五、一七、一六
 オヤキ(おやき) 一三、一四
 親子固めの盃 一三
 オヤジサン 一七
 お夜食 一三
 親の死目 一五
 オヤバラ七日 一五
 オヤブン 一三
 オンガ 一三
 女 一三
 女衆 一三
 —の小づかい 一三
 —の年始 一五
 女と馬の年取り 一五
 女のイチゲン 一四
 女の神様 一六

女の遊び	一三
女の仕事	一〇、四二
女の年取り	一五
オンベロ	一五
オンマ	四
カアチャン	七
怪異	一七
怪異妖怪	一〇
會計	六
かいこ(蚕)	七、七、三〇
カ	八
神	一五、一六、一六、一五
神様(かいこ神さま)	一、七、五
の神(神さま)	七、八
の飼育法	三
の仕事	四
の上族	六
のたね	三
のたね屋	三
の病氣	一
の祭り	一
ぶるい	四
マキ	五
祭	一五
かいこやすみ(蚕休み)	七
かいこ和讃	二、三
開懸	五
会葬者	一五
懐中鏡	一七

回転まぶし	三
カイネズ	三
回覧板	六
改良マブシ(まぶし)	三
カエリドキ	一四
カエル	一〇
カカア	七
かかあ天下	一〇
かにカラッ風	六
カカ	七
かかし	三
鏡	三
餅	一五
カガメ	四
カカリゴ	七
カカリット	七
カキ	五
柿	一六、四
カギ竹(かぎ竹、鍵竹)	三、四、九、一〇、三三、三四
カギトリ	一三
カキの首	一七
カキの首	一七
餓鬼の首	一六
ガキの首も許される日	一六
柿の種	一六
柿のとり方	四
柿もぎ	四
カキレガイ	一六
角刈	四
各種団体	六、六

角会袖	一〇
学友会	七、六
神楽	七、七
カケ衣裳	六
かけおち	一五
掛軸	三
陰ゼン	六
かげぼし	六
かご(駕籠)	三
カゴツパタキ	三
カゴメ	三
籠屋	一
籠類	元
カサ(笠)	九、三六
火災除けの呪い	一五
傘踊り	一六
重ね餅	一五
かざりかえ	一六
かざりもの	一六
餅り松	一五
餅ざりもの	一五
かざりもの	一五
火事	三
カジカッカリ	一〇
カジ	一〇
カジの夢	一〇
火事見舞	三、五、五
鍛冶屋	三、三、一五
迦葉山	一六、一六、一六
カシヨウ山参り(迦葉山参り)	一六、一六

柏餅	一八
カズノモチ	三
カスミ網	一五
かぜ(風邪)	一五、五、九
風の神	一五、七
風まつり(風祭)	一〇
風除け	三
風穴蚕種	三
火葬	一五
数え唄	七
家族関係用語	七
家族間の民俗	七
家族生活	七
家族の私財	七
かたあげ(肩上げ)	三、六
肩掛繩	一五
カタケニタベル	一五
かたびら	一五
語り物	一三
家蓄	一三
かつこう	一三
学校林	一三
合切袋	一三
勝坂峠	一三
勝坂トンネル	一三
カツチキ	一三
かつちに繩	一三
カツチン繩	一三
勝手	一三

客目録	客室	鬼門除け	着物を裏がえして干す	キミ	木鉢	木箱の車	木ノ葉籠	きのこ	キノ	キノ	狐にばかされた話	狐塚	キツネ(狐)	忌中念仏	北向地藏	北向地藏	義太夫	奇人	キジリ	鬼子母神	忌日	キジ	兆	キキンの年	ききんのときの食べもの	木伐り天狗	祇園の翌日	祇園の祭	
二六	一六	六	二	四、四	三四	三三	元	六	元	三	一八	一〇	一〇、一八、二七	一四	九	九	一〇四、一〇六	六、七三	二〇、二四	三三	三三	三三	四	一〇二	一六	一六	一〇二	七五	六

切り傷	切落し	切上げ型屋根	キヨメ	漁法	巨人伝説	漁業	共有山林	共有山	共有財産	キョウバアジ	郷土芸能	共同墓地	共同葬具	凶作時	行商人	共済評価員	協議員	キョウカタビタラ(絡帷子)	をつくらない家	の初もの	馬	キューリ	九蔵の狂歌	救荒食物	旧家	キヤラプキ	きやはん
一〇五、一〇七	三	二四	四	一五	二五	四	六、三三、七三	七	三、三九、七〇	四	一〇三	一六	三三	三	六	六	三、五、二	三、五、二	元	七五	七三	元、七、九	七四	六	六、五五	一五	一四

区総会	クセ直し	クスネガネ	グシ	くし	草分け	草刈	草刈りかご(草刈籠)	草刈り(草刈り)	クサ	くくり枕	クキ	クキ	区議	食いぞめ(食い初め)	区	キンマビキ	金納小作	禁鳥	キンダチ	禁物	キワダ	儀礼	きりぼし(切干し)	きりこみ	ギリギリ飴屋
一七	一七	一七	一四	一四	一四	一五	一五、一六、一七	一五、一六、一七	一五、一六、一七	一〇	一〇	一〇	一〇	二五、二〇	六	五	三	四	二	六	一〇	三	一五、一六、一八	三三	七三

組	組	熊野皇太神宮	クボ	首なし観音	区	区	区	区	区	クツキメオト	クツキメオト	くつき夫婦	クツキ同志	口寄せ	区长引渡し	区长の布令	区长提灯	区长タンス(区长簞笥)	区长代理	区长	口祭	口祭	くだまき機	クゾフジ	くぞの根
一七	六、三二、七二	三六、三七	一六	九、九三	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七、一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	

組衛生員	七	組々の共有	七	組の衆	一五	組分の巢	一五	区有の文書	一五	くら(土蔵)	七、六	くらがみさま	七	倉開き	一五	クラモチ	一六	栗拾いの夢	一六	栗生新道	一六	栗生峠	一六	栗生トンネル	一六	栗生の峠	一六	クルミの葉	一六	クルリ棒	一六	ク	一六	暮かんじょう	一六	ク	一六	桑切り庖丁	一六	桑コキ(桑こぎ)	一六	桑つみ	一六	桑とみ	一六	桑の仕立て方	一六	桑の種類	一六
------	---	-------	---	-----	----	------	----	-------	----	--------	-----	--------	---	-----	----	------	----	-------	----	------	----	-----	----	--------	----	------	----	-------	----	------	----	---	----	--------	----	---	----	-------	----	----------	----	-----	----	-----	----	--------	----	------	----

桑の葉	七	桑原イッケ	一八	桑原マケ	一八	桑ぶるい	一八	桑もぎ	一八	ケイアン(桂庵)	一八	ケイト(ケート)	一八	ケイト百姓	一八	芸人の鑑札	一八	敬老会	一八	ケエカキ棒	一八	ケエカキ棒	一八	ケエニク	一八	ケエリドキ	一八	ケゲン(半夏)	一八	ケゲン	一八	削りよぎ	一八	ゲタ(下駄)	一八	結婚	一八	相手	一八	契約	一八	年令	一八	結髪	一八	ケ	一八	下痢	一八
-----	---	-------	----	------	----	------	----	-----	----	----------	----	----------	----	-------	----	-------	----	-----	----	-------	----	-------	----	------	----	-------	----	---------	----	-----	----	------	----	--------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	----	----

玄関	一五	建築儀札	一五	建築工程	一五	ケンチン汁	一五	ケンチン汁	一五	げんのしょうこ	一五	玄竜地獄	一五	こ	一五	コイダンカギ(肉出しかぎ)	一五	コイダンモッコ	一五	コイニワ	一五	鯉のぼり	一五	講	一五	公益社	一五	集会所	一五	の役員	一五	公倉	一五	郷倉	一五	高山社	一五	こ	一五	麴踏み	一五	こうじ屋	一五	江州商人	一五	ごうしゅうや(江州屋)	一五	工場労働者	一五	庚申	一五	供養塔	一五
----	----	------	----	------	----	-------	----	-------	----	---------	----	------	----	---	----	---------------	----	---------	----	------	----	------	----	---	----	-----	----	-----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	---	----	-----	----	------	----	------	----	-------------	----	-------	----	----	----	-----	----

講	八三、九四、九六	さま	九四	様の膳	九四	の	九四	のカケジ	九四	の	九四	まつり(祭り)	九四	荒神さま	九四	荒神柱	九四	コウジンマユ	九四	交通・交易	九四	コウ	九四	香でん(香奠)	九四	紅白の餅	九四	弘法清水	九四	弘法大師	九四	弘法の岩穴	九四	公民館	九四	高友会	九四	行李	九四	氷餅	九四	こえだめ	九四	コエニワ	九四	子負い帯	九四	蚕影	九四	コカゲサン	九四	(こかげさん、蚕影山)	九四
---	----------	----	----	-----	----	---	----	------	----	---	----	---------	----	------	----	-----	----	--------	----	-------	----	----	----	---------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	-----	----	-----	----	----	----	----	----	------	----	------	----	------	----	----	----	-------	----	-------------	----

乞食	こしあげ	ゴザツキのぞうり	ゴザツキゲタ	小座敷	小作料	小作人	小作慣行	五作歳	コゴキ	九日	ゴクブクロ(五穀袋)	五穀	後家	五合餅	伍合塩	伍組	小組	こくびつ(穀櫃)	コグソッコ	虚空蔵様	コグソ	刻印	コキ桑	コガネメン	コガネ	五月の節供	蚕影神社	蚕影神社
	三〇、二	五	九	二七	三三	三三	三三	三三	七	一六	一四	一四	四	二五	一六	一四	一四	三五	一五〇	一五〇	一六	七	七	一六	一六	三	七、一五	二五

乞食神楽	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ	コシハタ
	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠	の奠

小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋	小間物屋

座	祭	サ	祭	歳	裁	財	さい	西	西	祭	賽	再	祭	婚	紺	金	こん	コ	コ	コ	コ
札	礼	エ	未	末	道	布	ふ	の	の	典	銭	生	品	約	屋	比	ん	ン	ン	ン	ン
行	事	モ	諸	諸	具	ジ	(財)	河	河	典	典	品	品	屋	比	比	び	ン	ン	ン	ン
事		ン	事	事	縫	ッ	布)	原	原	典	銭	品	品	約	屋	比	び	ン	ン	ン	ン
棺			事	事	縫	ッ	布)	和	和	典	銭	品	品	約	屋	比	び	ン	ン	ン	ン
			事	事	縫	ッ	布)	讃	讃	典	銭	品	品	約	屋	比	び	ン	ン	ン	ン
			事	事	縫	ッ	布)	讃	讃	典	銭	品	品	約	屋	比	び	ン	ン	ン	ン
			事	事	縫	ッ	布)	讃	讃	典	銭	品	品	約	屋	比	び	ン	ン	ン	ン

作	サ	さ	作	ア	サ	笙	差	笙	笙	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒
業	ク	ク	業	ソ	シ	の	上	板	板	サ	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着
着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着
着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着
着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着
着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着
着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着	着

三	三	三	山	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産
九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度	度
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の

三	三	三	三	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産	産
夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜
夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜
夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜
夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜
夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜
夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜
夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜

三隣	三よ	三和	三坂	三椎	三椎	三塩	三塩	三塩	三四月	三敷	三シ	三自	三仕	三仕	三死	三死	三自	三獅	三獅	三獅	三猪	三四	
亡	け	讚	峠	合	組	人	神	錢	日	居	ビ	料	着	じめ	養	養	作	産	子	歌	舞	魂	雀
三	三	二	一	二	一	二	三	二	一	二	一	二	三	三	一	二	三	二	一	二	三	二	一
三	三	二	一	二	一	二	三	二	一	二	一	二	三	三	一	二	三	二	一	二	三	二	一

四十九日	供養	も	四十	四十	ジ	下	下	試	下	下	シ	下	七	七	七	七	七	七	七	七	七	死	死
日	ち	の	日	日	ス	刈	刈	胆	せ	せ	タ	タ	ゲ	ゲ	ゲ	ゲ	ゲ	ゲ	ゲ	ゲ	ゲ	の	の
三	一	一	二	二	三	三	三	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	一	一	二	二	三	三	三	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

芝居	師走	し	し	死	四	鳥	シ	シ	凍	凍	事	シ	注	下	社	社	社	社	社	社	集	集	祝	不
居	女	布	び	亡	本	田	マ	マ	み	み	務	マ	連	生	生	生	生	生	生	生	会	会	儀	祝
三	一	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	一	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

住居	十五日	十五	十三	十	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野
居	ガ	夜	年	三	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送
三	一	一	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	一	一	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

レ イ	の 火	の 繩	の 十六日	の ことはじめ	の 神	の お松	の オタナ	だ な(棚)	三 が 日	行 事 様	行 飾	正 月	正 学 生 全 員	シ ョ ウ ウ イ ン	書 院	し ょ い つ こ	シ ョ イ タ (シ ョ イ タ 板)	十 一 日 正 月	純 農 家	用 具	狩 狐	呪 的 療 法	出 世 た た み	出 部 屋	出 と 育 児	
一 五	一 六	一 一	一 八	一 三	一 五	一 一 五、一 一六、一 一六	一 五	一 一、一 一五、一 一六	一 五	一 一	一 一	一 五、一 一五、一 一六	一 七	一 七	一 六、一 一七	一 三	一 元、一 一五	一 一	一 四	一 三	一 五	一 一	一 一	一 二 七	一 二 六	一 三 六

少 林 山	精 霊 送 り	精 霊 送 り	し ょ う ゆ 屋(醬 油 屋)	醬 油 め し	醬 油 し め 機	上 屋 柱	シ ョ ー ボ タ モ チ	消 防 組 織	消 防 組 織	消 防 士	小 便 竹	シ ョ ウ ウ ブ 湯	草 蒲	小 の 餅	少 年 期	少 年 会	少 年 会	シ ョ ウ ヅ カ の 婆 さん	シ ョ ウ ヅ カ イ(定 づ かい)	上 桑 族	条 桑	精 進 料 理	精 進 料 理	上 州 名 物	ジ ョ ウ ウ ゴ	
一 九	一 一	一 一	一 三	一 七	一 一 五、一 一六、一 一七	一 三	一 五	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一

ジ ン キ チ 袋	ジ ン ギ(仁 義)	神 官	白 モ ク(白 無 垢)	白 蛇 が 出 た 話	代 づ く り	し ろ ぐ ら(代 鞍)	素 人 踊 り	汁 か け 飯	汁 か け 飯	汁 か け 飯	白 張 提 灯	白 の 祭 り	白 佐 波 神 社	白 髪 め し	除 夜 の 鐘	初 七 日	初 七 日	初 七 日	シ ョ ウ ツ コ	初 産 語	食 用 語	諸 俗 信 等	食 俗 信	食 俗 信	遠 磨 寺	講 寺	
一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一

ス イ ト ン	水 天 宮	水 天 宮	水 神 社	水 神 さま の 祭 り	水 神 さま (様)	水 神 宮	水 神 宮	ス イ コ ン	ズ イ コ ン	親 類	新 曆 と 旧 曆	人 力 運 搬	シ ン モ ス	神 明 宮	人 宮	神 道 さ ん	神 道 さ ま	新 道 さ ま	新 道 さ ま	シ ン タ ク	親 戚	身 上	身 併 上	神 併 上	神 併 上	新 婚 旅 行	信 仰
一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一

すいのう	末っ子	須賀大神	須賀大神社	須賀大神の石宮	須川の三束雨	ス	過ぎたるもの	スギデツポウ	スキ同志	頭巾	ズキンカブリ	すくいちょう	スクエヤダンス	ズケ	菅笠	スゲ笠踊り	助郷	すけっこ	スストリ	硯箱	すすはぎ	すすはぎ(煤はぎ)	すすはぎの日	ズタブクロ	頭痛	ズツケ	捨て子	砂まき	住の俗信
一〇	五、六	七	七	一〇〇	一〇〇	一、三五	一、五、一〇	一三	一三	七	七	四	六	一〇	一〇	三	三	一八	三三	一〇、一六	一〇、一六	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三

スマンジュウ	炭	がま	やき(焼)	焼窯	スリ鉢(すり鉢)	スル	すわ様(諏訪さま)	諏訪社	諏訪信仰	諏訪神社	諏訪大明神	清温育	生活用度品	生産関係の方言	生産暦	青年会	青年団	青年の夜遊び	歳暮	セエメンバ	背負道具	背負ハンゴ	背負ビク(びく)	セガイ	セキ
一五	一四	一〇	一〇	一〇	一四、一七	一五	七、一〇、一七	一、一七	一、一七	一、一七	一、一七	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三

セザライ(せきざらい)	石尊宮	石尊さん	石尊びら	せきだ	石塔	赤飯	赤飯のオタキアゲ	堰普請	セキフンゴミ	せきれい	施主	施主	セチ衣裳	節供	節供レイ(礼)	節句びな	セツ酒	セツチュウラク	節分	節分の豆	セナカアテ(背中あて)	セナカーテ
七、一七	一三	九、一七	九	九	一〇	一八	一八	四、七	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

銭箱	背縫	背守	セリ	世話	善光寺参り	千社	参	染色	先祖祭	先祖祭	洗	前兆	膳餅	千匹	千匹	千匹	洗面器	洗面器	膳料	膳料	総入れ	総入れ	葬具	ソウケン(壮建)	相互扶助	葬式
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三

七 夕 一六、一七
 | さ ま 一七
 た に し 七
 谷 総 会 七
 タニノボリ 一六
 棚 松 一四
 種 物 入 れ 蚕 一四
 種 物 入 れ 蚕 一四
 種 を あ ず け た と ころ 一四
 田 の 芋 と り 一三
 頼 母 子 一三
 煙 草 刻 み 用 の 庖 丁 一三
 煙 草 切 り 庖 丁 一三
 煙 草 道 具 一三
 ダ バ ッ ツ ラ ラ 一四
 足 袋 一四
 旅 帰 り 一四
 多 間 取 型 一四
 | の 民 家 一六
 タ マ マ ヲ (玉まゆ) 一六
 玉 ミ ツ 一七
 魂 呼 び 一三
 ダ メ オ ケ 一四
 タ ヤ 一四
 タ ラ イ ガ イ 一四
 | の お ま つ り 一三、一五
 樽 (ハナ) 一四
 タ ル イ レ (樽入れ) 一六、一七、一四
 ダ ル マ 一七

だ る ま さ ま 一五
 タ ロ ッ ペ 一七
 俵 一四
 | こ ろ が し 一四、一六
 単 位 一六
 だ ん ご (団子) 一六、一七、一八
 | じ る (団子汁) 一三
 だ ん ご だ ん ご 一五、一七
 誕 生 一六
 | 日 一四
 | 餅 一三、一三
 タ ン ス (簞笥) 一六、一四、一三
 | の こ や し 一四
 ダ ン ナ 一四
 | ザ ン キ (座敷) 一四
 単 墓 制 一四
 ダ ン ロ (暖炉) 一三
 ち 一三
 チ ア ダ ッ ク ボ 一五
 地 お ど り (地踊り) 一五、一五
 地 下 足 袋 一四
 力 く ら べ (力比べ) 一四
 畜 産 用 具 一三
 地 形 名 一四
 地 獄 一四
 地 芝 居 一六、一三
 地 神 宮 一三
 地 神 さ ま (様) 一三

地 す べ り 一三
 地 租 改 正 一三
 地 蔵 様 一六、一六
 父 の 盃 一三
 地 の 主 一三
 チ バ チ の う じ 一七
 チ バ レ モ ン 一七
 地 方 歌 舞 伎 一三
 地 ま つ り (地祭り) 一三
 地 名 一三
 地 名 よ み こ み 俚 語 一六
 地 名 伝 説 一五
 茶 入 一六
 茶 が ま (茶釜) 一四、一五
 チ ャ ッ コ 一三
 茶 道 具 一六
 茶 の 間 一三
 チ ャ ボ ピ エ 一三
 茶 呼 び 一四
 チ ャ ン ガ ラ チ ャ ン ガ ラ 一四
 ち ゃ ん ち ゃ ん 一六
 中 耕 作 用 具 一三
 中 食 一三
 チ ャ ウ チ ャ ウ ダ ン ゴ 一六
 中 年 一六
 チ ャ ウ パ 一六

中 門 附 け 一三
 中 宿 一六、一六
 チ ャ イ チ ャ イ 着 (ちよいちよい着) 一六
 巾 旗 一四
 ち ょ う し 口 一六
 朝 食 一三
 手 水 鉢 一三
 朝 鮮 シ ョ イ ッ コ 一三
 ち ょ う せ ん び え (朝鮮ビエ) 一三
 (朝鮮ビエ) 一三
 チ ャ ウ チ ン (ちょうちん、提灯) 一四、一六、一三
 調 度 品 一三
 チ ャ ナ (手斧) 一五、一三
 | 仕 上 げ 一七
 帳 場 一四、一四
 調 味 料 一六
 調 理 用 具 一四
 チ ョ ッ パ ン 一四
 チ ャ ヲ ボ 一四
 ち ょ ん ま げ 一四
 ち り め ん 一六
 鎮 守 祭 礼 一四
 鎮 さ ま (様) 一三、一四、一六
 | の お ま つ り 一三
 鎮 守 の 秋 祭 り 一七
 鎮 守 の 鍵 一三
 鎮 守 の 祭 り 一六
 鎮 守 参 り 一五
 鎮 守 森 一五

冬 至 六三
 講 六
 とんじんまげ 四
 トウセー 四
 同族間の民俗 三、七
 道祖神 九、六、八、三、九
 道祖神子 二六
 道祖神さま 二五
 道祖神祭り 九
 道祖神やき 一三
 道祖神の厄落し 一三、二〇
 湯治 一五
 トウチャン 七
 盗難除け 一六
 トウネツコ 四
 頭髪 三、四
 豆腐 一六、九
 釜 二五、二六
 汁(とうふ汁) 九、七
 田楽 二六
 トウモロコシ 三、七、六
 (とうもろこし) 三、七、六
 灯用具 三二
 棟梁 三三
 棟領おくり 三三
 灯ろう 七一
 ドウロク神祭 一〇
 どうろくじんさま 一〇
 道陸神焼き 二二

道路普請 七
 戸鹿野の稲荷様 六、七
 戸鹿野の東源寺 七
 度器 三三
 研師 一
 とげぬぎの即効散 一
 トコ板 一五
 床入れ 一四
 床の間 三九
 床柱 二〇、三
 年祝 一四
 年男 一五、一六、一三
 歳神様 一三
 年神棚 一四
 年越しの会 一四
 年徳神 一五、一三
 年取りの晩 一五、一三
 年まわり 一五、一三
 ドジョウは片目 一三
 土蔵 三、七、六
 トツキトウバ 一〇
 毒けし売り 七
 徳利 二九
 十寸嫁ご 一四
 トトクイゲ 一三
 ドドメ 一四
 隣組 一四、一〇
 利根川 一
 利根のマブシ(まぶし) 一

トノサマ 八三
 ドビキ 六
 トビ職 三
 トボ 三
 トボーグチ(トボロ) 一六、一七、一五
 土木労働者 四
 トマ 一〇
 土間 一、九、四、一五
 斗榭 三、三
 トマの座敷 一五、一六、一〇
 トマノデイ 一〇
 トマリゾメ(泊りぞめ) 一七
 土まんじゅう 一、一
 ドムロ飼い 一四
 友引き 一四
 富山の置き藜 七
 富山の藜売り 一、五
 富山の藜屋 一、六、一三
 寅の日 一四
 トリ上げ 一七
 トリアゲバアサン 一七
 トリアゲ水 一七、一三
 鳥などの啼き声 一〇
 トリムスビ 一〇、一四
 取り結びの式 一〇
 鳥もち 一〇
 鳥山イッケ 一
 鳥山マケ 一

ドロツカイ 一六
 とろろいも 七
 とろろ御飯 九
 ドンドン焼き 一五、一六、一〇
 (どんどんやき) 一六、一〇
 トンビ 九
 ノハネ(の羽) 一六、一五
 ドンブリ鉢 一三
 呑竜様 一三
 呑竜坊主 一三
 内縁 一四
 ナイラ(ネエラ) 一四
 苗床づくり 一四
 苗とり 一四
 ナエ日 一四
 苗間の田植 一三
 苗間のもち 一三
 永井維周郎 一三
 長柄ゆう流 一三
 長柄ゆう流 一三、一六
 仲買人 一三
 長着 一三
 流し 一三、一七
 ナガダチ 一五
 長持 一七、一六、一四
 ナゲモチ(なげもち) 一三
 長だんす 一三
 仲人 一三、一四、一六

親 五
 近所あいさつ 三
 の草履きらし 三
 七うそ 三
 七越し 二
 夏越す 一
 なす 元
 謎 二
 菜漬 六
 名づけ親 三
 夏ブルマイ 元
 (夏ぶるまい、夏振舞) 一
 夏祭り 七
 七色唐がらし 七
 草 七
 会議 七
 がゆ 二
 ぞうすい(雑炊) 二
 ゾウセイ 二
 ならずの歌 二
 ナナコ 五
 ナナコ 五、三元

七日がえり 五
 ナのヒバ 六
 鍋 六
 生枝神社 八
 生枝の観音様 八
 生枝の「ええちよう祭」 一、二、三、四
 生アズキ 五
 なま墓場 一
 なみのはな 九
 ナマリ 三
 ナラツクワ 三
 ナリ木ぜめ(成木責め) 六
 成田山のお守り 七
 ナレアイ 七
 なわ 四、四、七
 縄 一
 苗代 五、二
 かき 六
 の水口 六
 縄な い 三
 縄より機 三
 ナンゴ 三
 ナンド(納戸) 二
 難産 二
 荷鞍 二
 荷車 元、二
 ニシ(煮しめ) 一、二、三
 二十一夜講 六
 二十一夜待供養 九

二十六夜講 六、七
 二十三夜まぢ 七
 二十三夜和讃 二
 二十二夜講 六
 二十二夜待 六
 入棺 一、二、三、四
 新田一族の子孫 九
 新田義宗 三
 ニナイモツコ 五
 二宮尊徳翁 六
 ニバツ(煮初) 一、二、三、四
 二百三高地 四
 二百十日 九、七
 ニユウ 二
 ニユウガラサマ(様) 一
 ニユウの神様 三、五、六、七
 ニユウボツチ 二
 夜神楽 一
 ニワカ女房 二
 ニワトコ 一
 鶏の給水器 三、三、三
 庭見 三
 ニワヤスミ(ニワ休み) 一
 妊娠 二
 人足代 三
 縫うとき 二
 ヌキダレの土砂 一
 ヌケル 一
 ぬし 一

沼田城用水 一、六、五、七
 沼田のお三夜様 二
 沼田の鬼子母神 七
 沼田の行商 三
 沼田のコーヤ 五
 沼田の西の宮 六
 スルメ 六
 ね 六
 ネット 六
 根刈仕立 一
 寝立 一
 寝のとりいれ 一
 猫 一
 ネコ(むしろ) 九、一〇、四、三、四、三
 ネコ(あんか) 三
 ねこあみ機 三
 ねこばた 三
 ねこ筵 三
 猫イジメ 三
 ネズミ(ねずみ) 三
 ネットイ(根っ杭) 一
 根深石 四
 ねりおしろい 四
 ねり 四
 ネリゴイビク 五
 根利の奇応丸 五
 年忌 一
 年忌 一

年	始	五、五、一、五 一、七、七、三
う	け	一、四
ゾウ	リ	一、五
まわり(日)		一、五、五、一、五 一、五、一、六、二
年中	行事	一、五、一、五、三
年始	礼	一、五、五
年頭	頭	一、五、五
ねんね	こ	一、五、六
念仏		九、三、六、一、四、七 一、六、〇
講		七、七
玉		一、四、七
和讃		一、〇、三
年奉	公	一、六、一
年令階	層	一、六、一
年令階	梯	一、六、一
野位牌		一、六、一
農業労働		元
農業協理事具		七、七
農業研究組合		三、三
農事組合		七、七、七
農事実行組合		七、七
農事の相談		一、五
農道の普請		一、五
農間のかせぎ		一、四
ノウメエヤスミ (農前休み)		一、四、三、三、一、四

農休	み	一、六
鋸の目立て		三、六
鋸屋		三
ノン餅(のし餅)		三、一、五
ノゾコミ		六
のぞっこみ		一、六
ノチザン(後産)		一、〇、二、六
後産の捨場		一、六
ノテヤマ		一、六
のどにものがつつか		五
えたとき		三
野火つけ		一、四
野辺送り和讃		一、四
野辺の式		一、三、一、五
ノボリ(のぼり)		七
のぼりたて(の立て)		一、四
ノメシモン		三、七
ノメシモンノサンゾク		三、七、三
ワラジ		三
ノン		一、六
は		元
歯痛		五、六、八
灰		一、六
灰		五、六、八
はおり(羽織)		一、六
蓋そうじ		一、三
歯がため		一、三
歯固め		一、三
墓なおし(直し)		一、四、一、六
馬鹿のオオグイ		一、六

馬鹿の三杯汁		一、六
墓		五、六
はかま(袴)		五
墓参り		一、六、七、三、一、五
ハカリサン		三
ハキタテイワイ		三
掃立調節		三
ハギマブシ		三
はきもの		三
白楽(馬喰)		三、四
伯黒権物		四、五
羽黒権物		六
化		一、七
ハゲン		一、六
羽子板		三
箱階段		三
箱せん(箱膳)		一、六、三、八
箱そり		三、七
箱梯子		三
箱枕		〇
は		六
橋かけ		三
馬車		五
柱		一、〇、一、六
はたお		三、一、〇、三
はたお		三、一、〇、三
畑うらない		三、四
はたけ仕事(畑仕事)		九、三、七
畑の面積		一、六

破談		一、五、一、四
ハチ(蜂)		元
蜂にさされた場合		元
八十八夜		元、二、六
八間取型		一、六
はちまん様(八幡様)		六、三、〇、七
八幡様の御使		元
八幡様の手		元
八幡厘		六、四
ハチワル		四
初午		三、六、三、八、三 一、五、一、六
の稲荷祭		一
の		一、四
初絵売り		一、五
発火		三
八海山		九、九、七
二十日正月		一、五、一、二
はつがみなり(初雷)		一、〇、一、三
歯ツクソ		元
初子(初児)		五、五、三
ハッサク(八朔)		一、六、一、六
ハッサク(八朔)		一、六、一、七
ハッサク礼		三、五、一、五
(八朔レイ、八朔礼)		三、五、一、六
初節供(節句)		一、六
八丁ジメ(じめ)		九、二、九
ハッ		三、四
ハッ		三、四
ハッテボシ		三

はらいた	ハヨ一ナワ	はやり目	ハヤシモチ	早鐘	ハバキ	歯のぬけた夢	ハネムシロ	花和讃	花輪	花嫁	ハナムスビ	ハナガラ	ハナカタ餅	ハナ菓子売り	花菓子	ハナカキナタ	ハナ売り(小正月)	ハナ(小正月)	ハナ(御祝寄附金)	馬頭観世音(馬頭観音)	鳩	夢嫁	初孫	初参	初動	ハッビ	
二五	二五	元	元	元	七	四	四	三三	二一	二二	二九	二九	二五	二一	二二	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一

半身上	晩秋	半ザマ	パンコンゲタ	半夏	パン	班着	晴着	春祭	春彼岸	春の祭	春の社	神	山	講	榛名	の歌	春駒	春祈禱のご幣束	春ぎとう(祈禱)	春蚕	ハリバクチ	針供養	ハリウチ	梁	ハラミパン(箸)	腹かけ	腹帯
三三	三三	元	九	一	五	六	三三	三三	三三	三三	三三	六二〇〇	六二〇〇	六二〇〇	六二〇〇	一〇	二五	二五	二五	二五	三三	三三	二〇	二〇	二〇	七	八

ヒキ飾	挽き	の中日	のまいり	月	彼岸	東入	ヒカガリ	控えの間	ひえのにかた	ヒエドロ	ヒエ、アワ	ヒエ(ひえ、稗)	火打金	火打石(燧石)	火打金	火打石(燧石)	はんめん	班の当番	阪東	半天半日	はんてん(半天)	パン	班長	ハンダイ	パンタ(番太)	
二一	三五	二七	二七	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一

ヒトフミダイ	ひとひろ	ひとにぎり	ひと七身	ひとツ身	ひとえもん	ひでり年	ヒデ鉢(ひで鉢)	ひつつめ	ヒツジ祭	ヒツカケ着物	たげん	緋ちりめん	ビショウマイ	ビシヤモンさん	ヒン餅(ひしもち菱餅)	ひじき	ひこ帯	ひこらきびん	樋口マケ	樋口イッケ	ビ	ヒキワリ(挽割り)	ヒキモン	引き物	引き出もの	ヒキツケ
二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一

へ ち マ 元
 別 共 有 突、七
 ヘデエ(へでえ) 三、三〇
 紅 四
 (へび(へび、蛇) 元、元、元
 蛇のキヌ 六
 蛇の夢 三三
 蛇よけ(除け) 六
 へ ヤ 元、元、〇元
 弁 慶 八五、八六
 へんゲール 一〇
 便 所 三、二番、八三
 神 八五、二元
 の 神 様 三三
 まいり 五、八六
 弁 天 様 八、九四
 弁 当 三三
 弁 当 箱 二六、三七
 ほ
 ホーエンさま 三、一四
 (ホーエンサン) 元、三、一三
 ホーキ(ほうぎ) 七
 ホーキモロコシ 三〇
 方 言 四、一三
 奉 公 人 一七
 の 休 息 二五
 豊 作 祝 二五
 坊さんのお相伴 一四
 坊さんの年始 一五

棒 ジ メ 一三
 紡 織 色 染 三
 坊 主 四、一、二、五
 泡 瘡 送 り 元
 ほうそう神 六
 ホーソー神様 三三
 疱 瘡 棚 元
 ホー ト ウ 三
 報 徳 社 六、七、六
 報 徳 社 六
 長 一四
 豊 年 祝 い 元
 豊 年 祭 り 元
 ホ ラ バ 九
 ホ ウ ビ キ 三三
 棒 ま ぶ し 三
 訪 問 着 二、四、五
 ホーロク(ほうろく) 二、三、三
 行 器 一五
 ポ ク 六
 ホ グ イ 三三
 火口(ホクチ) 三三
 保 護 係 三
 ほ し が き 三
 保 存 食 一五、一六
 武 尊 一
 様 一〇、九、六
 社 一〇、一〇、一〇
 信 仰 一、八

神 社 八、八、三
 保多賀大明神 三三
 ホタカ参り 一
 武 尊 祭 一
 ボタモチ(ボタ餅、ぼたもち、ぼた餅、牡丹餅) 三、四、一〇、一
 一、七、一七
 一、八、一〇
 ボ タ シ 桑 元
 墓 地 一、二、四、一、四
 一、五、一、四
 ポ ッ ク リ 九
 ホ ド 四
 仏 一
 ホ ド イ モ 一
 仏様のお祝い 一
 ホ ト ト ギ ス (ほととぎす) 一八、一七
 一
 ホ ド 焼 一四
 ほどやきもち 三
 ホ ホ ジ ロ 一〇
 ホ マ チ 元
 ホ ラ 貝 七
 堀 さ ら い 七
 盆 肥 元
 盆 三、三、一、四
 一、七
 踊 り 六、九、一〇、三
 一〇、一七、三
 かんじょう 七
 ご 一
 様 迎 え 一七
 一七

ほんだち(木裁ち) 二
 盆 棚 一、一、七、一、七
 盆 月 一、一
 ボンデンさま 元
 ボンノクドの毛 三三
 盆の十六日 四
 盆の高灯籠 三三
 盆の念仏 一
 盆の日取り 一
 盆の花(盆華) 一、七、七、三
 盆分家 一
 盆まゆ 一
 盆礼 五、一、七、三
 ま 一
 埋 葬 許 可 書 一、一、四、四
 埋 葬 一
 マ イ ダ マ 一、五、六、一、一
 前 け 八
 姿 六
 ま き (新) 元、元、元、五
 マグソ(馬糞) 元
 枕 一〇
 まくらだんご(枕団子) 一、一、一、三
 枕 な お し 一
 枕めし(枕飯) 一、一、一、三
 マ ク リ 一
 マ ケ 一、七、六
 ま げ 五

マケ氏神	空
マケの稲荷	空
呪す(楸)	二七、三五
かざり(松飾り)	一五、一六、一八、二〇、二二、二五
末期の水	一四
マツコブチ	二四
松迎え	一八
松本錦枝	二四
祭り	七
世話	九
世話人	六、〇、二五
間取	二七
マブシ(まぶし、族)	一〇、三三、三五、四、四、五、一六、三三
まぶし織り	一五
まぶし織機	三三
マブシガキ	一五
まぶしたて	一五
マブシ作り	一五
マムシ(まむし)	一七、一八、一八
マメガラ	一六
豆投げ	一六
豆まき	一六
魔物	一七
マユ(まゆ、繭)	四、九、二七、三三、三三
繭買商人	三三

マユカキ(まゆかき)	三〇、三三、三五
まゆかき人足	三〇
マユゲ	四
まゆだま(繭玉、マユ玉、まゆ玉、マイダマ)	一、九、一〇、一五、一五、一五、一六、一六、一六、一六、一六
マユダマ木	一五
繭の売り先	一五
繭の乾燥	一五
まゆの出荷	一五
魔除け	一四、一六
まりつき歌(穂つき唄)	一四、一六
まわらた	一〇
マンガ(馬鋏)	一五
アライ(洗い)	三、三
万才	一〇、一八、一六
まんじゅう(饅頭)	一四、一五、一七
まんじゅう笠	一七
饅頭投げ祭	三〇
マンドウ(万灯)	一三
マンマ	一七、一七
み	一六
み(箕)	一〇、一七、一七
ミアワセ	一四
三河万才	一四
ミヨシ(御輿)	一七、一七
ミソ(みそ)	一七、一七
みそをつける	一四

みそ汁	一三、一五
みそたき	一四
味噌玉	一六
味噌つくり	一七
味噌つけ(ミソ漬)	一四、一五、一六
味噌つけまんじゅう	一五
ミソフミグツ	一七、一七
ミソ豆	一三
みそまんじゅう	一七
水浴び	一七
水がみなりさま	一〇
水口	一〇
水ダメ	一〇
水番	一三
水不足	一三
道の争い	一三
道ぶしん(普請)	一四、一五、一七
ミツイタチ	一六
三つ打	一六
三つ口の子	一三
三つ坊主	一三
ミツミ(三ツ身)	一三
三峰講	一三
三峰	一三
三峰さま(様)	一三
三峰山	一三
ミネンドウ	一三
ミノ(みの)	一三
ミノツクビ	一三
巳の日	一三

ミミズ	一三
耳だれ	一三
耳の神さま	一三
耳ぶたぎ	一三
三柱神社	一三
宮大工	一三
苗字帯刀	一三
民間療法	一三
民間具	一三
民俗知識	一三
ミンブチ	一三
六日爪	一三
六日山	一三
六日縁仏	一三
無縁	一三
迎え(嫁の)	一三
迎え盆	一三
昔話	一三
麦うち	一三
麦打ち杵	一三
麦かり(麦刈り)	一三
麦こうじ	一三
ムギこなし	一三
麦ごはん	一三

麦つき杵 三五
 麦作り 六
 麦つばな 一六
 麦の収穫 四
 麦ブチ 七
 麦まき(蒔き) 六、四、一七
 麦めし 三、三
 ムコ(婿、聾) 五、五、六
 三〇、三〇、三〇
 二六、三六
 一四、一四
 一六
 聾いじめ 一四
 ムコウハチマキ 七
 婿まぎらわし 一四
 ムコ渡し 一六
 ムジナ(むじな) 一〇、一五、一六
 ムジナのしかえし 一八
 虫歯 五、九、一〇
 一八
 虫歯除け 一八
 虫封し 一六、一六、三
 一六、一六、三
 虫焼き 一六
 無情和讃 一〇
 虫除け 一〇、四、三
 ムシロ(むしろ筵) 三、三、三
 むしろ織り機(筵機械) 三、三、三
 むしろ機のおさ 三、三、三
 むすび 二、四
 娘の会 七
 棟上げ 三、三、三

餅(棟上げのもち) 三、三
 村入り 六
 村から出るもの 四
 村共有 一、七
 村契約 六
 村境 三
 村制 六
 村総裁 六
 村総会 六
 村総有時代 六
 村尽し 一〇
 村と村とのつきあい 六
 村に来る芸能 七
 村に入って来た職人 七
 村に入って来る商人 七
 村人足 三、三、七
 村の奇人 七
 村の規約 七
 村の共有財産 七
 村の構成 七
 村の財産 七
 村の祭典がかり 一〇
 村の三役 三
 村のしくみ 三
 村の事件 七
 村の諸職 三、七
 村の人物 三、七
 村の組織 三
 村の春祭り 七
 村の役員 一、七

村八分 六
 村まつり 四
 村持ち山 三
 村役 三、三
 村寄合 六、三、七
 目め 六
 明治三十八年のキキン 六
 メイセン 五
 銘旗 一、一
 命名 三、九、五、一八
 メエダマ 一六
 メカゴ(目かご目籠) 三、三、三
 メギバラ 一〇
 メケバ 一
 飯しゃもじ 一、一
 メシビツ 一
 目立てばさみ 三、三
 目つぶし 三、三
 メド銅い 三
 目の神さま 九
 目ハジキ 一、一、一
 メリンズ 一、一、一
 メンコ 三
 メンパ(めんぱ) 三、三、三、三、三、三
 めんばめし 三
 メンマ 四
 木材運搬 五

木製白 三
 木炭 一
 もぐら 一、一、一
 目除け 一
 茂左衛門様 三
 も 六
 もち(餅) 三、三、三
 モチグサ 一、一、一
 もちつき(餅つき) 三、三、三、三、三
 もち投げ 三
 餅なし三ヶ日 一、一、一
 モチビツ 一
 モッコ車 一
 モノヅクリ(ものづくり、モノ作り) 一、一、一
 モノビ(ものびモノ日) 一、一、一
 喪服 一
 もみまき 一、一、一
 木綿 一
 桃太郎 一、一、一
 モモヒキ(ももひき) 一、一、一
 ももわけ 一、一、一
 桃われ 一、一、一
 モリヤサマ 一、一、一
 モリヤサマ 一、一、一

諸田家のウジ神 一七〇
 諸田 マケ 一七
 師のお諏訪さま 八
 もんつき(紋つき) 五
 紋つきの重ね 三
 紋 所 一
 モンバイ(モンペー、
 モンペイ、門牌) 一四、一四、一四
 モン 三、六、八
 モンペばき 六
 や ヤ
 ヤアーヤアドリ 一五、一七
 (ヤアヤア取り) 一三
 ヤアヤア取り祭 一三
 やかいまぎ 四
 ヤカガシ 一三、一四
 ヤカ ヤ 四
 焼 カ 七
 焼 印 七
 ヤキゴメ 五
 やきはた 三
 ヤキヒガシ 一六
 八木 節 一三、一四、一五、一七
 八木節の盆踊り 一五
 ヤキヘイガシ 一五、一六
 ヤキヘガン 五、一六
 ヤキボ(焼き穂) 元
 やきもち 三、三、一六
 焼 餅 粉 四
 夜 業 九
 役員 改選 一三

役員の改選 七一
 厄 落し 三三、一〇
 役がわり 一七
 役 決 め 一三
 やくじま 元
 薬 草 一
 厄 年 三〇、三三、一五
 厄 年 分 三〇
 厄 年 の人 一六
 疫病よけ 九
 ヤグラ(やぐら) 三、一〇、四
 や け ど 三
 一の火もどし 三
 やげん(葉研) 二四、二五
 屋 号 六、一六
 野菜の貯蔵 六
 八坂神社 一七
 夏まつり 一七
 香具師 一〇
 屋敷、イナリ、
 (いなり、稲荷) 一六、一六、一七
 屋敷 六、九、一〇、
 一四、一五、
 一六
 屋敷稲荷祭 一八
 屋敷内に祀る神 六
 屋敷の稲荷 一四
 屋敷の守り神様 一四
 屋敷 祭 一五、一六
 休ミ 祝イ 元
 休ミダンゴ(休みだんご) 元、一六

休み餅 元
 八十二 一五
 矢立 三三
 ヤツコ 一〇
 雇い人 一六
 ヤナ 一四
 屋根がえ(屋根替) 三、一七
 屋根の石 一
 屋根のぐし 一四
 屋根無尽 三
 屋根 一四、一七
 やぶ入り 一六
 ヤマイヌ(山犬) 一四、一五、一六
 山入 一
 山 神 一五
 ヤマギ(山着) 一〇、一三
 山出し 三
 ヤマツキ(山着) 七
 山でつぼう 七
 ヤマトチリメン 五
 大和の薬屋 五
 日本武尊 一三
 山鳥 一四
 山の神 三、一六、一八
 山の口(山のくち) 六、一三、一五
 山の口の日 四、一五、一六
 山の口開き 一六
 山へ入ってはわるい日 一六、一六
 山へ入らない日 一四

ヤママユ 五
 山道普請 七
 ヤマユクの根 一七
 ヤリ(檜) 一六、一五、一
 ヤレテ 一六
 ヤンメ 九
 ゆ 一
 結納 一五、一三
 結納金 一五
 結納録 一五、一七
 目録 一五
 夕恵比須 一
 夕客 一
 夕食 一
 夕立 一
 夕虹 一
 夕はん(夕飯) 一三、一三
 夕めし 一三
 湯灌 一四
 雪かき 一七
 ユキグツ(雪ぐつ) 一三、一
 ゆくえふめい 一四
 ユズリ 一四
 ユズリグツ 一四、一三
 ゆっこおび 一
 ユテ 一七
 弓 一三、一四
 弓張りちようちん(提灯) 一七、一六、一
 夢 一六

夜あそび(夜遊び)	三〇、六、六
よい夢	一五
八日餅	一八〇
養鶏用の水与え器	三六
養蚕	一〇、二、三、七
養蚕一般	三三
養蚕一籠	二七
養蚕組合	三、七、七
養蚕信仰	八
養蚕の網	四
養蚕の神	七
養蚕の組合	七
養蚕の法	七
養蚕用人	七
養蚕用具	二、三、三〇
養蚕の子	七
養蚕の病氣	三三
用 水 堀	三三
ヨウノメ	七
ヨーハン	三三
洋服	六
ヨキパツリ	三三
ヨコザ	二〇、二四
横パチマキ	七
ヨコメツブシ	元
四十八のハジカキッコ	三〇
ヨセグロ	四七

寄せ太鼓	三〇
ヨソギ(よそいき)	五、六、〇
ヨツコ	七
ヨツ子	三三
ヨツジロ	四
ヨツツケ	元
四ツ身	〇、二
夜なき(夜泣き)	五、三
夜なきのまじない	九
ヨナベ(夜なべ)	九、七、四一
夜なべ仕事	四、六、八一
夜なべ	四
夜番の番札	六、充
呼び戻し	三三
予防委員	四
四間取型	六
民家	一五
ヨメ(嫁)	三、五、六、二 一〇、三七 一六、三三 一四、三九 一五
よめいり(嫁入り)	五、三、元
嫁入り道具	二四
嫁をはき出す	二七
嫁が家に帰れる日	一四
ヨメギラ	五、三、三
ヨメゴ	三
よめに来た年にかいこが	三
あたる	三
嫁のお茶	元

嫁の近所まわり	一四
嫁のこづかい	七
嫁の里	五、三、七、八三
嫁の里がえり	四、四、五、五
嫁の年始	一五
よめむこ	五
よめむこの里がえり	四
ヨメワタシ(ヨメ渡し)	三、元、四〇
よもぎ	一六
ヨモギとショウブ(蓬と菖蒲)	一六、八五、二六
夜のひと	元
夜のもの	元
ヨロク	七
楽にする	一四
ランブ	三三、三四
離縁	五、四、二
理話	三三
長事	三三
リヤカ	六
りゅうたつ(竜タツ)	一四、二四
龍吐水	三三
俚謡	一六
良縁	二五
料理書	一四
旅行習俗	五
林業	四

隣保	一四
臨終	五、七、七、七
長	六
れ	六
冷害	三
恋愛結婚	三
ろ	四
老人	六
老	六
—会	五、六、七
—会の膳枕	七
ローソク立て(蠟燭立て)	三三、三三
労働唄	一五
労働慣行	六
労働事情	四
労働者	七
老年期	三六、三三
六月一日	一五、一五
六角ちようちん(提灯)	三三、三四
六観音	一〇
—念仏	一〇
六間取型	六
六算よけ(六算除け)	一〇〇
六地蔵	五、九
六尺ふんどし	一四、一五
六文銭	八
ロソウミシヨウ	六、一四

る端の作法	三
わ	
若い衆	六、六、三、元 五、七〇
ワカイモン	六三
若木迎え	一五、一五
若衆	二四、八〇
若頭	六
若組	空
若妻	空
若水	空
若迎え	一五、一五
若者	一五
若者組	六、六、一 六、六
ワカレンマダ(わかれし まだ、わかれ島田)	三、五、一、一 一、一
ワケク製	三
ワケイシユ	空、六
ワケーンシヤ	七
和讃	一〇三、一〇
和會	一四
輪ジメ	一五
ワタ(わた)	一七、六
わたいれ	六
綿くり機(綿繰機)	三六、三七
ワタゴサマ	九
綿帽子かけ	三〇
わたまし	三、三
わたな	三三
蕨のお宮	二九、三、三七 八三

蕨の叩き杵	三七
ワラグツ	
(わらぐつ、わら靴、 蕨杵)	八、九、七、六 四、三〇
わらぐつの型	三〇、三二
わら(ワラジ、皮草鞋)	九、四、六 六、三、三〇
わら仕事	四、四
ワラジヌギ(草鞋ぬぎ)	六
ワラジョウリ	一五
ワラゾウリ	八、九、一五
(わらぞうり、わら草履)	一五、三〇
ワラットツコ	八二
ワラツト	六二
ワラデツボウ	二、七、七
(ワン鉄砲、蕨鉄砲)	二、七、七
ワラニユウ(蕨ニユウ)	一五、一、一
わら人形(蕨人形)	一五、一、一 一、一
わら人形作り	一五、一、一
ワラビ	七
わらびの根	七
蕨布	一〇
童唄	一九
ワラマブシ(わらまぶし)	三、三、七
ワラ屋根	一四
蕨屋根の祠	八三
ワナ(わんな)	一四

群馬県民俗調査報告書第十一集

白沢村の民俗

昭和四十四年三月二十八日印刷
昭和四十四年三月三十日発行

非売品

編集兼発行者

群馬県教育委員会

前橋市大手町一丁目一ノ一

発行者

群馬県教育委員会事務局

前橋市元総社町六七

印刷所

朝日印刷工業株式会社

電話 614 三六七